二　中等教育

大東京の小學教育が、近時益々充實整頓されつゝあるに反し、中等教育の貧弱さは如何に同情の眼を以てするも、到底時代の進運に伴つて居るものとは考へられぬ。

一體大學教育は國家自らが之に當り、中等教育は府縣が之に當り、小學教育は市町村が之に當るのが我が國の傳統的大方針であるが、此の點から觀て帝都今日の中等教育の有樣は、一國文化の中心地として誠にお恥かしい次第である。即ち文化開明の今日、中等教育は殆ど義務教育と選ぶなき程度に迄進んでゐるに拘らず、これが經營の責に任ずべき當局の施設が時代の進歩に遲れたためか、現在では大東京の中等教育の大部分は、之を擧げて民間の私學に委ねられてゐる狀態であつて而も是等の私學の多くは內容充實せず、設備に懸隔があり、學校經營の營利化が行はれて、成績の一向見るべきものなきは誠に惜しいことであると云はねばならぬ。

最近の調査によると、東京府下に於ける各種中等學校は左表の如く二百十六校で、其の生徒數は十四萬四百九十四人の多きに上る。

（昭和四年五月末現在）

學校別	經營者	學校數	生徒數
師範學校	府立	三	一七六〇（人）
中學校	公私立	五四	四三四九三
高等女學校	同上	七二	四二六二五
實科女學校	同上	五	一六五〇
各種實業學校	同上	六七	四三三二〇
認指定各種學校	私立	一五	八六四六
計		二一六	一四〇四九四

今や大東京の小學卒業生の約三分の一は、中等學校に現に進んでゐる上に、この傾向は年と共に益々其の濃度を加へつゝあるに拘らず、官立府立の中學校と女學校は未だ二十校內外に過ぎず、私立は數多けれども設備に懸隔があり內容に優劣が著しいので、玆に猛烈なる學校選びの競爭となり、慘憺たる試驗地獄を現出し、父兄をして子女の教育難を叫ばしめ、進學青少年の精神上思想上に料り知るべからざる惡影響を與へつゝある。されば中等教育機關の充實と整備とは、眞に大東京に於ける教育事業當面中刻下の急務であると思ふ。

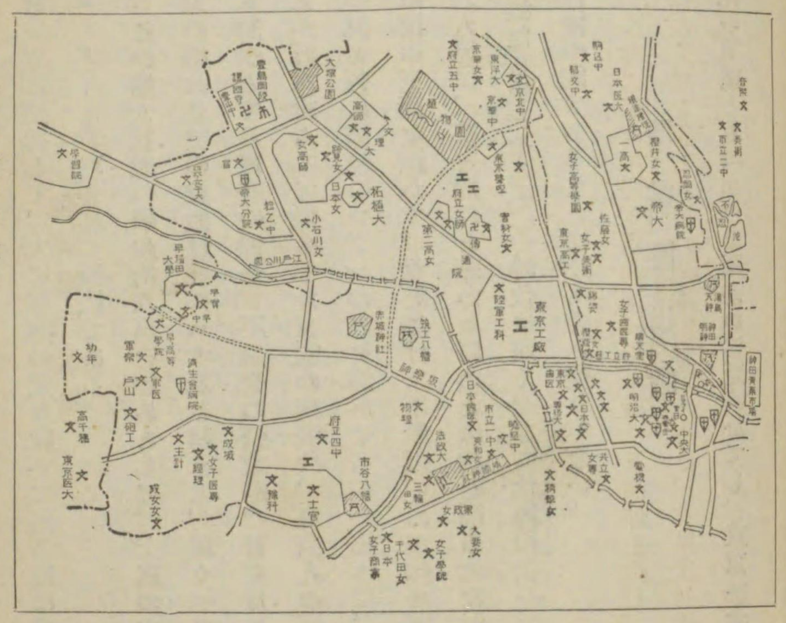
三　高等專門教育

東京は帝都として一國政治の中心であると同時、國家文教學術の策源地である。地方の青年は風雲の志を抱いて、東京に馳せ參ずるものが年と共に多くなつて來た。更に一方では文化の進歩に伴つて學問が段々と專門的となり、研究が漸次その密を加ふる樣になつて來たので、相俟つて帝都の高等專門の教育機關は近年益々多きを加へ、市の內外隨所に所謂學校街を現出するに至つたことは注目すべきである。

昭和四年三月現在の大東京に於ける中學以上の學校數は、官私立を通じて二百七十九校の多きに上つてゐる。この內から中學校や師範學校その他中等教育に屬するものを除けば、他の純粹の高等專門教育機關としては、大學が十九校、專門學校が六十二校、高等學校が六校で、この合計は八十七校に遠する。

本鄕臺地の略ぼ中央、舊前田侯の邸趾十五萬坪を擁し、約六千の學生を集めて、近代式の大建築に設備の完成を誇る官學の總本山帝國大學は、官界は勿論學界、實業界と凡ゆる方面に多數の人材を輩出せしめ、又三田の慶應義塾大學は明治初年福澤諭吉が實學を唱道して創設したる以來、獨立

學校分布圖



自尊の旗幟を揭げて有爲の材を實業界に送り、城北の早稻田大學は大隈重信を生の親として生れ、多數の名士を送つて政界に活躍せしめると共に、今日も常に七千の學生を擁して、慶應と相並んで私學の權威を誇る。其の他各校何れも多數の學生生徒を集め、夫々獨自の教育理想に遵つて研究教化の實績を擧げて居る。

更に大震災後校舍の郊外移轉が斷行されるに伴つて、之等專門諸學校が近郊地域の發展を促した功績は容易に沒せられない。又其の內容に於てはなほ歐米大都市のそれに比して遜色あるにせよ、八十七校の中七十三校までが民營で、何れも

特色を一方に把持して、大に草莽の氣を吐いて居る處に我が國學術の淵叢地としての大東京の一異彩がアリ〳〵と看取されて愉快である。

今、これ等大學級の學生約八萬を始めとして、上述の中學級や小學兒童の一切を通算するときは大東京の學生生徒の總數は優に八十萬を超えて、驚くべき盛況を呈してゐるが然し其の半面には、學生を對手とする幾多の健全、不健全の營業が、日に月に出現し行くことも容易に想像される。

父兄が汗水垂らして送金した巨額の學資は、東京人の懷を肥してゆく、六大學の野球リーグ戰は春秋の試合毎に滿都のファンの血を沸かせるかと思へば、一方では學校中心とした騷動や紛議は絶えず新聞の三面を賑かす。世を擧げて不景氣の風が吹き荒んでも、學園だけは自由の天地、此處に學ぶ若人達は、夢と憧れと華かな野心とに胸を踊らせながら、其の日〳〵を何の屈托もなく送る。「學士樣なら娘をやろか」の時代は遠く過ぎて仕舞つたのであるけれども、なほ角帽と金釦が青年子女の憧憬の的であることは今も昔と變りがない。

四　書圖出版

文化の象徴とも稱すべき圖書の出版に於ても、東京が全國の中樞であることは今更云ふまでもない。最近に於ける印刷製本の生産年額は八千一百萬圓で、全國産額の四割以上を占め、第二位の大阪に較べると二倍に近い。

圖書の出版組合に東京出版協會があつて、その會員が二百五十名、その中市内は二百四十名を占めて斷然日本の出版界をリードしてゐる。而して神田區は中でもその中心で約四割を占め、富山房・三省堂・金港堂・有斐閣・岩波書店・古今書院・東洋圖書・主婦の友社をはじめとして其の數九十に達し、神保町・錦町の一帶に集つて是處に我が國出版界の中樞を形成して居る。

日本橋區は之に亞いで丸善・寶文館・六盟館等三十を數へ、麴町區には中央公論社・婦女界社等二十餘あり、その他、京橋區には目黑書店・大倉書店・大日本圖書・實業の日本社、牛込區には帝國書院、本鄕區には南弘堂・至誠堂・大日本講談社等をはじめ、その數二十に近く、小石川區には博文館・開成館・日本書藉・東京書藉の大出版所がある。

更に最近一ケ年に於ける全國出版圖書數は六萬九千に達し、三十年前に比べると約三倍强になつてゐるが、その五割は東京が占めてゐる。種類では文學物が第一で、敎育・音樂・宗敎物及び敎科書が之に次いで多い。斯くて之によつて國民の智識慾を向上し、文化の闡明を呼びかけてゐるのである。

日本の文化の中心地として、圖書出版の方面で全國をリードして居る大東京には、さすがに又印刷製本の生産額も頗る多い。即ち最近の調査によれば東京市内に於ける圖書印刷及び製本の工場はその數約一千に近く、就中大なるものは麴町の内閣印刷局（職工二一五三人）、神田の三秀社（職工三三七人）、京橋の築地活版所（職工三一三人）、牛込の秀英舍（職工一二四四人）、日清印刷（職工六五八人）、小石川の共同印刷（職工一三七三人）、東京書籍（職工二一〇人）、日本書籍（職工二〇三人）、凸版印刷（職工二一九人）、同下谷工場（三九〇人）、同本所工場（三〇〇人）深川の東京印刷（三一二人）等、何れも直接商業に關係ある仕事だけに、其の多くが商業地域に密集して建てられて居る。

五　新聞（丸の内新聞社地區）

社會の出來事を最も早く、且つ最も安價に、そして最も簡易に世人に傳へてその智識を啓發し、生活に貢献するものは新聞である。現今大東京には新聞紙法によるもの約千三百に上り、此の方面に於ても亦東京は世界的大都市として恥ぢざる活躍が續けられて居る。その種別は政治方面の百四十七種を第一として、思想（一〇三）、商業及び商店機關（九九）、經濟（七七）、地方局限物（七七）組合報（四五）、宗教（四四）、工業（四一）、醫事（三八）、交通（三八）等のあらゆる方面に亘つてゐる。新聞社の大なるものは丸の内と其の附近に集つて、こゝに所謂大東京のニューセンターを形成して居る。

即ち數寄屋橋畔には現代ドイツゴシツク式のどつりした大建築を誇る東京朝日新聞が本社を構へ省線を越えれば日々と報知の兩新聞社が相對峙して、ネオンサインや傳書鳩で現代文明の尖端を競ひ、其の他東京毎夕、日本、中央、都、ジヤパンタイムス等の諸新聞社は丸の内附近に又東京夕刊萬朝、東京毎日、讀賣、やまと、國民等の各社は濠を隔てゝ日本橋と京橋の兩區に集まつて居る。

以前新橋驛が帝國の關門であつた明治時代に於ける新聞社は、これに近い銀座通り附近を各々その根據地として居た。現在といへども舊來の場所によつてゐるものも相當にあるが、其の後東京驛が出來有樂町驛が發展するに伴れて、之に近い丸の内に吸引せられる傾向が次第に顯著になつて來たのである。

蓋しニュースの集收にも發表にも、都心近き處に位置する事は新聞社としての必須條件であるが更に通信の發着にも廣告の受付にも、或は新聞紙の發送や各社の交渉にも、多くの新聞社が比較的近接した地域に集まつて居ることは非常に便宜が多い。

初め銀座界隈に集つたのは、此處が東京で一番早く出來た商店街で、こゝに社を構ふることは何よりの廣告宣傳であつた譯であるし、又此處が當時の都心であつただけにニュースの集收發表にも好都合であり、同時に東京に出入する貨物旅客の集散が新橋停車場で行はれた事とて、驛に近いことは地方への發送にも便宜が多かつた。然るにこの貨客呑吐の關門である停車場が大正の初頃に至つて新橋から丸の内の東京驛に移つた。これが何よりも新聞社を丸の内の地に走らしむる原因となつた。

大正十二年の大震災以後、丸の内の光景は一變して、今まで比較的閑却に見えた町々は大ビルデングの續出と共に、商店街たる銀座に劣らぬ人通りの多い繁華な町々に化した。こゝに新聞社を構へる事は銀座界隈に劣らぬ建物の宣傳効果を收め得られる上に、地價の昂騰した銀座で新に廣い土地を求むることは容易でないが、空地同樣の三菱ヶ原の丸の内にはまだ廣い土地が殘されて居たので、土地の買收も家の建築も自由であつた。

尙その上、今まで新聞紙の販賣先として東海道方面ほどに顧みられなかつた東北方面が、次第に購讀者を增して來たので、上野停車場に近い丸の内が大東京のニュースセンターとして益々歡迎される樣になつて來た。

斯くてこれ等さま〴〵の事情によつて、何時しか丸の内殊に有樂町界隈が大東京の新聞街として堂々たる建築物、晝夜を分たざる不斷の活動、誠に大帝都の中心である感じをつく〴〵と起させる樣になつたのである。

六　圖　書　館

明治五年、上野公園に圖書館を設けられたのが今の帝國圖書館で、日本に於ける圖書館の嚆矢である。

圖書館教育は學校教育が特殊的であるに對して普偏的であり、短期的であるに對して生涯的であり、標準的なるに對して生活的である。されば市民の文化的施設としては、學校教育に劣らざる重大な使命を持つのであつて、之が整否によつて直ちに市民文化生活の實狀を測定し得られる程であると云ふ。

東京市の圖書館事業は最近の發達であるがために今日なほ整備擴充の域に達せず、施設には幾多遺憾の點あるを免れないが、それでも現在既に市立のもののみにても大小二十館を算し、官立の上野圖書館と相俟つて、所謂知識の倉庫たるの任務を盡し、多數學徒の勉學に資してゐる。

最近の調査によると舊東京市内の官公私立の圖書館は二十四館で、その藏書數は約百三十萬冊、

一ケ年の閲覧人員は約二百五十萬人に上るといふ。

これを歐米、殊に世界の圖書館國と呼ばるゝ米國の圖書館事業、及びその利用者の莫大なるに比ぶれば、殆ど同日の論に非ざるを悲しまねばならぬが、然し大東京に於ける圖書館事業は、今後なほ大いに開拓の餘地を存してゐるのであつて、むしろ多くの興味と期待とを此處に繫ぎ得らるゝ譯である。

次に舊市内に於ける圖書館の配置を見るに、

市立では日比谷公園の日比谷圖書館、神田の駿河臺圖書館、清澄公園内の深川圖書館が主なもので、他は小學校舍を併用する簡易圖書館が、各區に一乃至二館位施設されてゐるのみ、又私立では麴町の大橋圖書館、芝の慶應義塾圖書館、藤山工業圖書館等が殊に有名である。

なほ閲覧者の種別を見ると、學生が最も多く、商工業者之に次ぎ、以下兒童、無職業者、雜業者官公吏、記者、教員、宗教家等の順で、婦人は男子の七分、女兒は男兒の四割に當る。

更に閲覧書目に就て見れば、文學、語學の部が最も多く、歴史、傳記、地誌の部之に次ぎ、以下政治・法律・經濟・社會の部、理學・醫學の部、宗教・哲學・教育の部。工學、軍學の部、産業交通の部の順序であると云ふ。

八　大東京の夥しき交通量

一　東京の交通概觀

人口の都市集中は現今世界各國共通の現象であるが、殊に農業立國の日本に於ては其の傾向が顯著である。

土地が國民經濟組織の根本になつて居るけれども、耕地の廣さは僅に全面積の一割六分に過ぎず然も此の僅かな土地を唯一の賴みの綱として、全國民の六割迄が農業を營んで暮しを立て樣とするのであるから無理がある。人口は年毎に激しい勢ひで增加して行くが、土地の廣さは先づ一定で殖える見込みがない。そこで勢ひ極端な集約農業が行はれ、同一の土地を出來るだけ細かく使つて澤山な收穫を擧げ樣とする。土地を酷使するので肥料が必要になる。肥料と稅金に收穫の大部分をとられて仕舞ふと云ふ嘆聲は屢々聞く所であるが、夫れ程にしてもなほ狹少な作地と集約農業とでは限りなく增加する人口を收容することは迚も望まれない。玆に人口の都市集中の現象は愈々激しく

なるのであつて、現に今日では內地人口六千萬人中の約三分の一は、都市に集まつて其の生計を立てゝ居る。

さて斯くの如く人口が都市に集中する結果として、都市の地價はどんどん騰貴する地價が高くなると人は高い家賃を拂つては住む事が出來なくなるので、勢ひ彼等は其の經濟生活を支持するために、許され得る範圍迄地價の安い處を求めて移動する。斯くて人口は都心地域から遠心的に散布されれる事となり、隨つて彼等の生活に於て住居の場所と活動の場所とが自ら分離される結果となるので、玆に其の兩者を連ねる移動交通が必要となる。大東京の都心地域の人口に、晝間と夜間では七、十五萬からの開きがあることは前にも述べた所であるが、是等は總て朝夕のラツシュアワーを限度として動く、郊外居住の通勤交通者であると見て差支へない。更に之に加ふるに買物や訪問等の爲に動く其の家族等を加へたならば、大東京の夥しい交通量は容易に想像される譯で、近年市の內外に通ずる交通機關の顯著な發達も、亦容易に首肯し得られるであらう。

最近の統計によると、大東京地域內にある省線電車と市電、郊外電鐵及び乘合自動車等を合せた乘客總數は一年實に十一億人に近く每日平均三百萬人以上と云ふ巨數に上つて居る。最近十ケ年間に大東京地域の乘客總數は二倍以上になつたのであるから、交通總量の素晴らしい增加は驚く外はないが、更に乘客の分配にも變遷があつて、大正八年頃迄は乘客總數の八割近くは市電が占めて居たのであるが、今では之は五割以下に減じて、之と反對に高速度交通機關としての省線電車や郊外電車或は乘合自動車等は、年々乘客を增加して今日では五割以上に達して居る。

時速十四キロに滿たぬ市電の乘客が、時速三十五キロに及ぶ省線電車に攫はれて行くのは如何とも致方がない。其の他時速二十キロから二十五キロ乃至それ以上に達する圓タク、同じく十八キロの乘合自動車も市電の減收を尻目にかけて、どし〳〵乘客を吸收して行く。然し市電も亦今日市民の交通機關として誠に重要な地位を占めて居るものであつて、每日平均百萬人以上の人を輸送してゐるのであるから大きい。市電に罷業はつきもの〻樣であるが、何しろ此の莫大な人々から足を奪つて、其の生活を脅威するものであるから、決して市民の同情を集め得られる筈がない。

さて斯樣にして交通の總量は年每に增加して來るが、一方交通機關の種類はまた頗る雜多であつて、而も其の速力は種類によつて違ふ。種類の違ふ各種の交通機關が、同じ道を動いて居るのであるからそこに問題が起るのも止むを得ない。一體交通機關によつて目指す活動地點に到着する迄の時間は、遊山客にとつてならばいざ知らず、急がしい其の日の營みに齟齬して居る東京人にとつては、誠に是れは不生產的な時間である。商用で出掛けるにしても、勤め先へ行くにしても、其の途

中は先づ不生産的な時間であるから、性急な東京人が其の生き馬の目を抜く様な急がしい生活から斯んな無駄を出來るだけ排除し様と工夫するのは當然である。そこで兩者の距離を時間的に出來るだけ縮少し様とする競爭、即ちスピード時代の現出と云ふことになる。

今日既に二萬臺を突破せんとする自動車、二十萬臺に肉薄せんとする自轉車、五萬臺を算する荷馬車其の他の諸車、二千臺を距ゆる電車等、夫々スピードを異にする各種の交通機關が、大東京を舞臺としてスピードの狂燥曲を奏で、何れも百パーセントの交通機能を發揮せんと競ふて居るのであるから、都會人は餘程神經を敏感に削り立てゝ居ないと、時に飛んだ犧牲の血祭りに上げられる事がある。現に明治四十二年には警視廳の管下に於て事故による死亡者十名、負傷者は一千七百名に過ぎなかつたものが、昭和三年には負傷者は八倍以上の一萬四千餘名となり、死亡者は約二百二十名で實に二十三倍の多きに達して居る。

蓋し事故の增加は交通量の增加に伴つて或程度までは避くべからざる現象であるとは云へ、可憐な小學兒童等が此の悲慘な犧牲となつて、可惜蕾の生命を奪はれゆく慘事は考へるだけでも傷々しい。されば交通當局も市民も將來此の問題に就ては十分な關心を持ち、交通道德の普及と徹底の爲に官民一致の努力を捧げねばならぬ。

以下更に大東京の交通現狀を、各交通機關の種類に分つて物語らう。

二　街道の昔と今

道路の系統は江戸時代のそれを根幹とするもので、當時の主要道路は日本橋を起點とする東海道（品川）、中仙道或は東山道（巢鴨）、甲州街道（新宿）、水戸街道或は陸羽街道（千住）、日光街道或は岩槻街道（王子）、のいはゆる五街道と、千葉街道（小松川）、青梅街道（淀橋）、厚木街道（澁谷）の八大幹線が走つてゐたが、これらの諸道路は現在に於いても都心地域から外部に通ずる放射線として最も重要な役割を演じてゐる。

然し江戸時代に於ける道路の設計は、其の總てが封建幕府の支配者である將軍の居城を守護せんとする、所謂軍事的の見地から割り出されたものであるから、何れも道幅が狹く、舊日本第一の幹線である東海道にしても幅は五間に滿たない程で、屈曲が多く無秩序で、袋路も少からず、一般士民の交通には不便が多かつた。

幕末封建政治の瓦解となるや士民一時に離散して、大邸宅も荒廢に歸するもの多かつたが、次いで明治維新となり、江戸が新日本の首都東京として更生するに及んで、輦轂の下を慕つて全國より

集るもの次第に多く、隨つて次々に膨脹する人口を抱擁するために、新東京の道路は一層錯雜せざるを得なくなつた。斯くて市區改正の聲は早くから識者の間に叫ばれて、既に明治五年には丸の内銀座方面の大火の跡に實施され、其の後も數次速成事業が決行されたが、大正十二年九月大震火災の突發に遭ひ、偶然にも面目一新の好期を掴んで、大東京の道路は全く面目を一新する樣になつた。

今これ等道路の當時の狀況を現在のそれと比較して見るのも亦頗る興味あることであらう。

東海道は日本橋の起點から南に向ひ、日本橋、京橋、芝の各區を縱貫して品川、大森、蒲田、六鄕の各町を過ぎ、多摩川を渡り湘南から箱根の嶮を越えて西京都に終るもので、我が國街道の幹線であるため、昔から人馬の往來が繁く、東海道五十三次はあまりにも人口に膾炙されてゐた。

市内では日本橋、京橋に亘つて府内最殷賑の町人街をつくり、所謂大江戸の中心をなし、芝に至ると愛宕神社や、增上寺の大門があり、札の辻には大木戸があつて嚴しい見張役人がゐたといふ。品川に至るとこゝは府内の玄關に當つてゐたので、旅籠や茶屋が軒を並べてなか〳〵の賑ひであつた。

今では日本橋京橋の土藏造り、紺の暖簾の老舗も西洋建のビルデングとなり、品川の宿場も昔の面影を失ひ、駕籠や馬は自動車に代り、沿道には汽車電車の音が頻りで、街道には步行の人影も殆ど見當らない程である。

日本橋吳服町（今の電車交叉點）で東海道に分れ、吳服橋を渡り濠端を廻つて半藏門に至り、四谷區を東西に貫いて、淀橋、代々幡、和田堀、松澤、高井戸、千歲の各町村をすぎ、府中八王子から小佛峠を越えて甲府に至るものが甲州街道である。これは武藏野の脊髓にも相當すべく、山の手臺地中でも最も高い所を通つて、一方は江戸城の中心部に通じて居るから、若し此の道により土地の傾斜に沿つて江戸城に平押しに攻め寄せられたとすれば、其の防禦は頗る困難となる。されば昔は内濠の半藏門、外濠の四谷見附、追分の大木戸で嚴重に警固されてゐたのであるが、此の事實は目立つて物々しく築造されて居る濠や土手の工事から今日でもよく窺ひ知られるのである。街道の所々には町人街も發達して居たがさしたる賑やかさではなかつた。

今日では青梅街道の分れる追分と、山手線新宿驛を中心としたる一帶が郊外生活者の買物市場として文字通りの肩摩轂擊で、山の手、隨一の盛り場としての活氣を呈してゐる。蓋し甲州、青梅の二街道に沿つて、之に並行する中央線や西武・京王・小田原急行等の電車が玆に集中して、市外と市内の交通連絡が行はれるからで、その昔旅舍四家から名づけられた四谷、元祿の頃新に宿場が設けられたので生れた新宿の事を考へると江戸から東京への變轉、別けて大正から昭和にかけて目覺し

い變り様は驚嘆の外はない。

東海道と日本橋によつて結ばれてゐるものが中仙道で、これは北に向つて神田川昌平橋を渡り、本郷臺を縱貫して追分に至つて岩槻街道を分ち、小石川の北邊を通つて、巣鴨・西巣鴨・瀧野川を經て板橋で川越街道と分れ、荒川を渡つて浦和・大宮・高崎を過ぎ終に碓氷峠から信濃路に入つて木曾街道となり、美濃・近江を通つて京都に達するもので、昔は東海道の裏街道として重要な道路であつた。當時は本郷の一部に町人街があり、「かねやす迄は江戸の内」と稱してゐたが、其の店は今も本郷三丁目に殘つて老舗の名を誇つて居る。道の兩側は大抵宏壯な大名屋敷や旗本屋敷或は寺院などで、之を縫つて處々に町人の住居もあつたが、夜などは人通りも稀な程の淋しさであつた。當時板橋町は江戸に入るには宿場として榮えて居つたが、鐵道の開通後俄にその繁榮を奪はれて淋しくなり、次いで現在は再び住宅地として省電赤羽線の開通、東上線の電化等によつて更生の道を辿つて來た。

奥州街道も亦日本橋を起點として、日本橋本町（今の本石町）で中仙道と分れ、淺草橋を渡つて淺草區を南北に貫き、南千住・千住・梅島・溝口の各町村を過き、宇都宮から白河の關を經て奥州に至るもので、今も昔も北日本への交通幹線として、濱街道と共に最も重要視されて居る。此の道が外濠を通る、淺草橋は奥州濱兩街道に對する要衝として、千住大橋と共に幕府の警戒が嚴重を極めた處である。

奥州街道と中仙道とを連絡するものに岩槻街道がある。中仙道と追分で分れ、瀧野川・王子・岩淵の各町をすぎて岩槻に至り、更に幸手で奥州街道に會するもので、昔は岩槻城との連絡路として、又奥州街道の裏街道として重要なものであつた。本郷追分は警備上からも交通上からも、要地を占めてゐたのであつたが、今は唯だ名のみを殘してゐる。

千葉街道は日本橋元柳原町で奥州街道に分れ、兩國橋を渡り堅川通りをすぎて、龜戸・小松川・松江・鹿本・小岩の各町村を貫き、江戸川を渡り千葉に達するもので房總地方との往還である。昔は堅川通りが江東に於ける唯一の町人街で、兩國橋内は兩國廣小路として繁昌な町であつた。今は鐵道總武線の外、京成電車が北方の吾嬬町・本田町を通ずるので、繁榮は北に奪はれてゐる形であるが、然し省線電化の曉は必ずや更生される事であらう。

之を要するに各街道ともに昔の重要性を失つて、宿驛徒らに落莫の姿を殘し、兩側の松並木は唯往時の繁華を追想せしめるのみとなつたが、然し禍福もと是れ糾へる縄で、今や新しい交通機關としての自動車の急速な發展に伴ひ、往時の街道は再び近代的街路として更生し、國土の血管として

の面目を次第に發揮する樣になつて來た。

三　自動車の動き

大都市の成長と交通の發達とは不可分の關係にある。交通機關の完備なしには、到底今日の大都市は出現し得ないものである。

抑々明治維新後、東京市で行はれた最初の交通機關は馬車營業であつた。明治二年の四月に創められたもので、所謂新時代の乘物として各方面に歡迎せられ、舊時代のお駕籠を全く驅逐して、澤山の駕籠舁き共を失業させたものであつた。

粗雜な車輛に七八人を滿載し、瘦馬の尻に鞭打つて凹凸の多い街路を疾驅したので、餘りに激しい車體の動搖のために、身重の婦人が急に產氣付いて、玉の樣な赤ん坊を車中に生み落したと云ふ落し話めいた實話さへ傳へられて居る程であるが、それでも當時は重寶な交通機關として、營業者は年毎に殖えて、都大路には到る處に馬糞が堆を成して居たものだと云ふ。

馬車と相並んで帝都の交通機關として、各階級に重寶がられたものは人力車である。鐵輪の車が音高く都大路を疾驅する姿は誠に滑稽極まるものであつたが、それでも珍らしくもあり便利でもあつたので、忽ち大に行はれる樣になつた。

次いで明治十四五年の頃初めて自轉車が輸入せられ、最初の頃は遊戲用の貸し車として珍らしがられたものが、次第に民衆化し實用化せられて、今では商家と云ふ商家に殆ど備付を見ない所がない程となつた。斯くて市內の交通機關が馬車、人力車の時代から自轉車、電車と次第に進んで行く間に、一方東京も江戸から東京へ大東京へと發展の道を辿つて行つた。

近年人口の增加と共に境域は擴張して、商業地域・工業地域・住宅地域が劃然と分化するに伴れてそれ等の相互間を往復する乘客數は加速度的に增加し、隨つて之を連絡する交通機關も可及的に高速度を要求して來た。

斯うして大東京の交通機關は今や人力車、馬車の時代は既に遠く去つて、市內の路面電車も過去のものとなり、是等に代つて自動車、高架鐵道、地下鐵道が次第に幅を氣かせて、漸く其の全盛時代を招來せんとする勢ひとなつた。

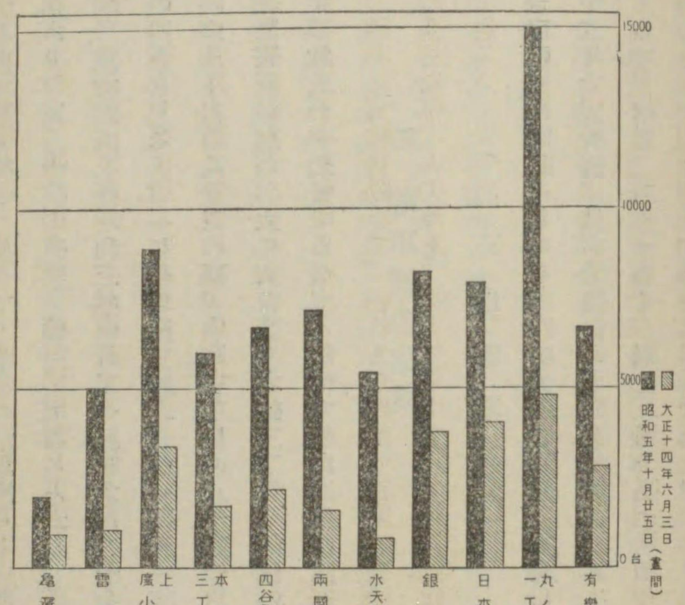
就中自動車は近來の交通機關中最も急激に發展し來つたもので、其の運行が頗る輕快なる上に、建設費が極度に低廉であるために、局所的補助的交通機關としては乘客にも事業主にも歡迎されて鋪裝道路の普及と相俟つて今では市內路面交通機關の王座に上らんとして居る。

明治三十五年横濱の一外人が米國から自動車を輸入して、自ら乘用したのが我が國に自動車の動いた最初である。同三十六年三越が佛國製を購入して市内を乘り廻したのが、邦人自動車の先陣であつた。日露戰役後財界の活氣横溢するに伴つて、漸く利用の範圍は擴まつたが、然し大正元年には僅かに百五十臺に過ぎなかつた。

次いで世界大戰の勃發に成金風を煽られて、市内の自動車は俄に其の數を增して、大正九年頃は二千臺を突破したが、更に其の後も現代スピード時代の要求に應じて年毎に車體を增加し、昭和五年には二萬三千臺を超ゆる盛況となつて來た。その八割は市内にあり、而して市内の三分の二は乘用車、殘りは貨物自動車で、何れも短距離の補助的交通機關として、圓タク、乘合自動車の活躍は完全に乘用馬車、人力車をノックアウトし、貨物自動車は汽車、電車輸送と對抗して近縣の都市を縫ふて居る。

乘合自動車は大正七年の暮、東京乘合自動車株式會社が創立せられてから年と共に發展し、更に大正十二年大震災後市營乘合自動車が運轉せられてからは、目覺ましい發展をとげて今日に及んでゐる。現在前者は二百五十臺を運轉し、乘車人員一日平均十二萬人を算へ、後者は約五百臺を運轉して、一日の平均乘客十四萬を呑吐してゐる。

自動車交通料比較



市外では、東横・目黑・甲州街道・板橋・王子・隅田・城東の各乘合自動車會社と、京濱・池上各電氣軌道會社の營業課があつて、總車臺六百を運轉し、毎日約十四萬の乘客を扱つてゐる。

乘客運輸の自動車營業は大正十三四年の頃市内一圓均一の營業により、所謂圓タクの名を以て市民に歡迎されて大發展をなし、急激に增加して、今では「流し圓タク」が都大路を縱横に疾驅してうつかり道も横切れない位、「市内一圓」の札を揭げた空車の洪水で、圓タクも事實は五十錢タクとなり、近頃は三十錢、二十錢でも乘せると云ふ

有様、お蔭で猫も杓子も便乘で、歩くのが馬鹿らしい程である。最近では毎日約八千臺以上の流し運轉があり、四五十萬の乘客を輸送してゐると云ふ。

市統計課で調査した昭和三年十月二十五日から二十七日にかけて、午前六時乃至午後六時迄の自動車の動きを見ると、一日平均東京驛北口が一萬五千臺で市内第一であり、上野廣小路の八千六百臺、銀座三丁目の八千二百臺、室町三丁目の八千臺が之に次ぎ、其の他兩國橋東詰七千臺、四谷見附外、數寄屋橋通の各六千六百臺、本郷三丁目、飯田橋の各六千臺、淺草雷門・水天宮前の各五千臺が主要地點の交通量であつて、昭和六年には更に四五割の増加は確實であると見られてゐる。

四　電車網の完成

(一)　市内電車

東京市の交通機關として、市内の公道に軌道を敷設して乘客運輸の事業を始めたのは、實に明治十五年六月で、新橋、日本橋間の馬車鐵道が最初である。當時の車體は乘客定員二十四五人位の小型のもので、輓馬二頭に牽かせ、毎日三四十臺を運轉して、日收三百圓内外を擧げて得意になつて居たのであるが、之が五十年前には帝都隨一の交通機關として誇つて居たのであるから驚く。

其の後世運の進歩と都市の膨脹に鑑みて、電氣鐵道敷設の議が識者の間に起り、幾度か採みに採んだ末、明治三十六年の八月品川、新橋間に東京最初の電車運轉を見た。チン〳〵電車が一度動き出すや、民間の事業界は急に色めいて、電鐵敷設の請願競爭となり、新に認可を得た東京市街鐵道及び東京電車鐵道の二會社と、曩に認可されたる東京電車鐵道會社間の所謂三電競爭時代を現出したが、激烈なる巴狀爭覇戰の結果は却つて三電合併の電車市營論を擡頭せしめ、遂に折衝半歲にして明治四十四年八月之が實現を見る樣になつた。

斯くて爾來市電氣局の開廳と共に局面を一新し、機運の嚮ふ所乘客は日に月に增加して久しく東京市内交通機關中の王座を占めて近年に至つたのであるが、輓近市内人口の郊外移動と、スピード時代に應ずる省線電車や自動車の發達に禍されて、かつて馬車鐵道が電車に壓倒された樣に、市營二十年の星霜を閲したる今日、殆ど行詰りの感あるは誠に遺憾である。

然し市營の當時軌道の延長約百九十粁にして、運轉車輛數約八百臺、輸送人員一日約六十萬人にして日收二萬圓に足らざりしものが、今や營業軌道三百五十粁、一日平均千五百臺の車體を動かして百萬以上の人を輸送して居る現狀と對比すれば、世運の進歩と都市の發展に伴ふ市電の膨脹も亦顧みて隔世の感ありと云ふべきである。

されば今後の路面電車は行詰りの狀態にあるとは云へ、其の經費が各種交通機關の中で最も低廉な點や、又近來其の競爭者として異常の進出を遂げた乘合自動車に比べて、輸送量の著しく大なる點等から觀て、其の活動の將來性が十分に保證されて居ることは疑ふ餘地がない。現在見らるゝが如き著しい經營狀態の不振は、勿論市內人口の郊外移轉、各種交通機關の發達普及、並びに一般經濟界の不況等の影響もあるが、更に其の一半は私設會社の買收に伴つて生じた巨額の權利金、其の擴張に對して當然都市計畫事業の支出に屬すべきであつた。道路擴築費等の負擔、其の他震災のための損失、區劃整理に伴ふ軌道移設費等から來た異常な財政的壓迫による所も少くないのである。

今市營以來約二十年間に於ける事業發達の趨勢を、各種の統計によつて示せば次の如くである。

年次	軌道延長(粁)	車輛數	乘客一日平均(萬人)	一日乘車收入(千圓)
明治四十四年	二〇六	一、〇六四	五七	二〇
大正五年	二五六	一、四四六	七二	二九
大正十年	二九五	一、六九一	一二三	八一
昭和元年	三一五	一、五九三	一二一	八〇
昭和五年	三四五	一、五九四	一〇一	六五

即ち近年の運輸成績は大正十三年の一日平均乘客數百三十六萬人、乘車收入八萬七千圓を最高として逐年漸減の傾向にあり、而も一方支出に於ては改良費は世運の進歩に伴ふて益々增大の趨勢を來し、人件費は世相の變遷に隨ふて增加の傾向を招くので、收支の均衡は將に破れんとして、創業以來今や經營上の最難關に直面せる現狀である。

市內電車の軌道を觀ると、都心たる丸の內及び日本橋から市の周邊に向つて放射狀に出るものと之を連絡する環狀線とがある。

放射線は、品川・目黑・惠比壽・澁谷・新宿・早稻田・大塚・巢鴨・駒込・千住大橋・南千住・向島・柳島・錦糸堀・猿江・洲崎を終點とするもので、大抵省線の停車場や市外電車と連絡して居る。

なほ巢鴨からは板橋、駒込からは飛鳥山、千住大橋からは北千往に延長する郊外特別線もある。

環狀線には、日比谷から濠に沿うて神田橋、一橋に向ふものと、櫻田門、半藏門、田安門の濠端を通ずる線、土橋から虎門・赤坂見附・四谷見附・飯田橋・お茶水・萬世橋の外濠及び神田川に沿ふもの、月島・厩橋・上野廣小路・春日町・大曲に至るもの、上野山下・神明町・大塚仲町・護國寺・矢來下に至るもの及び將來之と連絡すべき鹽町・宇田川線等があり、殊に日本橋・京橋・神田の各區は軌道縱橫に通じて電車網最も密である。

而してその系統は周邊から他の周邊又は都心に向つてゐて、大別すると車庫を西部に有するもの北部に有するもの東部に有するものの三大系統に分つことが出來る。

今試みにこれ等各系統に屬する一日の乘客數を見るに、昭和四年六月十三日に行はれたる乘客調査によると、千住大橋・土州橋間の六萬七千を最多として、早稻田・洲崎線六萬六千、巢鴨・日比谷線六萬五千、澁谷・兩國線六萬四千、兩國・大手線六萬二千、大塚・厩橋線六萬、新宿・錦糸堀線六萬品川・雷門線五萬八千、新宿・萬世橋線五萬、新宿・築地線四萬四千等總乘客數は約百十八萬人で、其の時間別の乘客輸送量は勿論局處的には夫々當該地域の經濟的特性に依つて異なるが、之を全線に就て觀ると朝の七時から八時迄が最高で約十萬人、即ち全體の八・六%を輸送し、九時以後は略ぼ五萬人內外で每時五%前後を持續し、午後四時から七時迄の所謂ラッシュアワーではまた約九萬人、每時全體の約八%を運び、それからは徐々に低減して終電に及ぶのであるが、之が先づ大體平常の輸送狀態である。

大東京の電車網は市內電車を內包にして、その外延に郊外電車があり、兩者を接續する所に省線電車がある。

(二)　省線電車

省線電車は今日都心と郊外を連絡する高速度交通機關として、大東京に於ける交通機關中最も重要な位置を占むるものである。もと明治三十七年八月二十一日、飯田橋・中野間の開通を最初として爾來逐年異常の發展を遂げ、今や京濱、山の手、中央の諸線を合すれば其の營業哩數　六五・七哩、輸送人員は每日平均百萬人を遠く突破して居る。

今其の旅客交通量を昭和四年五月二十二日に行はれた省線電車交通調査の實績について見るに、當日大東京全線の電車區間各驛に下車した總人員は百十九萬餘人にして、就中新宿驛は降客數九萬を超えて第一位を占め、以下東京・上野・澁谷・池袋・新橋・有樂町・神田・大井町・目黑の各驛之に亞いでいづれも三萬人以上の乘客をはき出してゐる。都心地域に位する東京、上野、新宿、有樂町、神田の各驛、及び郊外電車との接續驛に當る池袋、澁谷、大井町、目黑等の諸驛に特に降客の多いことは當日各驛に下車した降客總數の五三%、即ち約六十萬人までが定期乘車券による每日の固定乘客であつた事と相俟つて省線が都心と郊外とを連絡する高速度交通機關として、獨占的の地位を占めてゐる事を示すものである。

次に省線電車每三十分の輸送量を見ると、そこには近代都市交通の最も典型的な變化が具體化されてゐる。即ち午前七時から九時迄は所謂朝のラッシュアワーとして、通勤者輸送のために著しい

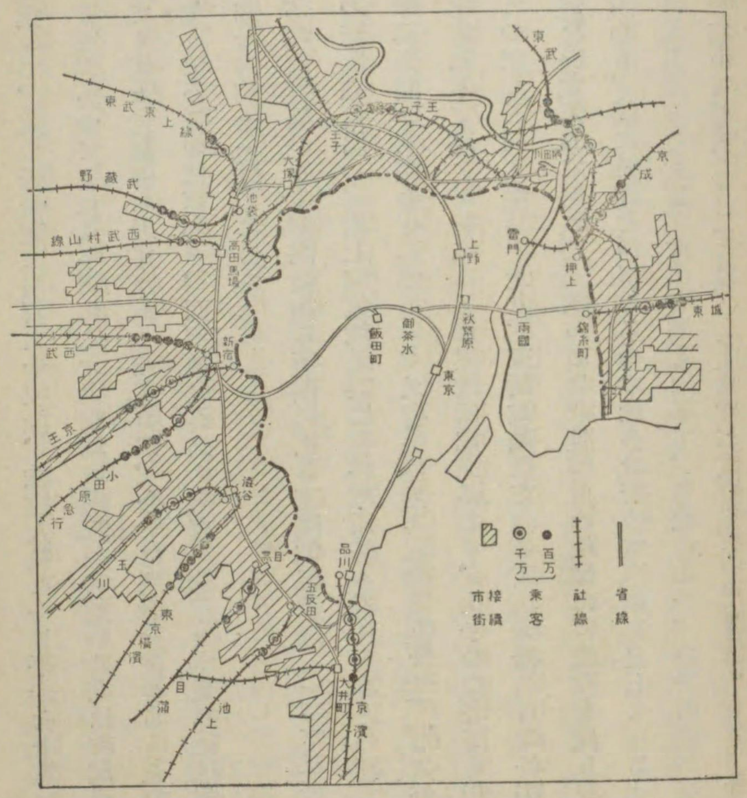
混雜を見るが、殊に七時半から八時に至る三十分間は一日中の最高潮に達して八萬一千人を超え、それより急減して十時より午後の二時頃までは稍々一定したる二萬人前後の輸送量となり、其の後大凡午後四時半までは日用品其の他の買物のための所謂市場交通によつて高まつて三萬人前後となり四時半より次第に午後のラツシュアワーを形成して、五時半から六時に至る三十分は最高潮に達して五萬六千人に上るが、それより八時までの間は徐々に低減し、十時頃稍上つて約二萬五千人となり、その後は急に低減して終發列車に至るのである。

此の調査に於て特に注目に値することは、午前のラツシュアワーが出勤或は登校時刻の略ぼ均一な事から急激で且短時間であるに反して、午後の混雜時は退出時間の不均一、乃至は退出後の所用による廻り道などのために、毎時の平均輸送量は午前のそれに比して少きも、其の期間が割合に長い事と又一日中で各家庭内の最も閑散な時午後二時頃から四時頃にかけて、買物交通による乘客の增加が著しく目立つことで、恰度此の頃は所謂道路交通に於ても最も混雜を來す時刻に相當するのである。

（三）郊外電車

郊外電車の發達は、大東京の人口增加と極めて密接な關係にある。殊に近年都心地域の商業化に

東京市内外の交通



伴ふ住宅の郊外移動につれて、隣接郊外町村の人口は年毎に膨大して行くために、玆に住居場所と勞働場所の空間的に出來得る限り近接せしめる必要から、高速度の郊外電車は驚くべき勢ひで發展の一路を辿つて居る。斯くて現在東京市の郊外地域には十三會社十五線の所謂郊外電車と市電の三延長線及び省線の山手循環線、中央線、京濱線等

が營業して、其の延長實に四百六十哩餘、輸送人員は一日平均七十萬に達し、且其の輸送量は漸增の一方で、かつて大正八年頃には大東京地域内總乘客數の八割は市電が占めて、郊外電車は省線を合せても僅々二割强に過ぎなかつたものが、今では兩者を併せると五割以上に達してゐる。その最も密集してゐるのは南郊で、西部地域が之に次ぎ、北郊及び東郊には割合に少くて全然人口の密度や增加の方向と一致してゐる。

南郊には省線の外に、高輪から横濱に至る京濱電氣鐵道（二二・三粁）があり、大森・穴森・川崎大師の三支線を出し、池上電氣鐵道線は省線蒲田驛と五反田驛との間（一一・〇粁）を連絡し、雪ヶ谷・新眞澤間の支線を有してゐる。又省線目黑・蒲田兩驛間（一一・八粁）を結ぶ外、大井町と二子玉川を連ねる支線を出してゐる目黑蒲田電鐵があり、山手の澁谷驛を起點とする東京横濱電鐵は本横濱との間（二四・九粁）を走り、玉川電鐵は市内の天現寺橋から澁谷驛を經て溝ノ口に至る間（一三・九粁）を主として他に三支線がある。且つ此の地域には京濱電鐵五反田延長線、山手急行、大東京電鐵等も、既に免許を得てゐるので最多最密の電車網を呈してゐる。

更に北上すると新宿が大集合點をなして、省線の山手、中央兩線が交叉する上に、小田原急行鐵道は新宿小田原間（八二・八粁）を急馳し、新原町田からは江ノ島に至る支線を出してゐる。

京王電車の本線は四谷新宿から、東八王子に至つて八王子市（三八・五粁）と結び、その支線は調布から多摩河原に至り、省線も多摩御陵に近い淺川驛まで電車を通じ、これ等は何れも郊外住宅者を顧客とする外、遊覽地を終點としてゐる點で一致してゐる。

又西武鐵道の新宿線は青梅街道上を新宿から荻窪まで走り、村山線は高田馬場驛から分岐して川越市（四五・七粁）に至る。その途中で東村山から村山貯水池までの支線を出してゐる。

池袋も新宿と同じく電車の集合點である。即ち、省線の山手循環線は赤羽線を派出し、武藏野鐵道はこゝから飯能を經て吾野（五七・九粁）に至り、豐島遊園地と村山貯水池に短かい支線を出し、東武鐵道會社の東上線は、近年電化して池袋から川越を經て寄居（七四・八粁）まで達してゐる。

王子電氣軌道は、市電の早稻田終點から大塚驛をへて王子驛に出で三ノ輪（一二・三粁）に至り、王子驛前からは赤羽まで支線を出してゐる。

東部の江東方面は極めて疎であるが、南に城東電車が小松川と洲崎、今井（一一・〇粁）を結び、その北に京成電車と東武本線がある。

京成電車は押上を起點として成田（五五・七粁）に達し、津田沼から分岐して千葉に通じ、その他金町支線、白髭支線を出してゐるが、最近は青砥より省線日暮里驛まで延長した。

東武線は雷門から日光まで（一二四・四粁）の電化を完成して省線と激烈なスピード競爭を演じつゝあり、曳舟、龜戸間に支線を出してゐる。

以上の諸線は大抵省線の各驛から放射狀に射出して、大東京の外廓地域内に稠密な電車網を構成して居るが、最初砂利の運搬や貨物の輸送を目的として計畫したものが、隣接郊外町村の豫想外な發展に促されて、滿員混雜殆ど市電と異ならざる迄の發達を遂げたのであるから、寧ろ經營者の方で面喰つた觀である。

そこで利にさとい事業家が此の素晴らしい景況を見逃す筈がない。新に敷設の計畫をするもの、新設會社を組織して敷設の免許を請願するもの、誠に虎視耽々たる現狀であるが、近く市域の擴張實現と共に、之等民間諸電鐵の統一聯絡の問題は大東京の交通界に大きな渦を捲き起すことであらう。殊に今日之等の郊外電車は總てが放射線で環狀線を缺き、且つ都心地域に突入して居るものは極めて少ない。スピード時代の今日住居と營業場所とを最も敏活に連接すべき任務を持つ大都市の交通機關として、途中で乘替を餘儀なくせしめられる如き現狀は全く時代錯誤である。隨つて今後都心への乘入問題、市電との連絡問題等前途の益々多事なることが容易に想像されるのである。

五　地下鐵道の進出

市街地域の交通機關として、その發展を最も將來に囑望されるものは地下鐵道である。其の高速度にして輸送力の大なる事、安全にして且つ賃金の比較的に低廉なる事等は、他の市内交通機關の到底企及し能はざる長所であつて、路面電車の混雜と缺點とは、唯今後地下鐵道の完全な發達によつて始めて緩和される事と思ふ。唯その建設費用が莫大であることゝ、大東京には高層建築物が少くて人口の割合に水平的の膨脹が甚だしいために、發達を阻害されることが多い。

東京市に高速度の地下鐵道を建設し、路面電車を補つて交通の圓滑を期せねばならぬと云ふ議論は、夙くから官民の間に提唱されて居たが、之が愈々當局の公案として議に附せられる樣になつたのは大正八年で、東京地下鐵道會社は最先に出願して敷設の特許權を獲得し、地質調査其の他の準備行爲を了へて工事に着手し、昭和二年十二月先づ淺草・上野間の開通を見、同四年十二月には上野萬世橋間の開通となり、着々その豫定線淺草・品川間の完成をみんとしてゐる。

更に東京市も亦次の五線の地下高速度鐵道の敷設權を得て、極度の財政難の折柄にも拘らず工費總額一億八千萬圓の豫算を以て、十五ケ年計畫のもとに萬難を排して敢行することに決してゐる。

東京地下鐵道

八　大東京の夥しき交通量

1　省線五反田驛より芝公園・新橋・日本橋・萬世橋・上野・淺草を經て押上に至る一六・七粁

2　省線目黑驛附近より西大久保・祝田町・本石町・淺草橋、田原町を經て南千住に至る一六・一粁

3　省線澁谷驛附近より櫻田本郷町・東京驛前・萬世橋・本郷三丁目を經て、省線巢鴨驛附近に至る一五・四粁

4　省線新宿驛より四谷見附から日比谷・築地・蠣殼町・御徒町・本郷三丁目・竹早町を經て、省線大塚驛附近に至る約二〇粁

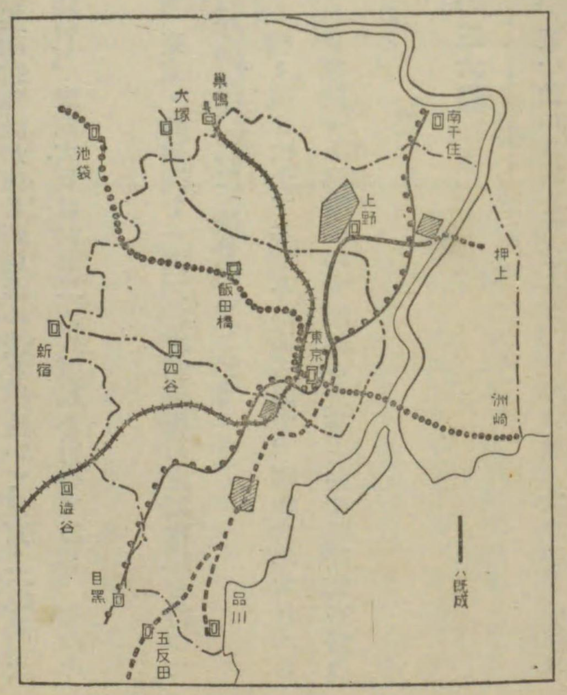
5　省線池袋驛附近より早稻田・須田町・東京驛・永代橋を經て洲崎に至る一四・二粁

されば是等の諸線が完成を見たる曉には、現在の交通狀態は當に面目を一新するに到るべきは蓋し疑はざる處である。殊にそれ等の地下鐵道網は、特に大東京將來の交通に適應する樣に、市內の外廓主要地を起點終點とし、都心中樞地域を縱橫に貫通する樣設計されて居る上に、各線相互間及び郊外電車・省線電車と巧妙な連絡が工夫されて居るので、從來の交通諸機關と相俟つて大東京地域內に理想的の線路網を張ることとなるであらう。

六　航空路

新時代の交通機關としてその尖端を行くものは旅客飛行機である。今や好奇的遊覽の飛行時代は過ぎて、實用的利用の時代となり、歐米各國では既に航空網が實現されてゐる。

東京市地下鐵道路線豫定圖



我が東京に於て、之が利用によつて交通運輸上に一新紀元を劃したのは、大正十二年七月朝日新聞社の事業として、東京・大阪間の輸送を開始したことからである。

超えて昭和四年七月、半官半民の日本航空輸送會社が朝日新聞社の後を引繼いで東京・大阪間、次いで福岡・京城・大連を接續する航空路を開拓し、東京大阪は毎日二回の運航を行つてゐる。その片道に要する時間は僅かに二時間半である。

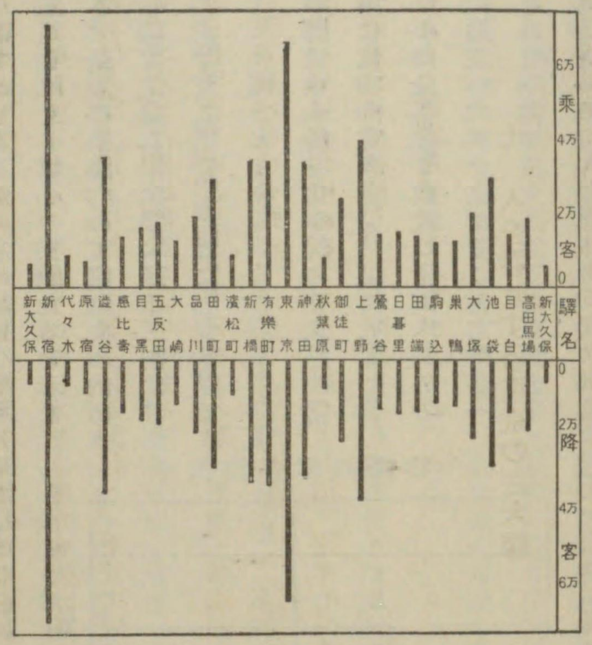
又朝日新聞社では五月より十月までの間、東京・新潟間を一週三往復郵便物の定期輸送を行つて居り、東京航空輸送會社は、伊豆・下田・沼津・清水への航空路を開いてゐる。

東京飛行場は立川町にあつたが、都心より稍々遠きに失する憾みがあるので、昭和六年六月から羽田國際飛行場に移轉し、近々開業せらるべき京城・上海等への大陸線の實施と共に國際航空路の一中心として重要な地位を占むべきものである。

七　人を呑吐する東京の三大驛

毎日二百餘萬の人を呑吐する大東京には、五十餘の玄關を有するが、その中最も大きいものは東京・新宿・上野の三大驛である。

循環線乗降客比較（昭和四年一月平均）



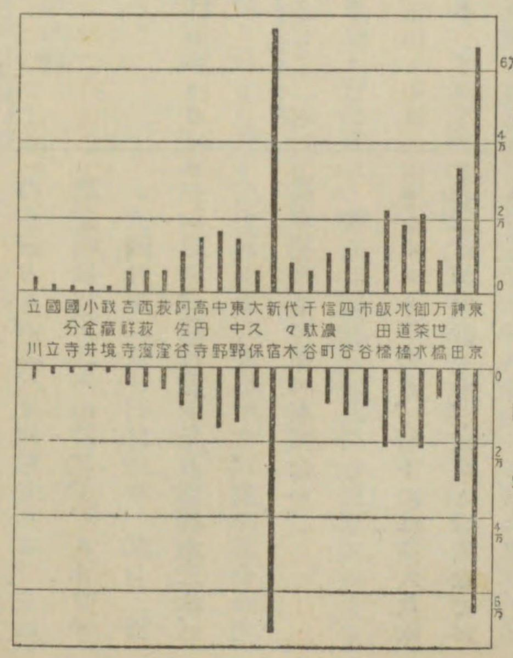
東京驛は東海道本線の起點であるばかりでなく、東北線の上野驛、中央線の新宿驛と電車を以て連絡してゐるので、事實上日本の鐵道の心臓とも云ふべき地點である。その建築物は大正三年の竣工で、ルネツサン式鐵骨煉瓦及び石材造り、間口三百三十四米、奥行二十米乃至四十二米、高さ五十米の大建築で、東洋第一の大停車場たるの名に恥ぢない。

階上には東京鐵道局と東京ステーションホテルがあり、階下には廣大な乘降口の待合室や、食堂・賣店などがある。プラツトホームは汽車發車・汽車到着、電車の各ホームに分れ、昭和四年十二月から裏口の八重洲橋口も通じて、日本橋・京橋方面への捷路が開かれた。

昭和四年の調査によると一日の乗降人員は電車客だけでも各七萬六千、その數から見ると新宿に一噸を輸すのであるが、之に近い有樂町及び新橋の各六萬八千と神田の六萬四千を加へると、將に三十三萬を超えて都心の玄關たるを示してゐる。是等の乗降客の五割は丸の内に入り、三割は大手町方面に、殘る二割は日本橋・京橋・芝・神田の方面に向ふものである。

新宿驛は中央線と山手線の交叉點に當り、内には市内電車、乗合自動車があり、外には小田急・京王・西武の諸電車がある等、交通線の大集合點たること市内第一で、その乗降客は各九萬餘、東京驛を凌駕すること一萬四千餘に上り、乗り換客に至つては四五十萬人を算へ、日曜祭日等には百萬に近い數に達すると云ふ。誠に我が國第一の雜沓停車場と稱すべきである。

中央線各驛乗降客



上野驛は帝都の北門で東北本線の起點であり、且、常磐・成田・高崎・上越・信越諸線の汽車もこゝから直通するので、乗降客の多いこと嘗ては我が國第一であつたが、今では電車客を合せて約八萬、新宿・東京の後に伍するに至つた。然し汽車客に於ては依然として我が國第一である。

今や復興のモダーン建築も竣工を告げ、東北線大宮間の電車も通ずるので、捲土重來の勢を以て更生一新せんとしてゐる。

本線も之に近い鶯谷・日暮里の各三萬、御徒町の四萬五千を加へると十五萬に近く、帝都の乗客三大集散地たるに恥ぢない。

以上三大驛に次ぐものは澁谷驛と池袋驛であつて、昭和四年五月二十五日の交通調査に於ては兩驛とも降客だけで各々四萬二千を超えてゐる。

澁谷驛は省線の一中間驛であるが、外には玉川・東横の兩電車があり、内には市電と乗合自動車を有し、池袋驛は山手・赤羽二線の分岐點にあつて、外に東上・武藏野の二電車があり、西巢鴨の大聚落を控へてゐるが、内に市電をもたないのが缺點である。

八　物を呑吐する東京の三大驛

大東京に集散する貨物の總量は年二千萬噸を超ゆる巨額であつて、その六割五分は陸運によるもので、陸運の殆ど全部は鐵道によるものである。而して此の夥しい鐵道貨物の五割は、隅田・汐留・秋葉原の三大驛で呑吐されてゐるのであるから、消費の都大東京のお勝手口として、三大驛の素晴らしい活動が容易に想像される。

隅田川驛は常磐線方面の石炭（二十五萬噸）東北線方面の木材（二十萬噸）石材（九萬噸）を主とし、その他兩線方面からの砂利（四十萬噸）鑛物（六萬噸）鮮魚（五萬噸）木炭（五萬噸）奥羽線・信越線方面からの石油・機械油（四萬噸）等を入れ、何れも各驛中その量に於て第一位を占めてゐる。出貨は石炭の再移出（十七萬噸）人造肥料（九萬噸）砂利（五萬噸）鐵及び鋼製品（四萬噸）等が各驛にまさるもので、出入總貨物の量は二百餘萬噸、鐵道輸送量の二割に近く實に大東京第一の貨物驛である。

汐留驛は東海道線方面の貨物を呑吐し、年總量百八十萬噸に及び、入貨は出貨の四倍に當り、砂利（七十一萬噸）果物（九萬噸）木材（六萬噸）酒類（六萬噸）魚類（五萬噸）米（五萬噸）を主として、殊に砂利・酒類・果物は各驛中その第一位を占めてゐる。而して出貨は米の再移出（四萬噸）、鐵及び鋼製品（三萬噸）・機械類（二萬噸）である。北の隅田川驛に對し、汐留驛は南の勝手口とも云ふべく、まさに隅田川驛を凌駕せんとしてゐる有樣である。

次に秋葉原驛は中央部にある高架式貨物驛で、我が國最初の立體式設備を有する。即ち高架上の上層積卸場と、下の下層積卸場から成り、螺旋式卸機や滑走機、昇降機などによつて上下する。上層では手車により貨車に積卸し、下層では直に馬車、又はトラックに積卸するやうになつてゐるが總て機械によつてなされるもので、貨物は十二三分間で積込まれ、年内には百六七十萬噸を處理出來る設備を有してゐる。

入貨物は米（十七萬噸）、木炭（六萬噸）、野菜・果物（八萬噸）を主とし、出貨は砂糖（六萬噸）、鐵及び鋼製品（四萬噸）で、何れも仕向地は東北線、奥羽線・上越線方面である。因みに米・木炭・野菜の入貨は各驛中の首位にあるといふ。

更に以上三大驛に次ぐものに淺草驛と飯田町驛がある。淺草驛は東武鐵道會社の經營であつて、其の取扱貨物は私線各驛總額の九割を占めて約九十萬噸に達し、砂利・石材・セメントを入れ、肥料砂糖を出して栃木・群馬の地方を主な仕向地としてゐる。」

九　東京の水運

東京市を貫流する隅田川及びそれに通ずる幾多の河川・運河は、江戸の文化繁榮の生命であつた。

徳川幕府は常に江戸城の防備を念願として總ての計畫を樹てたので、陸路の改良には頗る冷淡であつたが、水路に對しては夙くから多大の費用を惜まなかつた。利根川を改修して從來東京灣に注いでゐた其の水を、川筋を轉じて東方銚子口で直ちに太平洋に落とし、元の川筋を修理して中川及び江戸川の漕運を開き、更に是等南北に並流する自然の河系を、小名木川の人工運河によつて東西に連ね、西の隅田川に通じて大利根の水路と江戸を結合せしめる等、大に治水活用の事に努めて、之によつて大江戸の消費に充つべき物資の大部分を集中し得たのである。

由來水運は陸運に比して輸送力は遙に大である。一艘の舟に積み込んで一人の船頭が運送するだけの荷物は、陸運では數倍の費用と勞力を以てしても覺束ない。されば是等の河川運河が舊幕時代交通の要路として、貨客の輸送に利用されたことは非常なもので、問屋場は沿岸の到る處に開け附近には最も繁華な商工地域が發達し、幕府或は譜代大名の邸宅乃至倉庫が兩岸の要所に配置されて居た程である。

然し、かほどまでに盛んであつた江戸時代の水運も、明治維新後至便な陸上交通機關の發達に伴つて次第に衰微して火の消えた樣になり、運河の手入れも何時しか忘れられて、遂には舊幕時代の殘物として埋立の議論さへ起る程となつた。

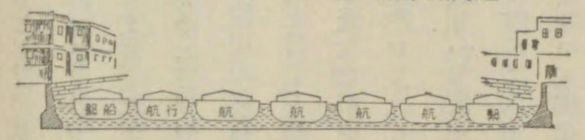
斯くて東京の水運は一時頗る悲觀すべき狀態にあつたが、元來陸の都であり坂の都であると共に、水の都であり橋の都である東京市としては、其の將來の發展が水運に俟つ事多きは云ふ迄もない。されば當局者亦此處に見る所あり、往年政府は巨額の費用を投じて市の東部郊外に荒川放水路を設け、永く隅田川の洪水の害を除き、又東京市に於いても或は隅田川の改良工事を行ひ、又古川の改修、枝川の改良並びに河川運河の護岸の改修、根固め等の外、常に河川管理人を置いて其の取締、浚渫を行つて居たが、何分是等の河川は水深が區々で自然土砂の沈澱の上に市民の河に對する觀念が冷淡なために、泥土塵芥を放流遺棄するものが多くして、容易に實績を收める見込みが立たなかつた。

然も一方東京市の財政狀態も亦頗る貧弱で、之に對して十分なる改良費を投ずることが出來ず、年々僅かに六十萬圓臺の維持管理費をかけてゐたのみであるから、隅田川と一二の河川を除く外は機械船の運航は勿論、干潮時には艀船の航行も、護岸へ横着け荷役することも不可能な狀態にあつた。

茲に於てか大東京將來のために思ひ切つた河川改修の施設を實行する必要を生じ、先づ其の第一

歩として、大正十一年には工費三百十八萬圓を以て、五ヶ年繼續事業として河底の浚渫と護岸の改築とを實施せんとしたが、偶々彼の大震災に遭遇して新に諸般の復興計畫が樹立せられるに會ひ、河川に於ても同じく清掃、浚渫、改良、修築、護岸等の改修計畫が決定されて、現に着々實行中である。隅田川に三四千噸級の大船が乘り込んで、漕運上の河川能率を大に發揮する日も遠くあるまい。既に今日でも東京市に集散する貨物の總量約二千萬噸の四割は水運によつて居るが、改修計畫完成の曉は之を二倍にすることは容易であると云ふ。

運河標準斷面圖・二等運河（55m幅）



備考	三等運河	一碩	(幅 47m)	航行船	4	繫船	2
		二碩	(幅 40m)	航行船	3	繫船	2
	四等運河	一碩	(幅 33m)	航行船	2	繫船	1

兎も角東京市は地の利に惠まれて居ると云ふか、江戸覇府の先人が殘した偉業と云ふか、現在市内には隅田川を大宗として六十六の河川が縱横に通じ、其の延長は八萬七千米、總面積約五百三十萬坪にして、全市總面積の二十分の一以上に達し、水の都として十分なる資格を持つてゐるのであるが、前述の如く、東京人は大阪人と違つて、河には頗る冷淡と云ふよりも寧ろ無理解で、河を愛護する念慮はおろか、瓦石を投じ塵芥を捨てる等、河を以てあらゆるものの投棄場と考へて居る程の不心得の有樣だから、折角の河川も現在では不潔非衛生を極めて、市の品位や風尚からは勿論、交通運輸の點に於ても其の効果を十分に發揮する迄には至つて居らぬ。或外人が東京を評して、世界に珍らしい大きなドブの多い都だと笑つたと云ふが、誠にお恥しい次第である。

されば此の市民の經濟生活並に保健生活と重大な關係のある市内の河川の改修は、東京港の修築と相俟つて將來速に解決せねばならぬ大切な問題であると思ふ。

一〇　東京港の現在と將來

一般に都市と港灣との關係は、人體に於ける胃の腑と口腔の如きもので、口腔狀態が吾人の健康と幸福に重大なる關係のある事は容易に首肯される。

これと同樣に表玄關に立派な港を持つてゐると云ふことは、都市の繁榮上に最も必要なる條件である。

東京市は横濱港に近いけれども、一面横濱に陸揚した物貨を更に陸路東京に輸送するといふことは、五百萬住民を有する大東京としては、頗る迂遠な遣方と云はねばならぬ。隨つて百貨出入の水路を此處に開く事は、誠に大東京の經濟活動を促進せしめる上に、非常に緊急な問題である。

今から約九十年前、林子平は「海國兵談」を著して、江戸の日本橋から英吉利・和蘭に到る迄、皆一續きの水路であると云ふ意味の事を述べたが、當時の人は誰一人左樣云ふことは夢にも考へて居なかつたので、幕府は林子平を捕へ、濫りに奇矯の言を吐いて人を惑はすものなりとして、遂に仙臺の牢獄に監禁してしまつた。

然し今日では敢て林子平の言を俟つまでもなく、全く一面の水續きであると言ふ事を誰一人疑ふ者があらう。其處で直接此の水路を利用して、激烈な現代市民の經濟活動を大いに促進せしめようとする計畫は、可なり以前からあつたのであるが、巨費を要する築港問題は常に財政的に行き惱みになつて來たのである。

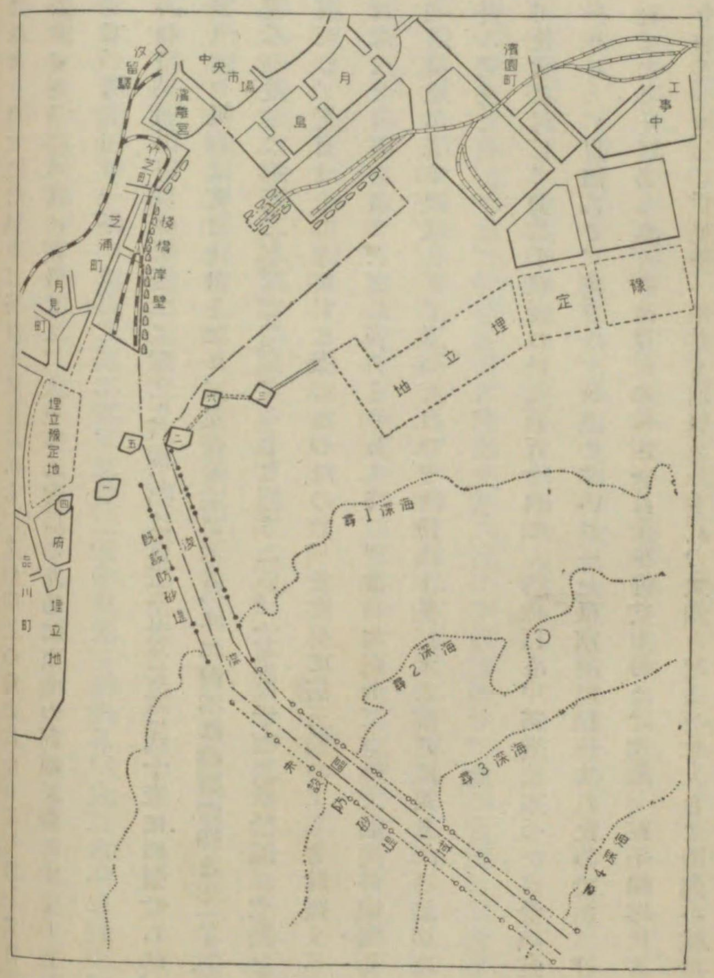
その最初の計畫は明治十三年頃既に樹てられたのであるが、當時は未だ帝都として或は水道の事業や、帝都としての形態を完備せしめるための市區改正といふ樣な色々な緊急を要する施設が山積して居つたので、とても築港事業に迄は手をつけることが出來なかつたのである。

其の後諸般の事業が着々緒に就くと共に、東京市は多年の懸案である築港計畫を愈々實現することとなり、先づ最初の事業として明治二十一年から二十八年頃にかけて隅田川口の浚渫を行ひ、漕運の便を通ずると共に浚渫事業の副產物として、今の京橋の月島を作り上げた。之は勿論築港事業の本質に觸れたものではないが、其の片鱗を現はしたものであることは確かで、當時の事業としては誠に一英斷であつた。次いで明治三十九年に工費二五九萬圓で第一期の工事に着手し更にこれが完成を俟つて、明治四十一年には第二期工事、工費二五〇萬圓を繼續し、大正六年に到つて完成を見たが、其の結果隅田川口の航路は水深三・六米、幅は百二十米乃至百八十米に擴張せられ、五百噸內外の小型汽船や帆船は航行自由となり、又今の芝浦埋立地は此の工事の副產物として築造された。

然し海運界の發達は到底之を以て滿足する事を許さない。次第に千噸級の船舶が危險を冒して右の航路を溯航し、芝浦地先に蝟集する樣になつたので、玆に更に第三期の工事を計畫することゝなり、工費六百八十萬圓を以て工事に着手してゐる時に、彼の大正十二年の大震災が突發したのである。當時陸路交通が總て破壞されて了つたので、物資は容易に東京市に搬入される途がない。然も市民は物資の窮乏に惱まされて、非常なる窮迫狀態に陷つてゐたので、此の苦境に同情した勇敢な船員達は、危險を冒して約二千噸級の船舶を冒險的に入港せしめ、滿載し來つた多量の食料品や、建築材料をどん〳〵荷卸して、窮乏のドン底に呻いで居た東京市民を救濟したのである。

其處で愈々立派な築港の必要を切實に考へさせられた東京市では、遂に大正十四年に實施中の第三期工事を擴張變更して、工費一千九百萬圓を計上し、工期を昭和七年として築港の建造工事は着

東京港修築計畫圖



着進行中であり、既に八分通りは完成して居るから、之が竣工の曉には今日横濱港を煩はしつゝある內國航路船舶を直接本市に招致して、大東京の發展のために至大の利福を齎らす事であらう。

今工事の概況を紹介すると

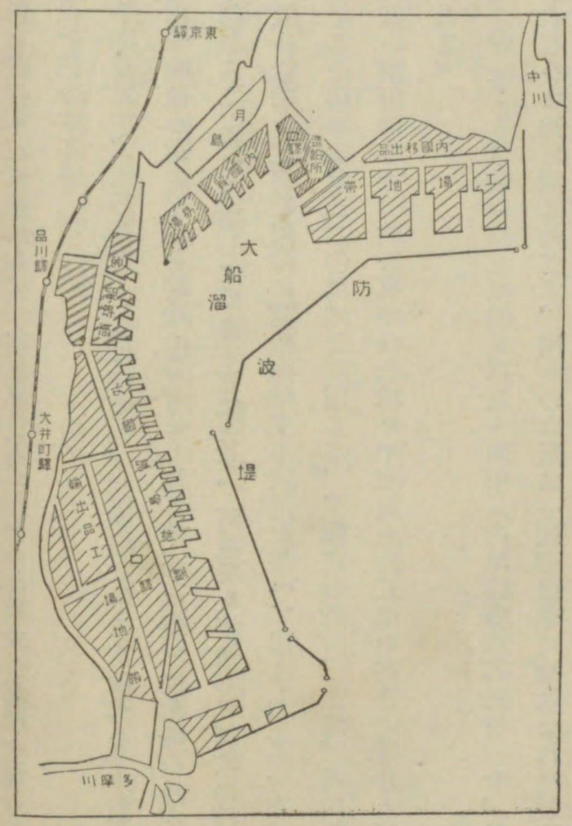
航路は水深干潮面以下六米乃至六・六米に浚渫し、芝浦埋立地に水深七・五米の繫船岩壁を築造して四千噸乃至六千噸級の船舶七隻を同時に繫留せしめる外、更に灣內は砲臺の外水深六・六米の地點に到る航路全部を六・六米に浚渫して外海と連絡させ、防波堤を築造して既設の棧橋と合せて、二千噸乃至六千噸級の船舶十三隻を同時に繫船荷役する設備を整へて居るし、又一方航路及び港內錨地の開鑿浚渫による土砂の總量三二〇萬坪を利用して、芝離宮の前面、芝浦、品川停車場先、月島の東南部、深川區の東南部等で、約百萬坪の土地を干潮面上約三米の高さに築き上げる埋立工事も盛んに進行中である。

現在東京港で呑吐する貨物の總量は約七百五十萬噸（內地諸港中第五位）で、其の內直接東京港で本船が荷役するのは約四割に過ぎず、殘りの六割は一旦橫濱港に積込まれた貨物が、艀船で再び此處へ輸送されるのであるが、將來は此の輸送費は全部節約し得るは勿論、艀船輸送によつて生ずる貨物の損傷や、時間の浪費等、何れも直接東京市民の負擔となるべき大きな損失が除かれること

になるので、築港による利益の著大なる事は云ふ迄もない。

然しなほ右の第三期工事は、單に港内荷役をなし得る程度に止つて、港灣としての機能を十分に

築港計畫略圖



發揮すべき水陸連絡の設備等は殆んど缺如して居るが上に、其の荷役能力も一ヶ年三百六十萬噸に過ぎず、既に諸般の復興事業を完成せし今日、大東京の物資は愈々輻輳する一方であることに顧みて、茲に東京市は昭和六年度以降十ヶ年の繼續事業として、三千萬圓案の東京灣改修計畫を議決したが、是れによると防波堤に圍まれた全域を本船溜りとし、其の深度を六・六米乃至七・五米に浚渫して、六千噸級の船舶六十餘隻を同時に碇泊せしめ、其の中の三十四隻を同時に接岸荷役せしめ得る豫定であつて、此の計畫が一度完成の曉には大船が堂々東京港に蝟集して、芝浦から洲崎方面の海運事業が頗る活氣を呈することは勿論、更に全市の商工業も一層隆盛となり、復興帝都に更に一段の活力素を投ずる結果となるのであらう。

九　文化的都市としての施設

一　大東京都市計畫の實施

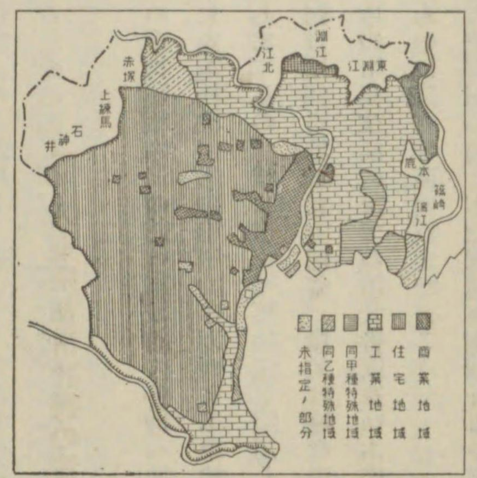
江戸から東京へ、新日本更生の日を迎へて江戸の町を其のまゝ東京と改められたものの、すべてに新しく生れ代らんとする市民に對しては、文明都市として改善を要する點多く、機會ある毎に改造されつゝ來たのである。

維新以來、帝都の施設經營に就ては歴代の政府も、特別の考慮を拂つて居たのであるが、大正九年の第四十一議會に於て都市計畫法及び市街地建築物法が定まつてから劃時代的に實施の機運に向つたのである。

即ち大正十一年には大東京地域の內閣告示となり、更に震火災後には都市計畫地域、防火地區、風致、風紀、美觀、保健各地區の設定及び土地區劃整理を見るに至つた。

現在の都市計畫法即ち十月一日より實施されたる大東京の地域は、大體東京驛を中心として現在の交通機關で一時間以內に到着し得る距離の所を集めたものであつて、法制的には先づ東京驛を中心として半徑十哩の圓を描き、其の圓周內に包括された地域に就て、更に現行の行政區劃を參酌して定めて居るのである。即ち舊東京市十五區の外に、荏原・豐多摩・北豐島・南足立・南葛飾の五郡の一市八十二箇町村の區域である。

都市計畫地域



廣さは凡そ五百七十一平方粁、先づ現在の東京市の面積八十一平方粁に比して七倍の大きさに當るほどであつて外國大都市に比して地理的には多くの遜色を見ないのである。

これは要するに、將來人口約七百萬を包含する首都の構築であつてその居住密度は一ヘクタールに付市內三〇三、郡部九五（近郊一五二、外郊七六）を目標として設定されたもので、この立案の資料となつたものは、一九二〇年の國勢調査によつたものである。

一　大東京都市計畫の實施

我が國における地域の問題は、前述の通り大正九年に市街地建築物法が設定せられ、東京・大阪・京都・名古屋・神戸・横濱の六大都市に適用されるやうになつたのであるが、東京市に於いては最初之を市内にのみ適用し、次いで、大正十一年八月から隣接二十七ケ町村に適用され、更に十二年十一からその範圍を擴げて九ケ町村を加へ現在では近接三十六ケ町に適用されることになつたのである。

この市街建築物法の施行區域内に各種の地域を定め、閑靜快適な方面を住居地域とし、繁榮利便な地を商業地域、生産能率的な方面を工業地域とし、而してその何れにも決定し難きものを未指定地として、この地域に市街建築物法を運用して、それ〴〵の効果を見るのである。その全面積に對する割合は住居地域五十四%、商業地域十二%、工業地域三十二%、未指定地域二%である。

都市の密集生活に於ての最大脅威はいふ迄もなく火災である。故に地區の問題でその最も重きをなすものは防火地區の設定である。

特に我が國の如く木造家屋が主體となつてゐるものにおいては、偶々地震、暴風雨等に於て火災の起る時はその被害は甚だ大にして、昔より火事は江戸の名物の一つに數へられるに至つたのである。歐米先進國が防火建築によつて火災を或程度まで制禦してゐる事實によつて見るも、防火問題は都市生活に重要な意義をもつものである。

風致・風紀・美觀・保健の各地區は都市の品位を向上せしめ、都市美を充實し、又一方には多數の密集生活を快適ならしむるものであるが、實際に適用されてあるものは風致地區だけである。

これは美觀地區が都市における建築美を期したるに對し、都市の内外に於ける自然美を維持してその破壞を防ぐために設けられた地區で、この地區内に於ける建築は當局の許可なくしては、濫りに新築改築を行ふことが出來ないのである。現在この地區に指定されてゐるものは、明治神宮を中心とする主要街路の沿線兩側奥行十間及び神宮外苑（約二十三ヘクタール）洗足池附近（約三〇ヘクタール）善福寺附近（約六〇・ヘクタール）石神井附近（約五七・ヘクタール）江戸川小鮎溜附近（約三二五ヘクタール）等である

土地の區劃整理は、大震災による燒失區域の大部分に對して土地の利用を增進するために、土地の分合、區劃形質の變更、道路・運河・河川・公園等の變更廢置等を行ふものであつて、從來雜然として狹かつた道路も、こゝに井然たる而も廣々とした道路となり、區界、町界、町名番地も整理し一目瞭然たる區劃となつたのである。

二　道　路

「風吹けば砂煙りたち雨降れば
　　泥田なりけり都の大路」

「秋雨や泥鰌ゐそうな江戸の街」

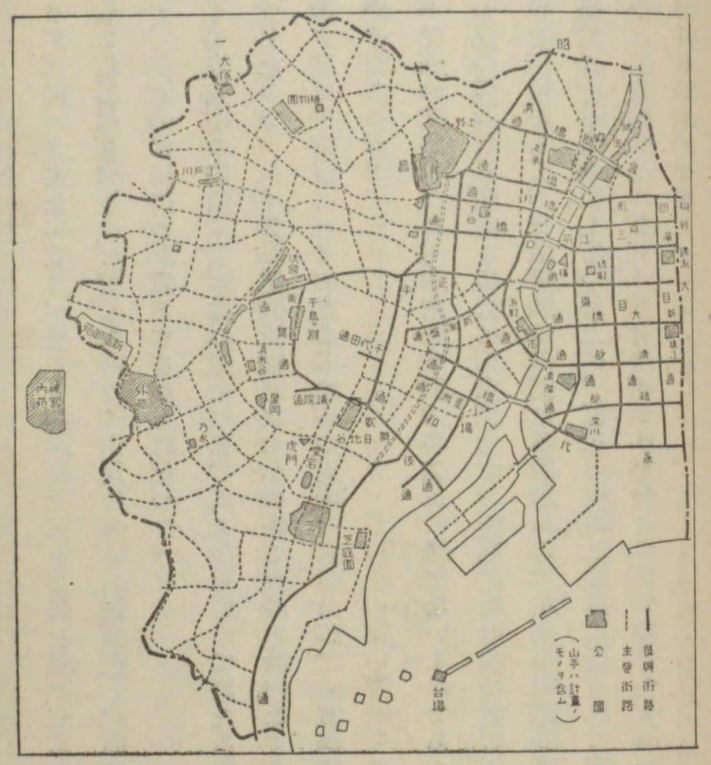
之が大震災以前、否最近迄の東京市の街路の狀態であつた。即ち風が吹くたびに未鋪裝の道路から砂ほこりが舞ひ上り、わけて烈風の日には撒水の不十分なのに乘じて砂塵が層をなし、ために空は本來の朗らかな碧色を失つて灰褐色に曇り、戸障子の細い隙間を通して室内に迄も侵入し、市民はカサ〳〵した砂埃りの中に住まねばならなかつた。

「砂利まきて下駄のローラで固めさせ
　　また掘り返す都の大路」

「固まると見る間に又も掘返し
　　雨に小田なす都の大路」

之も地下埋設物の整理によつて、始終掘り返しをやつて居た當時の惡路に對する呪ひの聲であつた。

整備せる東京市の道路



道路は元來都市活動の大動脈とも見るべきものであつて其の影響する處は極めて大である。牛車や手車が交通の重要な機關であつた時代には、昔の砂利道でも或は我慢が出來たかも知れないが、今日の樣に乘用或は運搬用として盛んに自動車が使用される時代には、迚も砂利や砂埃りの道では堪へられるものでない。

そこで是等の要路を改造して、市民を砂塵と泥濘の苦難から救ひ、一日も早く愉快な

幸福なそして安全な帝都を作り上げることは、誠に焦眉の急務として朝野のひとしく痛感したる處であるが、偶々大正九年五月、畏くも御内帑金三百萬圓を特に東京市の路面改良奬勵費として御下賜あらせらるべき御沙汰に接したので、市民は痛く感激恐懼し、同年十月市においても道路局を開設して、根本的に街路の鋪裝をすることになつた。

斯くて東京市の街路事業は其の緒につき、着々歩を進めて居たる折柄、大正十二年九月の大震災が突發したので、玆に其の鋪裝計畫は根本から樹て直しを餘儀なくされる樣になつた。

大震火災は東京市にとつて實に未曾有の災禍であつたが、一方街路網の樹て直しには此の上もない好機會であつた。

即ち從來の街路事業は、所謂既成都市の修正に過ぎないものであつたから、因習上、經濟上、或は其の他の種々なる煩雜な事情に拘束されて、徹底的な改善は實行不可能であつた。所が一方では自動車を初めとして、交通機關の急速なる發達から、在來の街路では、道幅が狹くて其の機能を十分に果すことが出來なくなつた上に、都市の急激な發展に促されて家屋は無秩序に櫛比し、一度火災が起れば類燒を免れない。折角馳けつけた消火ポンプでさへも隘路や袋路次のために現場に近づき得ない不便があつた。

されば都市の安全からも美觀からも、何等かの機會に打開せずば遂からず行き詰らんとして居た折柄、此の大震火災の好機を掴んだのであるから、復興街路網には先づ理想案を樹てることが出來た。即ち復興事業に關する道路については、幹線道路の鋪裝は政府が之を施工し、補助線道路の鋪裝は東京市に於て施行する事となり、兩々相俟つて約百五十萬坪の輔裝を了し、之に從前施行の分を合すると其の面積約二百四十五萬坪、即ち市内總道路面積の五十五%に上り、今や主要街路の路面は見違へる程美しくなつたのである。

街路の系統は主として下町方面では、品川から千住大橋にかけて帝都を南北縱貫する昭和通、龜戸から市ケ谷見附にかけて同東西に横斷する大正通を始め、環狀道路と放射道路を合せて五十二線の幹線道路と百二十二線の補助線道路とが新設或は擴張されて、丸の内を中心としたる規則的な街路網を形成し、震災前に較べて全く隔世の感があるが、燒殘りの山の手方面及新編入市域地方では依然として數百年前の舊態に置かれて居るので、今日なほ交通或は保安上に幾多の不利を釀しつゝあることは誠に遺憾である。されば山の手及び外廓地域の都市計畫道路の實施は帝都百年の利益のために、市民の最も奮勵努力せねばならぬ處であると思ふ。

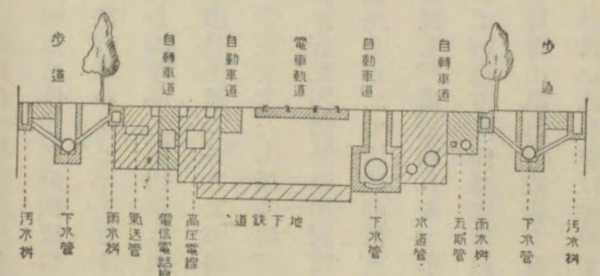
なほこれ等帝都復興道路の鋪裝にはその交通量の狀況、道路の地位、勾配等を斟酌して、車道に

は舗石・舗木・アスファルト・煉瓦・コンクリート等を用ひ、土地の狀況によつては、碎石の上にアスファルトを塗つた簡易舗裝を併用してゐる處もある。

斯くて東京市の街路は半分以上も舗裝が行き渡つたので、曾て見たるが如き黄塵萬丈の砂埃りは殆ど鎭靜されて、空は本來の明色に甦つた計りでなく、泥田の東京の惡聲も今日の東京の中心區からは全く霧散したが、更に舗裝路の普及による利益としては、路面維持修繕費の節約、自動車運轉費の節約等顯著なものである。

先づ路面維持修繕費の節約の點では、若し現在の東京市の舗裝道路二五〇萬坪が依然砂利道のまゝ存在したと假定したら、其の路面の維持修繕費は一ヶ年約四六〇萬圓を要する筈であるが、之を舗裝したがために砂利道の場合に較べて簡易舗裝は約六割、剛質舗裝は約三割五分の費用で足りるから、之迄の舗裝普及の結果として一ヶ年に二六〇餘萬圓の節約が出來ることゝなるし、又自動車運轉費の節約の方面では、ガソリンやタイヤーの消耗が砂利道を運轉するのに比して少くとも

街路內構造物配置標準
（三十三米街路の例）



三割は減ぜられるし同時に車體の壽命も延びることになるから、之を現在の二萬臺餘について考へて見ても、節約費の年額は一千萬圓にも達する見込である。今日市內に五十錢タクシーが盛んに利用されて居るのは、勿論物價低落の影響にもよるが、主としては舗裝に負ふ所が大なのである。

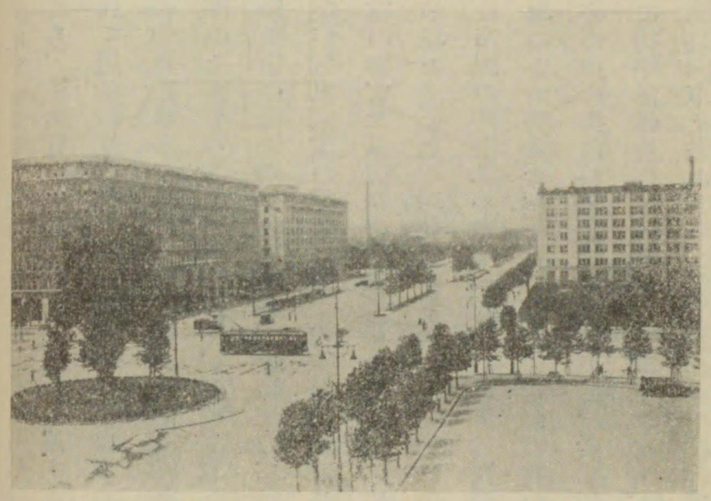
其の他自動車のタイヤー、下默、靴の類も保存年限を增し、又一般市民の衛生、保安、交通、活動能率の上にも多大の利益を與へ、更に東京と云ふ都市の全機構から見ては帝都美の增進となり、市民の愛市の喚起の基となる等、之によつて資益されたる處は誠に多大であると云はねばならぬ。

然しながら東京市の街路には、將來なほ旋設されねばならぬ幾多の問題が殘されて居る。先づ第一に無言の警官たる街燈の增設によつて、街路に爽快な明るさを普及せしめねばならぬ。市民の夜間活動が益々多くなる現代都市として、完全なる照明施設は全市の能率を增進せしめるものである。

次には市民の健康上からも、都市としての美觀の點からも街路樹木を增植して綠化に努め、所謂住み心地のよい都市に作り上げねばならぬ。其の他看板や電柱、或は交番、公衆便所、郵便箱、公衆電話等の如き街路の附設物を整頓して、大に街路美の發揮に努めねばならぬ。

殊に街路清掃の作業は極めて重要であつて、現在東京市では約七十臺の撒水自動車、約三十餘臺の洗滌自動車を動かして、舗裝路面の清掃作業を行つて居るが市民の公德心がなほ缺如して居るた

東京驛前行幸道路

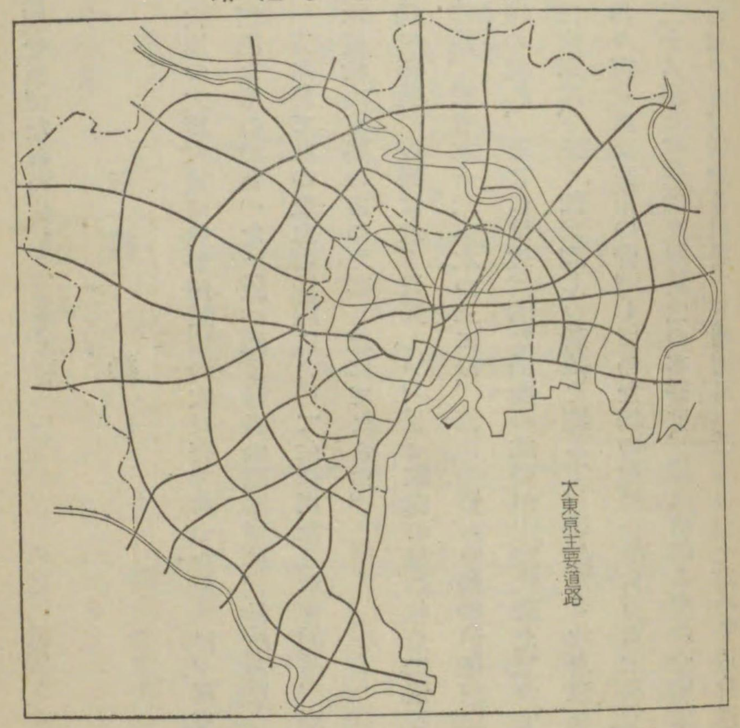


めか、紙屑が散亂し塵埃の路傍に投げ出されることの多きを悲しむ。此の點は宜しく一方に於ては機械的設備を充實して清掃能力を發揮せしめると共に、他面には市民の愛市觀念を刺激して、帝都街路の清潔保持に努めしめねばならぬ。

之を要するに街路は都市の血管で、其の良否は經濟上、保安上、或は風致上、美觀上、市民生活の上に直接大なる影響を齎らすものである。一般にその「街路を見ればその都市が判る」と云ふ諺さへある位で街路が系統もなく亂雜で、塵埃の始末もつかず舗裝も施されて居らぬ樣な都市は、決して優秀な都市でなく、隨つてそうした都市に住んで居る市民の素質がよくないことは云ふ迄もない。

惡路の代名詞の樣に考へられた東京市の道路も、

大東京主要道路



最近數年間の官民の協力による改善の結果、次第に世界の文明都市へのお仲間入りが出來て、帝都としての品位を一段と高める事になつたのは誠に喜ばしい限りであるが、更に吾等は今日なほ殘されて居る未舗裝部分の舗裝完成に力を協せることは勿論、汎く新入大東京地區の一帶にかけて都市計畫街路の新設擴築に努め、其の他街路照明の改善普及、街路樹の愛護、街路の清掃等にも最美の注意を用ひ、實用と美を兼ね備へた眞に世界に誇るに足る理想的街路の實現

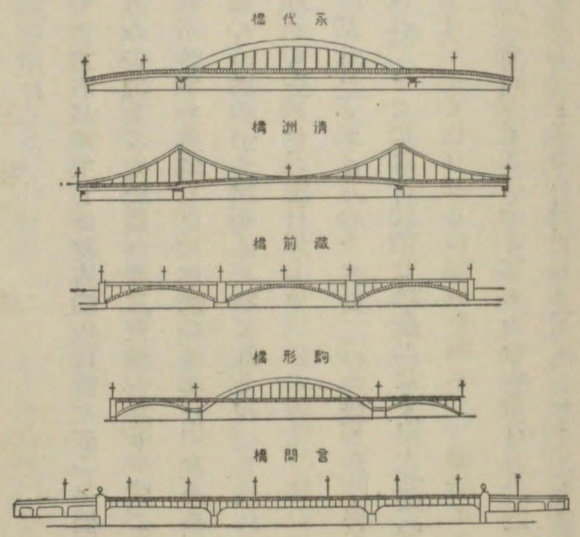
を期せねばならぬ。

三　橋　梁

大正の大震火災は我が國曠古の大災害であつただけに、東京市の受けた傷痍も未だ曾て見ざる程に深刻なものであつた。數へ難き幾多の悲慘事は、鮮血となつて流れ出たのであるが、然し吾等は又一方に於て此の聖血の洗禮によつて生れ出たる尊き結晶、即ち世界の工學史を飾るに足る、我が土木技術の復興のあつた事も忘れてならぬ。

殊に橋梁の復興は最も目覺しい。見よ蜘蛛の巣の如くに走る數百の街路が、七十の運河網と交叉する所、碧き水と云ふ水の上には、都市美豐かな橋梁が架設された。都鳥浮ぶ隅田川、名にし負ふ茗漁の流れ、そこには近代的な橋梁の雄姿が大空に聳え立つて居る。斯くて凡ての古き衣を脱ぎ捨てた東京は、悉く仕立卸しの新裝を纒ふて、燦然たる大東京と姿を改めて出現したのである。

抑々震災前東京市の管理してゐた橋の數は合計六百六十八であつたが、その約三分の二に當る四百二十六橋は傳統的な燃質性の木橋で、從來帝都名所の一に數へられてゐた隅田川の吾妻、厩、永代の如きも、構造は鐵橋でも橋面は木造であつたために彼の大震災の時比較的震度の弱かつた東京市においては、橋に於ても震害としてはそれ程でも無かつたにも拘らず、その大部分は火災によつて燒落ちた。その數實に二百九十橋、ために猛火に追はれる人々の通路を阻止して、言語に絶する悲慘事を生ぜしめたことは誠に遺憾な極みである。



こゝに於てかこれ等の苦い經驗に奮ひ起つた東京市は、復興局と力を合せて橋梁改新の大業に精進し、一方其の數を增加して交通の利便を計ると共に、他面には深甚の注意を以て最新の構造技術により、文化と美觀と安全の三方面から工夫を凝らして、復興事業中特に道路の復興と共に之が復興には心血を注いだのである。

即ち河床の性質・交通量・風致等を考慮して、石橋、鐵橋、コンクリート橋に分ち特に其の構造は

最も進歩したる技術を以て能く巨大なる荷重に堪へ得る樣にしたことは勿論、更に各々形狀に變化と意匠をこらし幅も取付道路と同一にし、主な橋の袂には各小廣場を設けて之に植樹をなし、又橋下の舟運を便にした。

斯くて東京市が施工した復興橋梁は實に三一一橋で、之に復興局施工の分共の他を合する時は現在東京市の管理なる橋梁數は六三三橋となり、其の中鐵橋とコンクリー橋は約四三〇橋にして、即ち震災前の數字を逆轉して、不燃性橋梁は、三分の二以上を占める事となつた。一つの都會で一時に五百からの橋梁が新築又は改築されて、而も夫れが皆斬新な構造で建設された樣な例は、古今東西を尋ねても全く其の類がない。

橋梁中その主なるものは、隅田川の白鬚・言問・吾妻・駒形・厩・藏前・兩國・新大橋・清洲・永代・相生の十一大橋と、神田川の淺草・和泉・萬世・聖・お茶の水の各橋・日本橋川の日本橋、及び江戸橋等である。

隅田川の河幅は上流で百五十米、下流河口の附近になると二百米にも達するので、此處に架した諸橋梁は何れも之に對應した長大橋であることは勿論、耐久と强度の關係から大抵鐵筋コンクリートの構造であるために、耐火の問題は自然に解決されたが、更に耐震に就ても十分に意を用ひ、特に地盤の惡かつた永代・清洲の二橋を架設したる時の如きは、基礎工事を底部の硬質地盤に到達せしめるために、壓搾空氣工法による大潛函を河底約二五米の深さに沈下し、そこに橋臺、橋脚を築き上げたのである。これは實に本邦の橋梁工事に一新紀元を劃したるものとして名が高い。

さればその工費の如きも一橋につき百四十萬圓乃至三百餘萬圓の巨費が投ぜられて、帝都の偉觀をなすと共に、今後たとひ往年の大震火災の如き災厄を蒙ることがあつても、何等の危惧を要しないまでに完成したのである。

更にこれ等橋梁を概觀するに言問橋は延長二百三十八米、長さに於て十一大橋中第一位を占め、相生橋の一九二米、清洲橋の一八七米等之に次ぎ、江戸橋、和泉橋は共に幅員各四十四米、幅の廣いことでは諸橋を凌駕し、又橋脚の高きものには聖橋（二十米）があり、橋畔の廣場の大なるものでは江戸橋、永代橋、神田橋など、何れも千三四百平方米の植樹地を有するものがある。

奇觀を呈するものには京橋區役所前の三吉橋がある。三叉狀になつた合流點に新設された橋で中央の橋脚から三方に橋が射出して、三方から通行が出來ると云ふ外國にも餘り類のない珍らしい構造である。

殊に隅田川の橋梁は各々その形狀を異にし、或は孤狀をなすもの、或は吊首の山形をなすもの、

欄干の雅的なもの等、漫々たる水に浮び出てたる其の力學的の美觀は、確に帝都の一偉彩たるを失はない。都鳥の屋形船に江戸情調の最も濃かな處として知られた隅田川も、斯くて今や全く以前の面影を失ひ、洋式近代的の橋梁に、恰も歐米の地を蹈む樣な景觀を呈して居る。

なほ市外に於ても、北の荒川、南の多摩川、東の江戸川等にはそれ〴〵新洋式の長大な近代橋が架けられてあるが、中でも荒川放水路に架設されたる千住新橋は、長さ四百六十四米に及ぶ長橋である。

四　上下水道

(1)　上水道

古き希臘の哲學者が萬物を火と水に還元せんとした樣に、水は人類の生活に必要缺くべからざる要素である。自然の美しき情景に包まれた農村に於ては、水は人工を待たずとも滾々と湧き出で止まる所がない。然し凡て人爲の偉大さを物語る都市に於ては水も亦人爲の工作を待たなければ之を享ける事は出來ないのである。

江戸から東京へと目眩しい發達を遂げて來た我が東京市の水道も、その由緒ある歴史と完備せる施設と相俟つて本市諸事業中特筆すべきものである。

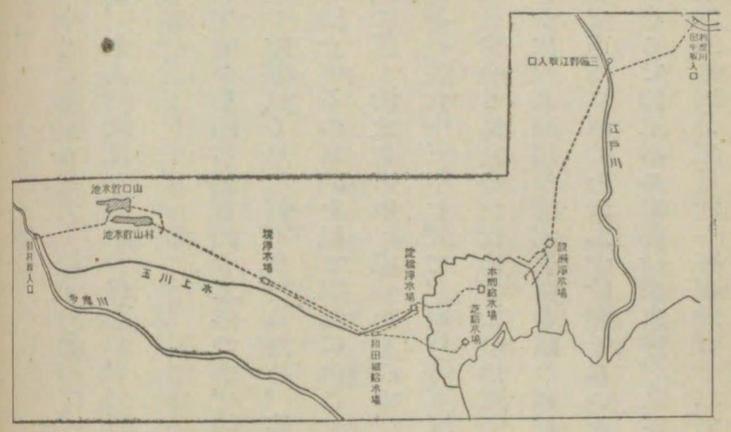
今この事業の狀況を記すに當つて、暫くその光輝ある上水史の頁を繙いて見るに、其處には吾人が、先人の深慮と遠謀の偉業が、三百星霜の時の流れを貫いて、常に市民生活に切實な光を投げてゐる。

丁度今を距る三百四十二年の昔、後陽成天皇の天正十八年、德川家康は江戸入府に際し、此の地域の地盤低く且水質不良なるため、將來、住民の飲料水に惱まされるであらう事と慮り、その後難を防止するの目的を以て家臣に命じて上水道の營造を行はしめた。之が今の神田上水で、市外井の頭に湧く清水を市中に導いたもので、實に東京市上水道の嚆矢である。

その後六十三年を經て、四代將軍家綱の時代に江戸の繁華に伴ひ、從來の設備にては給水の不足を來すやうになつたため、松平伊豆守は幕府の命を奉じて上水改革の事業に當つた。此の新計畫の骨子は、多摩川の清流を西多摩の羽村に取入口を設け、それより十餘里、(約四十粁)の水路を開鑿して市内に導くと云ふ大計畫であつた。

そこで同工事の奉行伊奈忠吉、及び工事請負を命ぜられた多摩川沿岸の庄右衞門・清右衞門等は承應二年四月工を起し晝夜兼行を以て進捗を圖つた結果、僅かに一ケ年餘にしてこの大事業を完成

東京市の上水道



した。之が現在の玉川上水路である。

その後明治二十三年に至つて東京市區改正委員會は、大要次の理由で從來の上水施設に改良を加へることになつた。

一　水源及び水路附近の開發に從ひ水質惡化せること

一　從來使用せる木樋は腐蝕し、水質を惡化し、又外部より不潔物を侵入せしむること

一　從來の水質を試驗せる結果飲用に適せざるを認めたること

一　火災の場合消火用として壓力ある水道を必要としたること

而してその計畫は、舊時の玉川上水路を改築利用して、同系の水を市外淀橋淨水場に導き此處で一旦沈澱濾過した後、喞筒或は自然流下によつて市中に配水するものである。その工事は明治二十五年に起工して前後二十有餘年の歲月を費し、その全部の竣工を見たのは同四十四年であつた。經費實に九百十八萬八千六百七十一圓を投じたのである。

然るに當時の市の實情は、設計當時の豫想と大いに異なり、夏季一日の最大使用料は既に所定給水能力の二十二萬二千六百十二立方米を突破する狀態となり、大擴張の必要を認め大正二年十一月此の事務を開始した。

この擴張設備は從來のものと較べて、その特色とするところは

一　貯水池を設け源水の調節を圖る事

一　水路は全部暗渠又は隧道として途中の蒸發及び滲透を防ぐこと

一　市内の配水には喞筒を用ひず全部自然流下によること

などであつた。工事着手以來、歐洲大戰及び大正十二年の關東大震災等のため、止むを得ず豫定の工期を延長し、或は工事の繰延を行ひ、第一期工事に屬する村山貯水池の大部、羽村、村山線及び村山境線全部、境淨水場濾池二十面の内十二面、境和田堀線の大部、和田堀淨水池一池、配水管約二十四萬四千三百九米等、本工事中の主要部分は昭和二年三月竣工した。

此の工費三千五百餘萬圓で、大正十三年五月より給水能力は一日約二十八萬九千五百立方米に增加した。

第二期に屬する工事中復興工事として施行することになつた村山貯水池の殘工事、境淨水場濾過池三面築造、配水本管四千六百七十三米、新設は大正十三年度より着手し、昭和四年三月竣工した。

以上當初計畫による擴張工事は其の大部分竣工した。なほ殘つてゐるものは境淨水場濾過池五面、境和田堀線暗渠七千四十七米、鋼鐵管六百七十三米の築造工事配水管約七萬六千三百六十四米の敷設である。

是等擴張工事が完成すれば本市水道の給水能力は一日約四十八萬八百四十一立方米となり、一の充實を見る譯であるが、之だけでは本市水道は將來安心といふわけには行かぬ。從來の使用狀態の統計によれば、本工事完成の頃は既に給水の不足を告げるのではないかと豫想せられる。そこで從來の單一水源のみに據らず、江戸川及び利根川に水源を求め、一日一人三・二〇立方米を標準として計畫中であるが、尙一方に於ては所謂大東京に對する給水施設も考慮せねばならぬので、共に水道擴張調査委員會を設置して目下調査中である。

憶へば家庭にありては日常生活の用途を辨じ、火災の際は消火用水となり、或は工場用水に、汽罐用水に、將又噴水となつて市民の目を樂ましめてゐる水道の水の半面には、都と數十里隔てた地點に於て、莫大な人爲的不斷の努力を拂はれてゐることを知らねばならぬ。なほ給水の現況を見るに、給水開始當時の一日の給水能力は十六萬六千九百五十九立方米であつたが、その後漸次改良擴張して現在では一日三十八萬九千五百七十一立方米の給水が出來るのである。

因みに本市近郊に於ける上水事業は、東部南葛飾方面には江戸川上水町村組合給水區域（隅田町外十一ヶ町）あり、北豐島、豐多摩には荒玉水道町村組合（給水區域中野町外十二ヶ町）あり、澁谷町（給水區域澁谷町のみ）目黑町（上水を澁谷町より分讓を受く給水區域は目黑町のみ）は單獨に之を經營し、荏原郡には玉川水道株式會社（給水區域品川町外十三ヶ町村）あつて給水に當つてゐるのである。

（2）下水道

近代都市計畫に於ける基礎的施設の一として、且市民の保健衞生上最も重大なるは、上水道の施設に伴ふ下水道の完備である。

市の下水道計畫は、明治四十一年の成案を基礎とし、本市及び近郊の發展狀況に應じ、大正十三年一部の變更を加へたもので、其の要領は、本市舊市內の將來人口を三百萬と見做し、一人一日の

排水量を七立方米、一時間最大降雨量を五十粍（一坪當り約一石）とし、之等を標準として設計したものである。

而して之等の汚水及び雨水は、主として合流式の管渠により、雨水は適所に雨水吐を設け、河川濠池に放流し、汚水は凡て一旦所屬の汚水處分場に收容し、清淨處分を施した後、便宜の河海に放流するのである。之が爲に地勢面積其の他を考査して下水系統を次の如く三區に分割し、各系統には夫々處分場を設置し、又低地にして汚水の誘導困難なる場所には喞筒場を設けて排除する計畫である。

第一區

區　域　芝・麻布・赤坂・麹町・四谷・牛込・小石川・日本橋の八區並に本郷・神田・京橋の大部分及び下谷の一部。

面　積　四十六萬八千二十八アール

喞筒場　麹町區錢瓶町及び芝浦第四號埋立地先

處分場　府下六郷川口

第二區

區　域　淺草區の全部及び下谷區の大部分、神田・本郷の一部

面　積　約八萬二千三百三十五アール

喞筒場　神田區和泉町及び淺草區田町

處分場　府下北豐島郡三河島町

第三區

區　域　本所・深川の全部及び京橋の內月島

面　積　約十二萬四千九百七十一アール

喞筒場　本所區業平橋附近及び三ノ橋附近・深川區豐住町・月島初見橋附近

處分場　府下南葛飾郡砂町荒川放水路口

下町方面の下水道改良事業は、略〻解決を告ぐるもなほ一部の幹線、枝線、喞筒場等未施行のものあり、山手方面の下水は雨水氾濫被害甚だしき箇所を部分的に施行して當面の急に應じた程度の改良に止り、一般的下水の改良施設をなすに至つてゐない。

之が完成を期するには其の經費約六千五百萬圓を要し容易の業ではないので、先づ第二區の殘部

及び震災區域内の殘部・喞筒場・處分場の設備充實並に山手方面に於ける緊急放置し難き箇所に第三期下水道改良工事を行ふことゝし、工費三千三百三十萬圓を豫計し、十ヶ年の繼續事業として目下計畫中である。

以上の如くにして、復興事業完成に至るも下水事業は約二分の一の施行に過ぎず、尙前途遼遠の感がある。而して未施行部分の系統は全計畫中第一區に屬する部分にして、復興事業として既設の麴町錢瓶町及び芝浦第四號埋立地に設置したる喞筒場により汚水を遠く六郷川口に送り處分を行ふもので實に本市屈指の大事業である。

尙下水道改良事業は、市民の保健衛生上一日も忽に附することの出來ない問題であつて、本市はその完成により始めて文明都市として面目を全うすることが出來るに至ると云ふべきである。

五　公園と墓地

都市に風致を添へ市民の保健娛樂に資し、震災火災には避難の地たらしむるものは公園である。公園は實に都市の窓である。市民のオアシスである。啻に都市の美觀品位を高めるのみでなく、稍もすれば自然から遠さからうとする市民の生活に、缺くべからざる慰安を與へる所である。

我が國の都市は何れも公園の設備が不完全であるが、最近その必要が力說された結果は、各方面を通じて公園の施設計畫が考案されるに至つた。

殊に東京市は往年の大震火災に於て、公園の存在が市民の生命保存の爲に非常な効果を奏した點からも、公園の必要は絕對に認められてゐる。

大東京に公園の設けられたのは、明治六年で太政官布告により金龍山淺草寺・三緣山增上寺・東叡山寬永寺・富岡八幡宮・飛鳥山の五ヶ所を選び人民遊覽の地とされたのが嚆矢である。

其の後、都市に於ける公園の使命が漸く理解され、又市民の之に對する要求も次第に强くなつて來た結果、明治二十三年には公園計畫が發表されるに至つた。而して同三十六年に至り先づ近代的設計を施された日比谷公園が新設され、東京市の公園に劃時代を作つた。

その後に於ても市は市區改正其の他機會ある度に公園の擴張に努めたとは云へ、事業は殆ど行詰りの狀態であつたのであるがこの時、畏くも陛下は市民の保健を御軫念遊ばされて、大正二年二月市外井之頭の御料地を、同十三年一月上野公園同動物園、芝離宮及び猿江御料地等を公園として御下賜になつた。又安田家から本所横網町の同庭園、岩崎家からは淸澄庭園の寄附あり、次いで錦糸公園の開園等あり、殊に今日に於ては國の經營であるが明治神宮外苑の大公園が竣工して市民に開

放され復興計畫として隅田其の他の大公園及び小公園が建設されることゝなつて市民は次々に公園に惠まれて來た。

現在、市の公園としては在來のもの日比谷其の他三十二ケ所のほか、復興計畫によりて新に建設せる大公園三ケ所（濱町、錦糸、隅田）及び小學校に隣接する小公園五十一ケ所ある。

而してその面積は二、二八八、二三一・四四平方米で、市民は五人で約七平方米の公園を持つ割合となる譯である。

之を歐米の都市即ちロンドン市民の一人當九平方米、パリー市民の一人當七平方米、ワシントン市民の一人當五二・八平方米に比すれば東京市の公園は未だ文明都市としての要求に遙に遠いと云はねばならない。

又市の公園には各種の特殊施設を爲して市民の利用に供してゐる。その著しきものを擧げると、上野公園の動物園、芝公園のプール及び競技場、日比谷公園の音樂堂及び庭球場、舊安田庭園の公會堂等で、これ等は右相當の使用料を徵し公園經營上の重要な資源となつてゐる。

次にその主なるものを擧げて見よう。

公園名	面積（平方米）	位置	施設概況
上野	六一二、九五九・三一	下谷上野公園地	動物園、兒童遊園
芝	四六一、七六六・三一	芝公園地	プール、競技場
日比谷	一六四、五五七・六七	麹町西日比谷町	音樂堂、運動場
淺草	一六〇、一四五・五二	淺草公園地	貸店舗（仲店）
麹町	三〇、五六二・七一	麹町永田町	
清澄	四八、五五五・二二	深川伊勢崎町	大正記念館、砂場、運動器
猿江	四七、七五一・九〇	深川本村町	
下谷	五一、四九五・三一	下谷竹町	運動器
大塚	一三、一五二・八五	小石川大塚仲町	教材園
横網町	一九、五八〇・八一	本所横網町	震災記念堂
舊安田	一三、三二六・三〇	本所横網町	公會堂
舊芝離宮	四九、一八七・三三	芝濱崎町	
井之頭	二四〇、一三六・五三	府下北多摩郡武藏野村	水泳場
飛鳥山	四五、三八四・三一	府下北豐島郡王子町	

以上の外、清水谷・虎ノ門・千鳥ケ淵・坂本・千代田・數寄屋橋・愛宕・乃木・白山・江戸川・湯島・宮本

今戸・待乳山・深川・四谷・綠町・土手・臺場等、その面積合計二、一四三、九四八・八八平方米に及んでゐる。

小公園は全く帝都復興事業の一として計畫されたもので、總計五十一箇所を罹災區域の小學校に隣接して設け、學校運動場の延長たらしむると共に一般兒童の運動遊戯場とし、他は方面的休養公園として市民の散策の場所たらしめ、且非常時には防火若くは避難所に供せしめんとするものである。

面積は所謂小公園の名の如く、一箇所約三千平方米を標準とし、最小千七百平方米から最大は四千七百平方米となつてゐる。

園の三、四割は林樹花園に充て、殘りの六乃至七割を廣場とし、道路側は非常時に容易に跳び超え得る低い鐵柵とし、數ケ所には門を設けてゐる。

又園の一隅には二百平方米内外の地を劃して、之に滑臺、ブランコ、砂場、シーソー、ジヤングルジム、テイーターラダー、パラゾンメルバー、金棒等を備へ、兒童の遊戯場としてゐる。

東京市内外に於ける史蹟は、年代から云つても遠く先史原始時代の遺蹟を有し、尙近世文明搖籃期たる江戸時代の史蹟は極めて豐富である。加之、帝都としての東京の史蹟に至つてはその數甚だ多いのである。名勝に於ては花樹花草の名所を始めとして、江戸期を代表する人工的名勝である庭園が多數遺存してゐる。天然記念物に於ても巨樹老木又は珍木史樹の生存して古き時代を物語つて居るものが尠くない。

是等の史蹟、名勝は勿論、天然記念物は吾が東京市の過去と現在を雄辯に物語る尊い記念物であつて學問上からも思想上からも永久に保存を要するものであつて、後に項を改めて說くことゝしてこゝには之を略することにする。

墓地は宗敎との關係上、多くは寺院に附屬し、その境内を共葬の墓地として各寺院が管理してゐたものである。明治維新後は官收したが後、自治制を布くに及び市長の管理となつた。

現在寺院附屬の物の外、靑山・谷中・雜司谷・染井・龜戸・橋場・多摩の七共葬墓地がある。これ等の中最も新しいものは多摩墓地で、市の發展に伴ひ狹隘を告ぐるやうになつた市内共葬墓地のために墓地擴張事業として、大正十二年に開設したもので、敷地面積四十三萬八千平方米を有し、北多摩郡の多摩小金井兩村に跨り、武藏野の自然の景をもつ日本では最初の近代的公園墓地である。

災前は、下谷・淺草兩區に寺院が最も多かつたので、その附屬墓地も多かつたが、復興と共に特別由緒あるものの外は郊外に移轉したものが多い。

今では芝の十三萬平方米、下谷の九萬平方米、本郷の八萬平方米、小石川の六萬五千平方米、淺草の五萬平方米などが主なものである。

六　防疫と清掃の施設

市民の健康保全を對象とした保健衛生の問題は、都市の繁榮、市域の膨脹、人口の稠密乃至は經濟上の關係などによつて益々重要な問題となつて來た。

文化の發達につれて市民一般の間にも次第に衛生思想が普及されてはゐるが、更に個人衛生の範圍を超えた公衆衛生的施設は一層緊要なる研究を要する問題である。即ち飲食物、住宅などに關聯して健康保全の爲にする衛生施設、人口の增加による塵芥、糞尿、汚水等の處理、又は公園、墓地等の諸設備、傳染性疾患の豫防、其の他罹病者に對する醫療施設等は其の主なるものである。

都市保健衛生施設中、先づ擧げねばならないのは、防疫施設である。歐米の都市に於ては防疫施設の完備に伴つて、どれ程傳染病を絶滅し得るかによつて文明標準を測定するとまで云はれてゐる故に既に帝國の首府として中外の注目の焦點になつて居る本市の防疫施設は、實に重要な使命を持つてゐるのである。

そこで、その防疫施設としては、種痘法施行、傳染病豫防法（豫防注射、繩・蚊の驅除）健康診斷、豫防知識の普及（活動寫眞會及び講演會）隔離所及び消毒所、施療病院及び治療所等の經營がある。

施療病院及び治療所には、市立に築地・大塚・駒込・本所・深川・廣尾・大久保の病院と野方の東京市療養所があり（傳染病床百五十乃至九百を有す）その他、恩賜財團濟生會病院、泉橋慈善病院、聖路加國際病院（築地）同愛記念病院（米國富豪の寄附により建設）赤十字病院等がある。

中でも濟生會は明治大帝が畏くも施藥救療に就て贈はりし巨額の御內帑金を基として建設されたるもので、芝區赤羽町の本院の外、四谷、牛込、小石川、下谷、淺草、本所、深川の各地に病院又は診療所を有し市外の隣接二十ケ町に各診療所を有す。

さて塵芥の處理法について語るに、

吾々が日常生活上生ずる不用物である塵芥は、市內から一日平均二十三萬貫も排出されるのである。かつて本市が近代的都市を形成しなかつた時代には、塵芥の處分も頗る簡單に、市民各自によつて片付けられたのであるが、市域の擴大と人口の增加とは、一面に於て塵芥の增量となり更に個人の處分に委せることが困難となつた。

かくてその處分は當然市に於て行はなくてはならないことになつたのである。

各戸の塵芥箱から手車や自動車に積出して、河岸地所在三十ケ所の塵芥取扱所に搬出し、傳馬船に積載して深川區地先埋立地の燒却場に送り陸揚して露天燒却をする。而してその殘灰は河川港灣の浚渫に因つて生ずる土砂と共に埋立の用に供するのである。この處分のため一日に手車八百五十臺、自動車二十臺、傳馬船百五十艘、曳船七隻及び人夫千三百人を使用し、年額百五十五萬圓の經費を要すといふ。

塵芥の處分と共に清掃施設の一部をなすものは屎尿の處分である。從來本市の屎尿は、古くは近在の農民又は掃除屋と稱する屎尿賣買業者が、地主・家主又は差配人と契約して、相當の代價を納め又は年額金を前拂して、月に一二回宛汲取つて居たのである。

然るに都市人口の增加につれて、月一二回の汲取では間に合はぬやうになり、大正八年二月豫算五千圓を以て停滯の最も甚だしい方面を選んで臨時汲取を始め、其の後數回臨時汲取を行つて市民の便を圖つたのである。

次で大正十一年に至り市民二百萬、一人一日の屎尿排出量を約五合とし、汁一萬石の五分の一に當る約二千石を一日の處分量と定め、市區共同の直營で先づ牛込、小石川、本郷の三區に汲取を開始した。

その後、設備の完成につれて、數次其の區域を擴張し、現在に於ては市内十區に亘り、河岸地に遠く民間營業者が汲取を厭ふ場所で、附近數戸申合せて、區役所に委託したものに對しては一荷二十四錢の料金に取つて汲取を行つてゐるのである。

現在の處分方法は、鐵道と船舶によつて埼玉縣及び千葉縣へ輸送し、又肥料の不需用季節に於ては下水道幹線に添ふて設置してある三個所の屎尿投棄場より三河島の汚水處分場に送り、一般の汚水と共に淨化し、荒川に放流することになつてゐる。

七　社會的の施設

都市に於ける社會問題は近時益々その領域擴大し、日と共に深刻化しつゝある。從つて之に對する政策並に施設は都市政策中に於ても特に重大視されるに至つた。

殊に東京市は近代に於ける我が國文化學藝の源泉地であり、又商工業の一大中心地であるため、幾多の社會問題が常に惹起しつゝあるので、之が對策こそは、今後本市の重大なる責務であると云はねばならぬ。

東京市が時勢の要求に促されて、積極的に社會政策の實施に着手したのは相當古き歷史を持つて

ゐる。即ち明治五年以來府營私營の變遷を經て來た養育院を明治二十三年に至つて市營とし、明治四十四年には施療病院、職業紹介所等、何れも他の都市に先んじて施設經營をして來たのであるが、今日に於ける社會事業の體系を造つたのは、大正八年の米騒動を動機としてゐる。超えて大正九年社會局の新設と同時に各種の施設を起し、同時に又絶えず社會狀態の調査研究に努力し來つたのである。

即ち年々約六百五十萬圓の經費を以て、これが經常費としてゐるので以下順次その主なる施設について述べることとする。

養育院は上述の通り東京に於ける最初の社會事業で、明治五年露國皇太子の御來遊に當り市中に徘徊する多數の乞食、浮浪者を狩り集めて一ケ所に政容したが、國賓御退京の後之を市中に釋放することの不當を慮り、本郷區舊加州藩邸内に收容することゝなつた。これが養育院の前身である。

明治廿九年になつて、小石川區大塚辻町に一萬餘坪の地に事務所と收容所を設立移轉し、その後千葉縣勝浦町に保養所を、府下北多摩郡武藏野村に不良少年感化部（現在井之頭學校）を新設し、西巢鴨にも兒童收容所を設けた。更にその後府下板橋の板橋分院の隣接地に三萬坪の地を得、百二十萬圓の工費を以て新院を建築して大正十二年九月こゝに移轉した。

現在こゝに收容してゐる人員は本院千五百人その他の分院を合せて約二千二百人である。

その最初の收容は全部乞食であつたが、現在に於ては窮民、行旅病人、棄兒、遺兒、迷兒、不良少年の感化等である。

兒童保護事業に就ては、震災後、築地、淺草、深川等に產院及び乳兒院を設けて先づ產れ出づる者のために助產及び乳兒の世話をなし、長じて母の勤勞時間の間託兒設備として大正十三年本所區入江町に江東託兒所を設けたのを始とし、震災後は益々その必要に迫られ、深川、本所、月島、小石川、下谷等のものを合せて十二ケ所、取扱兒童は月島の昭和四年度中延人員三萬四千を筆頭に、平均各所一萬八千人合計約二十二萬七千人を算へてゐる。

復興事業の一つとして計畫されたものに授產事業がある。これは家庭的職業を修得させて收入の道を計り防貧の一助となさんとするもで、中央、淺草、小石川、本所、深川、四谷の六ケ所にありその主な仕事はミシンである。その他、市及び官署、會社、工場等の支給服、一般學生服、兒童服等相當の成績を擧げてゐる。

次に職業紹介の事業であるが東京に於て職業紹介所の開設を見たのは明治四十四年芝と淺草に創設されたのが嚆矢である。爾來次第に擴張して大正十一年末には、中央職業紹介所の外十四ケ所を

九　文化的都市としての施設

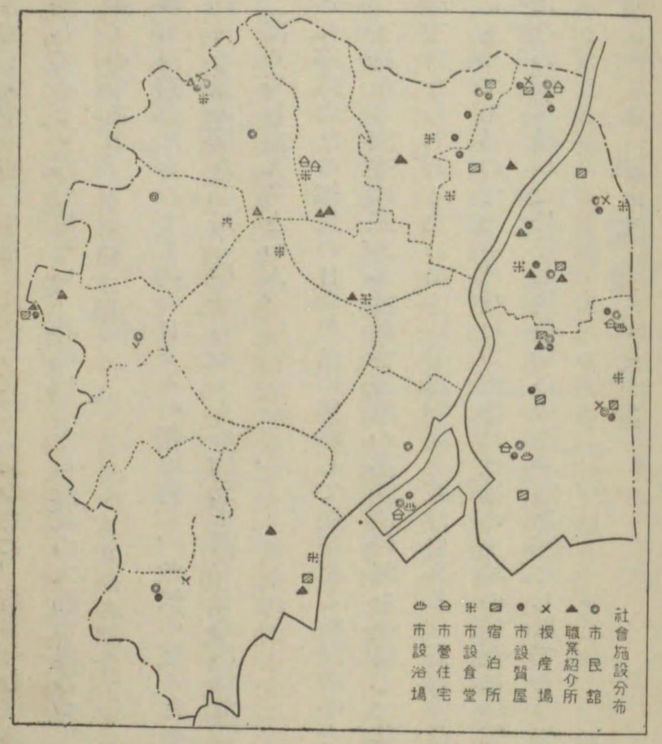
設けて一般の職業、勞働の紹介をなし、附帶事業として人事相談、職業指導、少年性能檢査、宿泊所等をも行つてゐたが、震災によりその大部分が燒失したので、災後は燒失を免れたものと共に普通職業紹介所十、勞働職業紹介所六、合計十六ヶ所の紹介所を設置して專ら紹介事業につくしてゐるのである。

近時經濟組織の生んだ缺陷の一つは、失業者の簇出による社會思相の惡化傾向である。之が對策の一つとしての職業紹介所の事業は一面に於いて產業助長の有力なる機關として重大視せらるゝに至つた。

更に質屋事業について見るに這般の大震災によつて當時市內質屋の大半は多大の損害を被つて、容易に其の事業を回復し能はざる狀態になつたため、唯一の金融機關を失つた小額所得者階級の困難は極めて甚だしいものがあつた。こゝに於て市は之が救濟の應急手段として、淺草外四ヶ所に市營質屋を開設して焦眉の需要に供へたのである。一方昭和二年八月には公益質屋法施行せられ、從來の利子一圓につき二錢であつたのを一錢二厘五毛に低下し、組識も亦改善して大いに內容の充實に努め、一層利用者の福祉を增すに至つたのである。

大正六七年諸物價が高騰した頃、社會事業家加治時次郎氏が、一食十錢の平民食堂を新橋に始めた。これが公衆食堂の始まりで、その後市においても大正九年上野と神樂坂に公衆食堂を建設し、その更に四ヶ所を增設したが震災により神樂坂の外は全部燒失したので、親しく本建築十五ヶ所を建設する計畫を立て漸次竣工して現在は十一ヶ所で營業してゐる。

社會施設分布



この食堂は勤人、學生、勞働者等各種の人によつて利用され經濟的には自給自足を以て經營に當つてゐる。最近有樂町驛前に出來た東京市の書庫兼公衆食堂はその極めてモダーンな外觀が人目をひいてゐる。

さても人生の明るさを思はせる文化生活の陰に、面をそむけねばならぬ生活苦の慘さのあることは決して心よき事ではない。特に絢爛たる近代の大都市にあつてはこの事實のあまりにも甚だしきに驚くのである。

我が東京市にあつても其の日々々の糧に窮し、救濟の望みなき病苦に呻吟せざるを得ない所の、哀れにも氣の毒な細民と稱せらるゝもの約三十萬、その內極貧者と謂はるゝもの約二萬五千世帶、十二萬八千を數ふるといふ。

これ等薄幸なる細民の日幸生活に接觸して親切なる相談相手となり、適切なる保護指導に當る一方、正確なる調査に基き各種社會施設の基礎的材料を提供して其の改良普及を促し、且之が運用を敏活有効ならしめるために方面委員制度を設けてある。方面委員は即ち社會事業統制の機關たる使命をもつてゐるのである。故に方面委員は其の土地の狀況に精進せる民間の篤志家に之を委囑し、常にその關係地域に於ける居住所の生活狀態を審にし以てその使命の全きを期してゐる。

八　電燈と瓦斯

交通機關が駕籠から人力車、人力車から更に自動車に代つた樣に照明裝置のそれも、行燈からランプとなり、今では電燈の世の中となつた。又熱源の方面でも薪炭からコークスとなり、石油となり進んで瓦斯・電氣の利用時代となつて來た。

さて東京に始めて電燈の現はれたのは、明治十一年三月工部大學の講堂で開催された中央電信局開業祝賀の夜會の當夜であつたが之は單純な電池によつたもので、組織的に實用に供給されたのは同二十年十一月東京電燈會社が、本式の發電所から架設電線により日本橋の商家に照したのがそれである。

その後、品川電燈、深川電燈、帝國電燈の諸會社が前後して出來たが何れも東京電燈に合併された。

今日では大東京の電燈は、東京電燈の七十七萬戸の四百三十五萬燈の供給を筆頭に、市電の十四萬戸の百萬燈、王子電軌の八萬戸二十六萬燈、玉川電鐵の三萬五千戸、十九萬燈、京王電鐵の一萬六千戸九萬燈が主なものである。

東京の街路照明は災前には僅かに三千基にも足らないほどで「暗黑の帝都」として文化の進步に添はなかつたが、復興の今日は斷然その數を增して四萬を算するに至り、八十六萬燭光を以て新時代の色彩を漂はしてゐる。

かく電燈の需要は災前に比べると格段の増加を示してゐるが之は一需要家當りの使用燈數の遞加と一燈當りの燭光増大によるもので、殊に上へ上へと伸展する高層建築の増加は電燈の需要を大にし、各百貨店や大商店のネオンサインは都市をして不夜城たらしめてゐる。

次に瓦斯の利用であるが、これは照明に始まつてゐる。即ち東京會議所が明治七年の暮、京橋から銀座にかけて八十五基の瓦斯燈に點火したのがその嚆矢である。

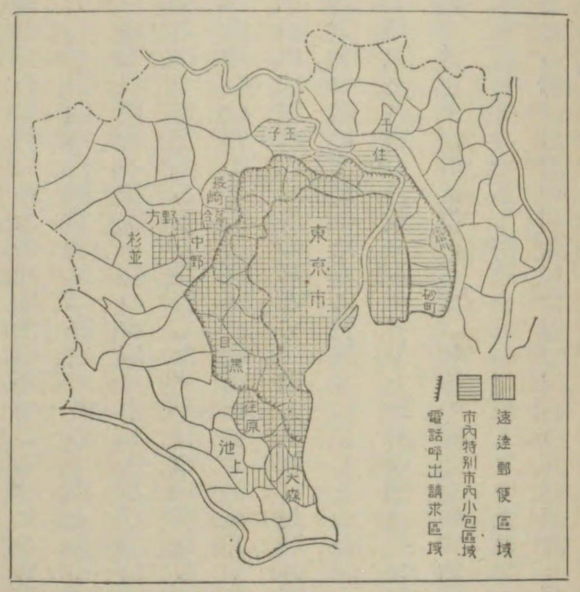
後東京瓦斯會社の經營となりその需要燈數七千餘になつたが電燈の進出により、日露戰爭を境としてその使途を熱用工業用に代へた。而してその需要は益々増加して明治四十三年には千代田瓦斯會社も創立され、玆に兩社の間に猛烈な爭奪戰が行はれたが、一年の後、合併して東京瓦斯會社の獨占に歸した。

今や需要家は市内三十三萬、市外三十六萬を數へ、災前に比して約三倍を突破してゐる。

九　郵便と電話

通信事業の發達普及を透して見た新日本の文明は、それこそ驚くべき長足の進歩で、開國僅かに六十有餘年間の業績は、世界の通信歴史に殆ど比類を見ざる大成績を擧げ、寧ろ奇蹟的とも云ふべき發達を示してゐる。

郵便電話の市内區域



遠來の珍客ペルリ提督から贈られた電信機を、國を呪ふの魔法だのと云つて驚異の眼を睜つた日本が、今や山村水廓到る處として郵便電信の音づれのない處はなく、國を擧げて徹底的に通信の天地が開拓せられて居る。これが僅か半世紀間の仕事で、國家の膨脹發展と相表裏して新興日本の文明を織り成して居る。

「治國の事件」「百政の機軸」これが明治の三年、舊來の飛脚制度から新式の郵便制度に乘り移らんとする際、時の政府が用ゐた通信事業の標語であつた。先づ通信事業の目鼻があかなければ、總ての新政が興りようが無いといふわけで、未だ不平の幕士が所々に立て籠つて天下多事を極めた時代にも拘らず、一日も手を緩め

ずにその開拓に努めたものである。

今大東京の現況を記す前に少しくその起源を語らう。新日本に於ける新式の通信機關として、郵便制度が始めて行はれたのは明治四年である。この官營の新事業に對して、舊幕以來相當に根據を張つてゐた民間の飛脚業者は、存亡の岐るゝ處とあつて、猛然として反對の運動を起し、狼狽七分激昂三分で强硬なる抗議を時の政府に申し込み、從前通り民間に一任するか、然らずんば相當の補償をするのが當然であると主張した。今日の時勢ならばこの民間の當然の要求は容れられたであらうが、當時の政府はこんな運動に頓着せず、ドシ〳〵その目的に進んだ。

最初の内は慣れぬ政府の事とて、動もすれば民間との競爭にヒケを取つたが、暫くやつてゐる中に民間業者は遂に官業のために征服されてしまつた。

かくて祖先傳來の營業をムザ〳〵と政府の手に拐ぎ取られたのであるが、政府では飛脚屋の代表者に郵便捲き上げの代償として、貨物の驛遞を半官的に扱はせることにした。その結果が今日の内國通運會社の前身である陸運會社の組織となつたのである。

さてこの郵便事業の創始に當つて、其の名稱が愈々郵便と決定する迄には可なり議論された。今日でこそ郵便の名は全國民の目にも耳にも爛熟して、三尺の童子と雖も之を知らぬものは無いが、明治の初年で未だ頗る智識の程度の低い時代で、殊に郵便の郵の字が六ケ敷いのでこれには當時大部分反對もあり非難もあつたといふことであるが結局これに落ちついたのである。

その郵便について頗る振つた一つのエピソートがある。始めて郵便箱が市内に立てられた明治四五年の事である。地方から東京見物に來た田舍人が、往來に立つてゐる郵便箱を見て、郵便の意味も無論分つてゐないので、何のための函であるやら一向に見當が附かない。偶々說明して聞かせるものがあると、成程と合點したものであるが、ある田舍人が頻りにこれを不思議さうに見詰めて居たが郵の字の扁は垂れると云ふ字であり、便は大小便の便であるから、屹度市中の共同便所であるに違ひないと合點したまではよかつたが、愈々一番小便と云ふことになると、函の口が少々高過ぎるのと狹すぎるので考へ直したといふ。今から考へると馬鹿げた話であるが、見慣れぬ異樣な函に見慣れぬ異樣な文字が現はれて市中の辻々に立てられて居るのを見た田舍人が小便函と間違へたのは當時としては如何にもありさうな話で、面白い回顧の史料の一つである。

千里の道も一歩より。我が郵便事業の第一歩は、東京大阪京都の三府間と、その沿道の驛村にのみ限られたもので、京阪間を三十九時間で飛脚し、料金は下は百文より上は一貫五百文に至る區間賃銀制で、書狀の上に一々發信受信の氏名住所を記せる小札を貼附せしめ、今日の荷物の託送同樣

に取り扱つたもので、進歩せる今日から見れば、實に滑稽千萬なものであつた。

こゝに六十年の昔を回顧する材料として、太政官布達の全文を掲げよう。

郵便の創業と太政官布達

飛脚便と可成簡便自在に致し候儀、公事は勿論士民私用向に至るまで、世上の交に於て切要の事に候處、書まで商家に相任せ置候より書狀の屆方兎角日限相後れ、其遲滯の甚しきは僅數十里の道法にて十日餘も相掛り、或は終に達せざるの掛念も有之、殊に急便にては賃銀高値にて貧窮の者共遠邇近在互に其情を通じ兼ね、且四方の安否品物の相場等も急速に不相分より、道路不取留風説に惑ひ候もの不少哉に相聞え不便の事に候、依之追々諸街道へ遍く飛脚御仕法被爲立、遠近の人情を通じ四方の模樣も急速相分り、上下一般急便の書通自由に出來爲致候御趣意にて先づ試みの爲め當三月朔日より西京まで三十六時、大阪まで三十九時限の飛脚毎日御差立、兩地は勿論、東海道筋宿の四五里四方の村々並に勢州美濃路等も、右幸便を以て相達候樣の御仕法相成候條、其意を得書狀差出人心得書の通り可致事

辛未正月　太政官

この京阪間三十九時間の飛脚郵便の實施に際し、時の政府が發表した時間表と賃銀表は恐らく新日本に於けるすべての時間表と賃銀表との嚆矢であつたであらう。東よりするものと西よりするものとが、何れも六十有餘の中間驛に脚を停め、正規の時間に發着して、沿道の郵便物を遲滯無く扱はんとしたこと、恰も今日の東海道線列車が、沿線の諸驛に停車して通信事務の機能を完うしてゐるのと同樣である。進歩した今日から見れば、或は兒戯に類するものと云へようが、當時の計畫としては、又最初の試みとしては、その苦心の存する處と、用意の周密なる處が察せられるのである。

新式郵便の實施と同時に、書狀賃錢切手の名稱で、錢四十八文、同百文、同二百文、同五百文の四種類が發行せられ、市内の町年寄其の他身元確實なものを選び、十二ヶ所で賣捌かしめた。翌五年に貨幣制度が定まり、半錢、壹錢、貳錢、五錢、拾錢、貳拾錢、參拾錢の切手が出た。その翌年の十二月に、當時の印刷局員青江秀氏により始めて「はがき」の名稱が考案せられ、同時にその發行を見るに至つた。この郵便葉書はその始祖たる墺太利に遲るゝこと僅に四年で、我が國としては固より破天荒の事業であるだけに、最初發行された時の葉書は隨分珍なもので、市内用と全國用の二種に分たれ、何れも二枚折りで其の半折には、葉書發行の趣旨や發信の心得などを麗々と細かく刷り込まれてあつた。

その全文が左の通りであつた。

一　他見を憚からず又上包を要せざる短文通を低税にて往復の便宜を開くべきため之を各地郵便役所及び取扱所にて可賣下事

一　市内の往復に用ふる分は參錢のはがき印紙、國内を通じて用ふる分は一錢のはがき印紙を可用事

一　郵便役所及び取扱所無之在村へ差出すときは之に一錢の増郵便切手を張付け可申然らざれば信書等の如く屆け先より一倍の増税可拂事

一　此のはがき印紙は三府五港郵便役所にて百枚以上を一度に買ふ者は五分減二百枚以上は一割減にて買ひ得べき事

一　此はがき印紙の表に郵便切手の模様有之部へ先方宿所氏名を限り認むべし且郵便切手の模様へ少しも墨の附かざる様に心を用ふべし聊かにして墨の跡など有之時は繼立不致廢紙と可致事

一　此の面へは決して文字等を不可認事

この入念の二枚折りは、市内の分が半錢、全國の分で一錢で賣り出された。その後段々と改められ、二十二年に一錢に統一せられ、三十二年に一錢五厘に値上げされて今日に至つてゐる。別に十八年に往復葉書が、三十三年に封緘葉書が發行せられ、それと同時に私製葉書を許され、茲に繪葉書の端を發し、葉書利用の上に一新生命が開かれ、年々増加して現今では郵便物總數の八割を占むるの優勢を示してゐる。

さて今日大東京で取扱ふ郵便物は、全國總數の約二割に當りその數實に十一億、而してその八割は市内で取扱つてゐる。一日の平均引受は二百四五十萬、配達に於て百八九十萬に及んでゐる。

その施設の大要を記さんに、

丸の内東京中央郵便局を中心に市の内外には約五百の郵便局が配置され、全國各地との聯絡は毎日上下百數十回の鐵道便で、東京・上野・飯田町・池袋・淺草・兩國の六驛で呑吐され、一日の行囊數合計約二萬個に達する狀況である。

集散局には一等局に江戸橋袂の日本橋局と、西黒門町の下谷局とがあり、二等局は市内外に各十七局、三等局は内外を通じておよそ四百四十局に及んでゐる。

無集配局は一等局に大手町の東京鐵道郵便局があり、二等局には遞信省、司法省、宮内省、學習院、簡易保險局、貯金局の各官衙内の外市内に十四局がある。

從來市内郵便として特別なものに速達郵便と市内特別郵便及び小包郵便がある。速達郵便區域は

市内の外、荏原郡の品川・大崎・目黒・大井・荏原・入新井・大森の七ケ町と、池上町の一部・豐多摩郡の澁谷・千駄谷・淀橋・大久保・戸塚・代々幡・中野の七ケ町と杉並町の高圓寺及び野方町の新井及び落合町の一部・北豐島郡の高田・西巢鴨・巢鴨・日暮里の四ケ町と長崎町の一部及び横濱市である。

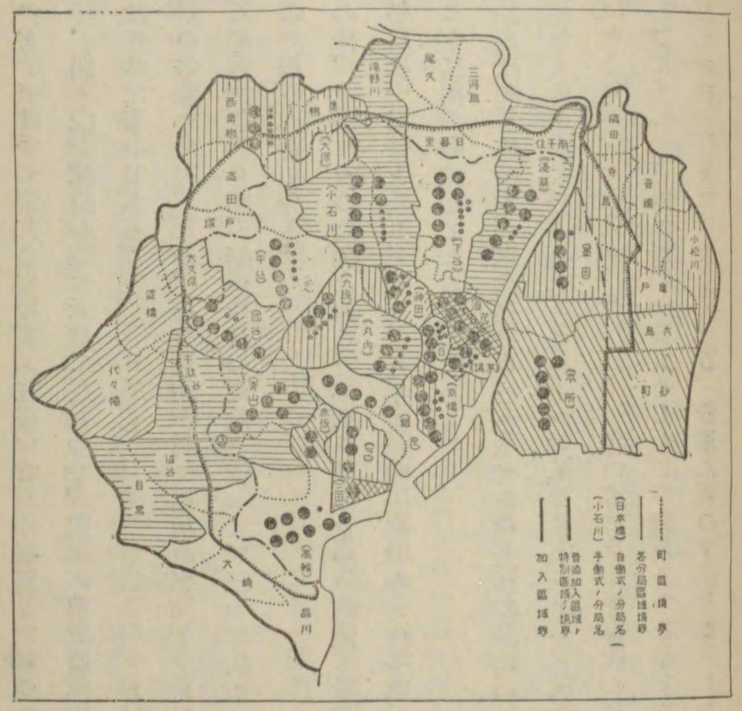
昭和四年から開けた航空郵便は羽田飛行場に東京郵便局の支局が設けられ、毎日午前午後に發着する定期航空便によつて取扱はれてゐる。

電話が始めて我が國に輸入されたのは、明治十年の十一月で、先づ東京横濱間に試み、次で宮內省と工務省の間に裝置した。これが日本に於ける電話及び電話機使用の始まりであつた。その後この便利な文明の利器は、ボツ〳〵と官廳間には應用せられたが、民間では魔物のやうに思つて一向歡迎されなかつた。

十六七年頃になつて、段々理解されて來たものと見えて民間から電話會社の設立を申請するものが現はるゝに至つたが、政府は官營主義で進むことに決し、技師を海外に派したり、機械の內地製造を試みるなど段々研究を重ね、二十一年の暮に東京熱海間の長距離を架設し、その通話試驗に成功して玆に大に力を得て民間に普及せしむるの段取りとなつて來た。

政府の最初の計畫は、東京に三百、横濱に百の申込を豫定したものであつたが、當時なほ電話に

東京電話交換加入區域略圖



對する民間の知識が幼稚であつたのと、社會狀態が比較的單調であつた爲か、世間は冷淡に之を迎へて希望者は一向にない。そこで政府は百方大に勸誘に努めた結果、ヤツト東京市に二百三十七人、横濱市に四十八人の申込みがあつた丈で遂に豫定數には達しなかつた政府は愈々二十三年十二月十六日を以て東京横濱の兩市でそれ〳〵電話事業を開始した。開通當初の東京電話局の開通電話は僅に百五十五箇で三ケ月來を經た同年度末に辛うじて二百七十七箇になり、

三名の女子交換手が舊式の交換臺（三臺）でその事務を取扱つたものである。

當時、偶々虎疫流行の後を承けて居たので、電話の架設は傳染病の媒介をなす怖れがあるとさへ取汰沙されたものである。

電話の爭奪に血眼となり、その餘弊は現に電話のプレミヤンが二千三千の高値を稱へ、普及の遲々たるに苦情の絶え間の無い今日の現狀と較べて、三十年間の日本の發展、帝都の發達は誠に異常なものであることが分る。

その後、次第にその便利なることが知れ渡ると申込が漸く殺倒し、同二十五年には四倍となり同三十年には十二倍となり、同三十五年には四十倍、今では十萬を算へるやうになり、市外を加へると將に十二萬を突破してゐる盛況である。

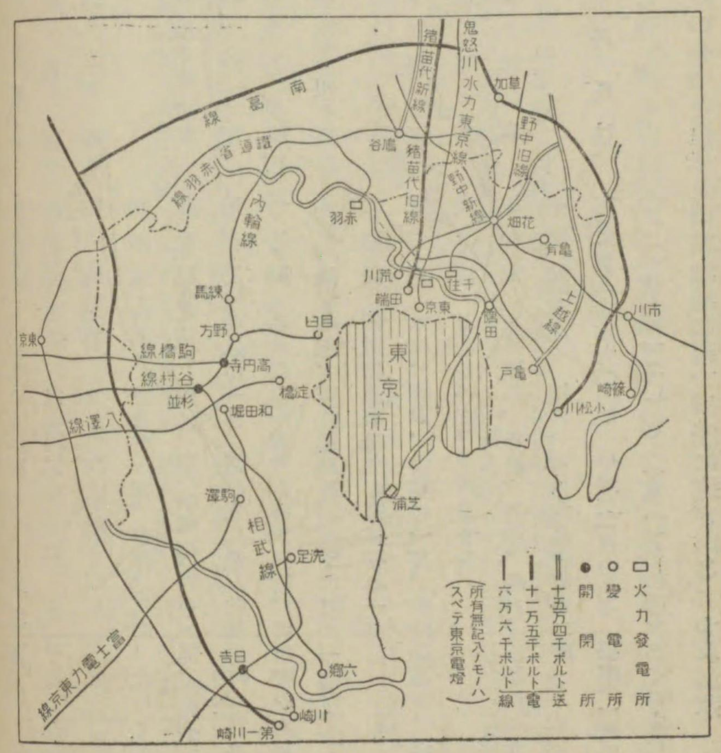
電話局は大手町の中央電話局を中心として市内及び接續町の一部を含めて二十一の分局に分れて十萬の加入者を之に分屬せしめてゐる。即ち左表の如くである。

麹町區　丸内局（東部）九段局（北部）銀座局（南部）京橋・芝二區の一部
神田區　九段局（西部）神田局（中部）浪花局（東部）日本橋の北部と合して
　　下谷局（北部）下谷に合す

日本橋區　浪花局　日本橋局　茅場局
京橋區　京橋局　浪花局
芝區　芝局（北部）三田局（中部）
　　高輪局（南部）麻布の一部、市外、品川、大崎と大井、目黒、澁谷三町の各一部
赤坂—麻布區　赤坂局（東部）青山局（西部）四谷の一部、市外千駄谷、澁谷、目黒の大部、代々幡の一部
四谷區　四谷局　牛込の一部、市外大久保、淀橋二町、代々幡の大部、千駄谷の一部
牛込區　牛込局　小石川の一部、市外戸塚町、高田町の大部
小石川區　本郷、市外瀧野川、王子二町の一部
　　大塚局　西巢鴨及巢鴨町と高田町の一部
下谷區　下谷局　本郷、神田、淺草の一部、市外日暮里、三河島、尾久三ヶ町と瀧野川の一部
淺草區　淺草局　下谷の一部、市外南千住
本所區　墨田局　市外隅田、寺島、吾嬬、龜戸、小松川の五町
　　本所局（南部）深川、市外大島砂町の二町
市外には　大森（加入者三九〇〇）中野（二四〇〇）荏原（一八〇〇）世田ヶ谷・王子・荻窪（各一三〇〇）蒲田（一二〇〇）千住（一〇〇〇）がその主なるものである

上記の分布を見ると商業地域に密で周邊に遠ざかるにつれ稀薄となつてゐる。これによつて經濟

大東京送電系統圖

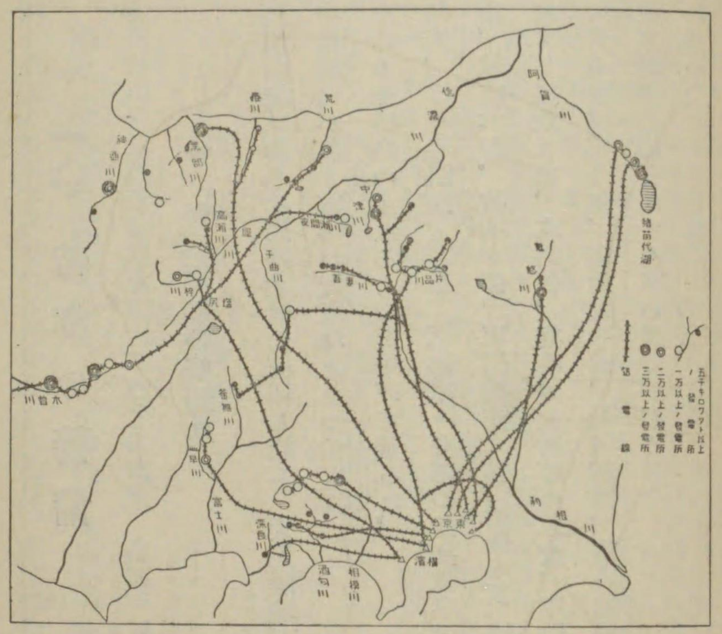


活動の繁簡を如實に知ることが出來る。

一〇　電力の需給

新時代の電力工業の飛躍、商業の繁榮に伴ふ電燈電話の激增、電車軌道網の完成、高速度電車の進出、家庭の電化等々による電力の需用は年と共に增加し、現在約五十萬キロワットに達し、災前に比して二倍に及んでゐる。その電力の八割は水力電氣で、東京電燈會社を筆頭に多數の會社

京濱に至る水力電氣送電線略圖



によつて供給されてゐる。

その生産地は、福島、栃木、群馬、新潟、富山、長野、山梨、靜岡、神奈川の各縣に跨り、猪苗代湖、鬼怒川、利根川信濃川、關川、黒部川、木曾川、相模川富士川、酒匂川等はその主な水源であつて、之に火力を加へるとその生産電力量は約百二十萬キロワットに及び、更に計畫中のものの發電力は約百三十萬キロワットに上つてゐる。

これ等は大東京ばかりでなく、關東地方全體に分配されるものであるが近年は供給は需要を凌いで各電力會社はその賣り込みに腐心してゐる狀態である。

一〇 帝都の警備

一 帝國軍事の策源地

千代田の城は即ち兵馬の大權を統率し結ふ　大元帥陛下の在す所であるから、東京には我が國軍備の中樞機關があり軍事の策源地となつてゐる。

今その中樞機關の主なるものを擧げて見ると、

元帥府、軍事參議院、參謀本部、海軍々令部の最高軍事機關、陸軍省及び之に屬する教育總監部、兵器本廠、航空本部、技術本部、軍馬補充本部、築城本部、被服本廠、糧秣本廠、造兵廠、海軍省及び之に屬する艦政本部、水路部、技術研究所等の軍政、軍務、軍器に關する諸機關があり、軍團には陸軍に東京警備司令部、憲兵司令部、近衛師團、第一師團があり、帝都の軍門とも云ふべき横須賀には東京灣要塞司令部と海軍の鎭守府がある。

これ等の主なるものについてその概要を述べんに、元帥府は陸海軍の元帥、軍事參議院は陸海軍の大將を以て組織し、大元帥陛下に直隷する軍事の首腦部で、何れも宮城内にある。

參謀本部は、麴町永田町、海軍々令部は海軍省構内にあつて共に軍機軍略上の首腦部である。前者に隣る陸軍省、後者に接する海軍省は云ふまでもなく軍政上の中樞であつて何れも宮城に近い櫻田門外の一角にあつまつてゐる。

其の他陸軍の教育總監部と築城本部及び近衛師團司令部は代官町、兵器本廠、航空部及び警備司令部は隼町、憲兵司令部は大手町、軍馬補充部及び第一師團司令部は赤坂青山南町、糧秣本廠は深川越中島、技術本部と科學研究所は市外大久保町、被服本廠は岩淵町、造兵廠は小石川、火工廠は王子町にあり、海軍の艦政本部、航空部は海軍省構内に、水路部は築地に、技術研究所は目黒町にある。

二 兵營の分布

次に兵營の分布狀況を見るに、市内では麴町、赤坂、麻布、牛込の各區に、市外では目黒、世田ケ谷、駒澤、中野、岩淵の各町と、やゝ離れて立川と千葉縣各地及び横須賀とにある。

麴町には宮城の北方代官町に近衛歩兵一聯隊、同二聯隊があり、赤坂には一本町に近衛歩兵三聯

隊、青山北町に同四聯隊、檜町に歩兵第一聯隊があり、麻布には新龍土町に同第三聯隊があり、牛込には戸山町に近衛騎兵聯隊がある。

目黒町には近衛輜重兵大隊、輜重兵第一大隊と騎兵第一聯隊、世田ヶ谷には自動車隊、駒澤町には近衛野砲兵聯隊、野戰重砲兵八聯隊と野砲兵第一聯隊があつて、駒澤・目黒・世田ヶ谷三ヶ町に跨り廣さ六十萬平方米もある大練兵場がある。

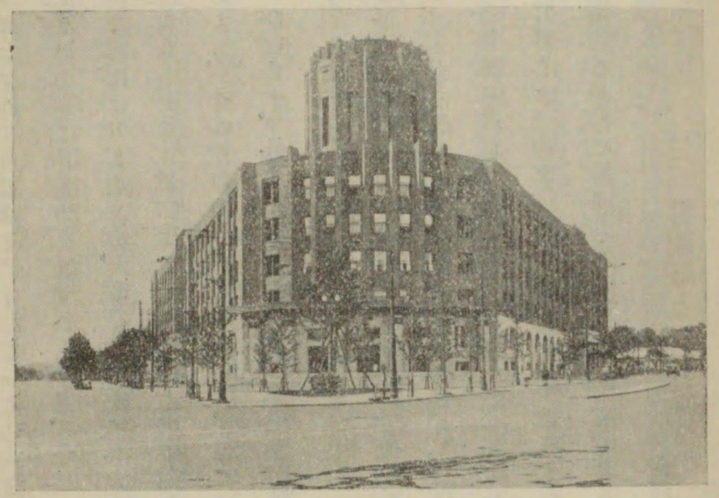
中野町には近衛の電信第一聯隊があり、岩淵町の赤羽には近衛工兵大隊及び工兵第一大隊があり、立川町には近衛の飛行第五聯隊及び氣球隊がある。

千葉縣には國府臺に野戰重砲兵一聯隊、同七聯隊と騎兵大隊があり、習志野に騎兵十三、十四、十五、十六の四聯隊と鐵道第二聯隊、下志津に野戰重砲兵四聯隊、千葉に鐵道第一聯隊、佐倉に歩兵五十七聯隊がある。

横須賀には、陸軍の重砲兵聯隊の外、海軍の常備艦隊、海兵團、防備隊、航空隊がめり、海軍の航空隊はこの外に霞浦（阿見村）と館山にもある。

三　警視廳と治安維持

警視廳



「生馬の眼の球を抜く」と云はれた東京、今では「人の生血を吸ひ取る」といふほど誠に物騒極まるところである。

犯罪件數も年と共に增加して、即ち大正七年から同十二年の六ヶ年の平均犯罪數は五萬件であつたが昭和四年には十二萬七千件に上つてゐる。

かゝる上に立つてその治安を維持するためには、その機關に於ても制度に於ても地方のそれと自ら異つてゐるのである。即ち

東京府の警察行政は他府縣と制度を異にし、府知事の管理を離れて別箇獨立して警視廳といふ大機關を有してゐて、これで大東京の警察に當つてゐるのである。

若し一言にして、大東京に於ける警察行政の總本

山とも云ふべき警視廳を評すれば「この大都會にしてこの大警察あり」とでも云ふ處であらう。

明治七年に警視廳が設立されてから、今日に至る迄の沿革、乃至は都下に於ける警察の制度組織などを記す餘地はないが、現在の警視廳が大東京の照魔鏡として、兎も角も堂々たる陳容を張り、各種犯罪の檢擧又は打盡以外に大都市に必須なる新時代の各種警察行政に手を擴げ、その事務の廣汎にして、その組織の多岐であるかは、現に同廳内の職制が二十有餘の課に分れ、その下に多數の係りが置かれ、外に監察官があり、警察練習所が置かれて居るに見ても略ぼ大體が窺はれるのである。

かく多數の諸係りで、總ての事務が分擔處理せられ、而して府下一圓の管轄内には、市内に四十箇所、郡部に三十箇所の警察署が設けられ、更に幾多の分署や派出所が多數に分設せられ、別に消防班は各方面に布置せられてある外に、遊廓所在地には病院があつて檢黴に當つてゐるなど、幾多の方面に雜多の使命を擔ふて居る警察行政に、生活樣式の複雜を極めた大東京の内面を推察せられる。

大東京の警察行政が複雜多岐で、殊に近來人口の密集世相の嶮惡を增すにつれて、一層その事務の煩瑣を來し、就中最近交通關係の事務が急激に增加したため、今や警視廳の傘下に集められた人員は驚くほど多數に上つてゐる。

災前の十一年末現在では官吏その他の總員は一萬四千四百十一人で、それが夫々職司を執つてゐる。これ等多數の内其の又多數は、云ふまでもなく巡査で、災前の九千八百十一人は、現に一萬有餘を數へ、それでも尙ほ警戒が徹底せず、近頃は銀座の眞中に追剝ぎが出沒する物凄さを示し、直接行動による暴行沙汰は市民の心膽を寒からしめること頻々たるものがある。

四　消防署の活動

警視廳の仕事の中、二六時中最も警戒を嚴重にしてゐるのは消防事業である。

「火事は江戸の花」と云つたのは昔のこと、今や都市生活者の最大脅威は火災である。それであるから大正の大震に際しても、火災さへ起さなかつたら、かゝる大慘害はなかつたといふことは誰しも思ひ當ることである。

乃ち警視廳消防署はこの苦い經驗から精良な消防機具を整へて消防作業の改善を期すると共に、一方民間でも大災に關する警戒を力めてゐる。

今東京の消防史を見るに

明治十三年六月始めて消防分遣所を設け、十四年七月消防分遣署を置き、次いで第一乃至第六分

署と改稱した。

而して消防に常備義勇の二部があり、常備消防は消防機關手百五十人、消防調馬手二十四人があつて常に消防署に出務してゐた。義勇消防は四十組あつて各組には組頭小頭消防手合せて四十一人、總計千六百四十人があつて常に蒸汽喞筒を置いて急に赴くの準備をなしてゐた。

更に遡つて、江戸町火消は、享保年中時の町奉行大岡越前守の創立するところであつて、其の組を一番から十番に分け、別に本所深川の二組を置き、そして一乃至十の組を再別して「いろは」四十八組とした。然し四十八字中へ、ね、ひ、京の四字を避けて之に代ふるに百、千、萬、本の四組を加へてその缺を補つた。

本所深川の二組も亦之を再別して深川組は一組より九組、本所組は十組より十四組とした。

維新後はこの「いろは」組を廢して、何區何組とし所謂義勇消防であつて六分署に隷屬した。

現今大東京の消防組織は、市内は六區域に分れ、そこに十九ケ所の消防署と、二十七ケ所の出張所が配置されてゐる。そしてそれには各々望樓や消防上の各種設備があつて、すは火事といふ時は其の區域内の各消防署及び出張所から一齊に出動することになつてゐる。

その消防職員は常備總員千二百名、豫備員には組頭、小頭以下消防手の總員約二千人である。

市外新市には各町村に夫々消防機關があつて、その義勇消防員は總數約五萬人を數へて居る。

毎年正月六日、帝都の春に魁けて宮城外苑に於いて行はれる出初式には、現代科學の粋を集めて精巧そのものの消防自動車演習や、大江戸の昔を偲ぶ法被姿の義勇消防手數千の木遣行列は今も變らぬ大東京の花といふべきである。

さて市内消防區域を見るに

その一は丸内と神田、日本橋、京橋の三區で

その二は芝、麻布の二區

その三は麹町、赤坂、四谷、牛込の四區

その四は小石川、本郷の二區

その五は下谷、淺草の二區

その六は本所、深川の二區　の六區域に分れてゐる。

之によつて市内の火災は江戸時代の如き延燒五粁乃至十粁の大火を起すこともなく、一出火の燒失數も大正十年の平均二十七棟が昭和の今日は十棟以下となり、燒失概價も三千百萬圓が千萬圓内外に減じたのは全く消防署の活躍によるものと云はねばならぬ。

たゞ火災度數に於ては五百件から六七百件に增加してゐることは、その原因が放火及び漏電が大部分で煙突などによるのであるが、一は世相により、一は文明機關に對する用意の周到を缺くことから來るもので、市民のともに注意すべき必要なことである。

五　交通の整理

大都市に於ける日常の災害は交通事故である。殊に現時の如く自動車の往來が頻繁となるに及んでは更にその數を增すばかりである。

かの紐育市の如きは毎日必ず四五人の自動車轢殺者があると云ふ。大東京に於ける交通事故は、昭和元年には一萬六千件、負傷九千七百、死者百九十七人であつたが、同五年には二萬九千件、負傷一萬七千、死者三百五人に激增し、一日平均一人の犧牲者を出すに至つてゐる。

以上事故の中自動車によるものが六割を占め、自轉車、電車等によるものが三割である。

しかし、紐育に比して未だその數の遙かに少いのは、自動車數の少いことにもよるが、警視廳及び民間有志が協力して交通整理に當つてゐることが大なる原因をなしてゐるのである。

即ち警視廳に於ては交通巡査の職を設けて、主なる道路の岐路に置き、電車路はその信號手と共に「注意進め」の信號によつて諸車及び歩行者の通行を整理してゐる。

殊に道路は車道、人道の別を設け、大道の車道は更に自動車道、自轉車道の別を分ち、歩行者の横斷路を明かにしてある。

そして信號は警笛による自動信號器を以て、耳と目とからその注意と促してゐる。

又小學校兒童の登校及び下校に際しても、交通巡査の保護を受くるもの多く、町内の有志や、青年團員が之に當るものも少くない。更に民間では町會青年團の外に、交通協會があつて當局と協力し時々交通安全デーを施行して市民の注意を喚起し、交通道德の實行を習慣づけることに努めてゐる。

二　舊市内の景觀

一　山手の繁榮

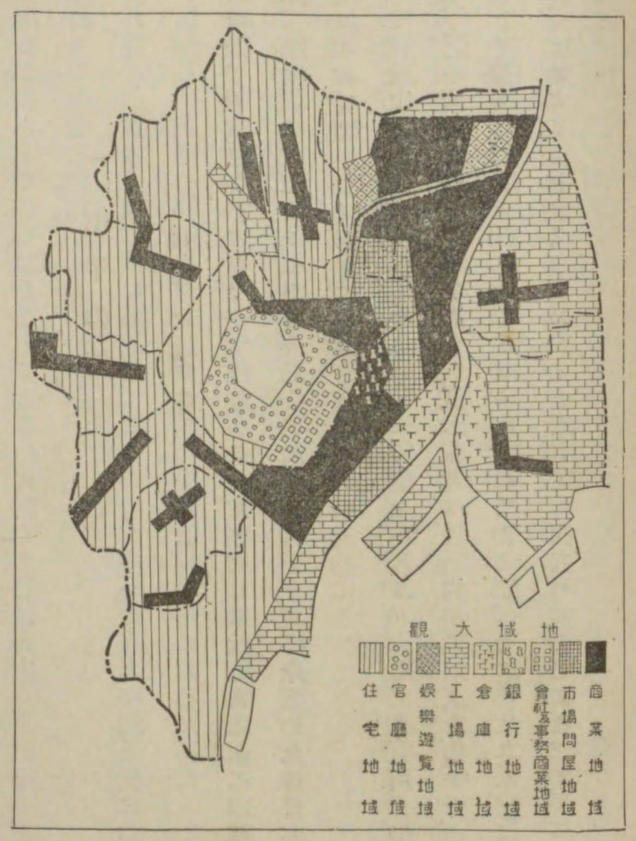
(1)　山手の概觀

山手は武藏野臺地の先端部で、下町とは地形的には勿論であるがこの他種々の點から夫々顯著な特徴を持つてゐる。この山手臺地は割合に急な傾斜を以て南方の低地即ち下町に臨んでゐるが、大體この境は北北東から南々西に走り可なりの直線的に走つてゐる。

從つてこの境に接しては急坂が多く、切通坂、明神坂、壹岐坂、眞砂坂、富坂、安藤坂、服部坂九段坂、三宅坂、魚籃坂、鳥居坂などは最もよく人に知られてゐる。

又山手臺地は多數の川によつて切り刻まれてゐるが、その中大きな川は東京灣に放射狀に流れ込んで、これ等の川に沿うては廣い谷が發達し、臺地はこの谷によつて更に數個の小臺地に分離されてゐる。

地域大觀



例へば北東部には西側を根津の谷によつて切られた上野臺があり根津の谷と小石川の谷の間には本鄕臺、江戸川の西には牛込の臺地があり、この外、汐留川、古川、目黑川等は山の手臺地を更に小さな臺地に分つてゐる。

このやうに山の手は臺地とこれに切り込んで發達した谷から出來てゐるが、臺地面は割合に平坦であつて主として住宅地として利用され、下町の商業地區とは著しい對稱を示してゐる。

一　舊市内の景觀

又山の手は下町に比べて震災や火災の害が少かつた爲に古い建物や社寺が比較的よく保存されてゐる。

臺地面が主として住宅區をなしてゐるのに對して谷は商店乃至工場街と見ることが出來る。電車の線路もこの谷を利用するものが多い。

これ等の谷は多く放射狀に發達してゐるので、中心に向ふ交通系統は非常に惠まれてゐるが、これを横切る所謂同心圓的の交通路はこの山手特有の地形のために甚だしい障碍を受けてゐる。巣鴨線大塚線、新宿線等が谷の中の平坦なところを利用して比較的急速に末端部に達し得るのに對して大塚、厩橋線は大塚の臺地から一旦小石川の谷に下り更に急坂を上つて本郷臺地を超えねばならぬことから前者に比して非常に不便である。

さて普通山手と稱せられてゐる部分は行政上からは、本郷、小石川、牛込、四谷、麹町、赤坂、麻布、芝の八區である。舊全市十五區から考へると約半數以上を山手で占めてゐるわけである。今兩者を實際の面積について見ると山手八區の二・九六方里に對して下町七區の二・一六方里で舊全市の面積に對する百分比は山手の五八に對し下町四二の割合である。

次に人口について見ると、全く逆の關係である。

昭和五年十月に施行された國勢調査の結果によつて見ると、山手の總人口八六八、四二六人に對し、下町は一、二〇二、一〇三人で山手を一とすれば下町は約一、四に相當してゐる、更に全市に對する割合では山手四一、九に對し下町五八、一となる。

大都市の特色として男が女よりも多いことは東京市においても勿論あてはまるが之を山手と下町について比較して見ると山手では女百につき男百十二人、下町では男の割合が山手よりも多く百二十五人に達してゐる。

山の手各區の人口を表示せば次の通りである。

	(千)	(千)(一平方粁)
本郷區	一三六、七四八	二六、九〇〇
小石川區	一五一、四八九	二三、九九〇
牛込區	一二九、一三二	二五、四〇〇
麹町區	五八、七一一	六、五七〇
四谷區	七五、〇二一	二七、〇六〇
赤坂區	六〇、〇七七	一三、四三〇
麻布區	八六、四八八	二三、四〇〇

芝　區	一七五、七六〇	一九、〇二一

即ち人口密度の最も大なるは、面積の最も小なる四谷區で本郷、牛込が之に次いでゐる。麹町區は他區に比し著しく小さいがこれは麹町區の面積中に宮城を含んでゐるからである。

最近は舊市に接續する各町に人口が移動してゐるので、人口密度は却つてこれ等接續町よりも小となつて、新市區よりも靜寂な住宅地區をなす處が諸所にあるのである。

(2) 麹　町　區

麹町區は東京市のほゞ中心に位し其の形大體において圓形をなしてゐる。而して千代田臺と東部の低地とから成り、周圍は濠でかこまれてゐる。

即ち昔の江戸城の内外廓の總てであつて、内廓は申すも畏き九重の雲遙かなる宮城である。

その昔、内海の靜かな波に洗はれた入江多き武藏野の一角に眺望よき青松の丘があつた、今より四百七十年前、當時關東の一豪族上杉定正の臣太田道灌は、深くこの天然の景勝を愛し自ら此處に城を築いたのである。そして彼は三十年の間其處に自然の松籟濤韻を友として兵馬の身を慰めたのである。

憶へば彼の江戸城建築こそ、吾が東京市の胚胎たると共に、實に麹町區の搖籃であつた。

その後江戸城は、德川氏二百六十八年間の居城となり、明治維新と共に畏くも皇城となつたのである。而して明治十一年東京市の十五區制々定さるゝに及び、その外濠を圍繞する區城は麹町となつたのである。

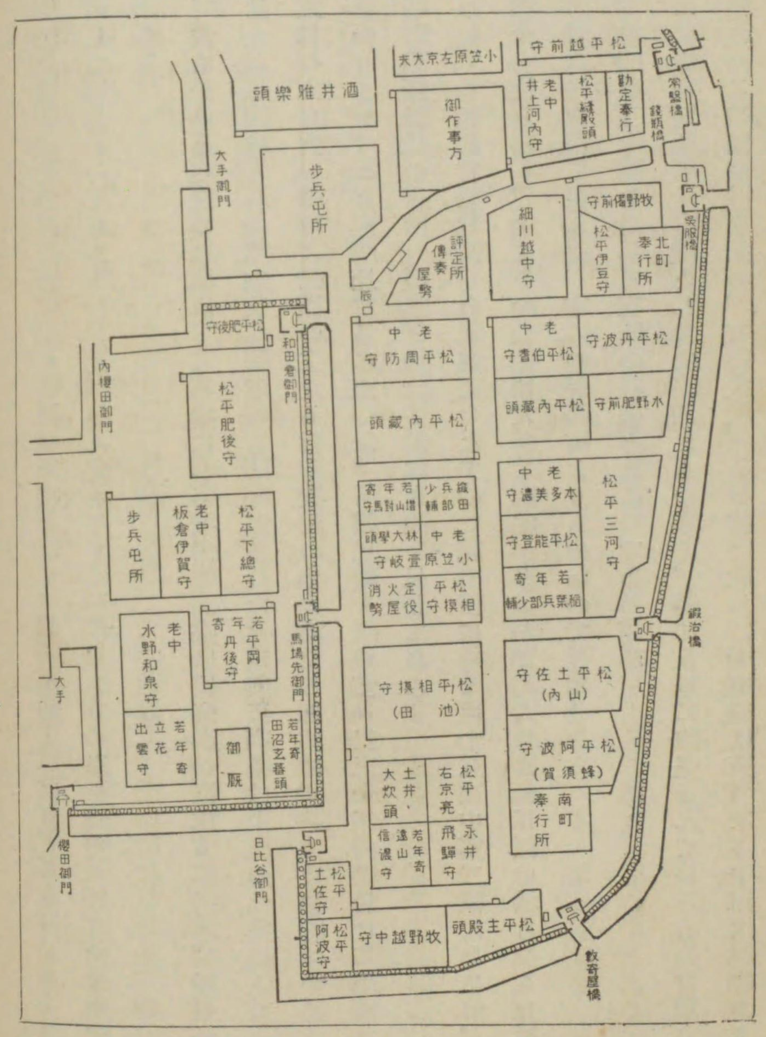
江戸時代に於ける本區の地域は、武家地にして城西の高臺には直屬の臣旗下が居り、城東一帶の平地には主なる諸代大名の邸宅及び閣老の官邸等があつた。維新後高臺は上流の住宅地となつたに反し、東部の丸の内一帶は、帝國の主たる行政機關の集合地たると共に、一方東京驛を中心として大小無數のビルディングが櫛比するに至つた。所謂三菱ケ原の僅々二三十年内に於ける異常な發展は恰も明治維新以來の帝國の躍進を物語るが如き觀を呈してゐる。

かくの如く本區は官廳地區、會社地區をなすので總面積に於ては十五區中第二位にあるが、宅地面積は第十一位となり、而もその住宅は大きな邸宅が多いので、人口は十五區中最も少く五萬九千密度一方粁六千六百に足らず、市外の長崎町よりも少いのである。

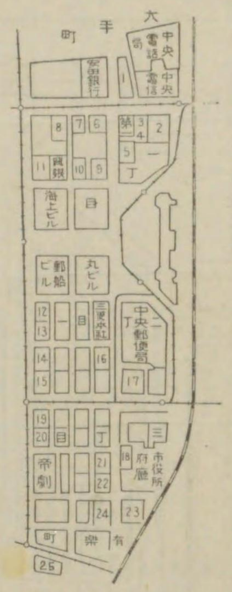
併し、晝間は二十萬を增して夜間の五倍となるのである。

本區には寺社又は名所古蹟として由緒深きもの多く、特に人口に膾炙されてゐるものを擧ぐれば別格官幣社たる靖國神社を始め、官幣大社たる日枝神社及び歴史的に有名なる平河天神等あり、史

大名小路（慶應元年）



丸内略圖



1 朝鮮銀行
2 日本活動寫眞
3 丸内ホテル
4 東京タクシー
5 帝國生命
6 臺灣銀行
7 正金銀行
8 丸内ガラージ
9 日本工業クラブ
10 大川田中事務所
11 銀行集會所
12 昭和ビル
13 時事新報
14 有隣生命
15 明治生命
16 八重洲ビル
17 三菱銀行
18 商工奬勵館
19 商工會議所
20 東京會館
21 有樂館
22 鐵道協會
23 報知新聞
24 日々新聞
25 美松百貨店

蹟名勝としては江戸城を中心にして虎の門跡を始め其の他の城門、辨慶堀等數ふるに遑なく、公園には日比谷、麹町、清水谷の諸公園點在して、本區の特色の一を爲してゐる。

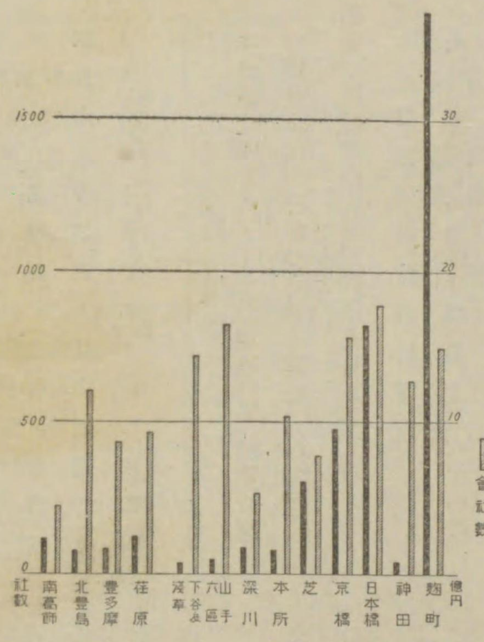
大建築の丸の内

丸の内は北の大手町と南の有樂町に挾まれた部分である。慶長の昔は海水がその面を蔽つて舟の御役所、町人物揚所などがあつたが德川氏の大埋立工事によつて陸地となり、こゝに國持大名や幕府御用部屋出仕の譜代大名の屋敷があつたので大名小路と云つた。

明治となつては官地となり官衙兵營を

置かれたが、後それらも他に移つて、その跡は雜草の原となり、明治二十三年頃、坪三四圓で岩崎氏に拂下げられ俗に三菱ケ原と呼ばれて子供の遊び場所になつてゐた。ところが同三十六年日比谷公園の開園と共に次第に建築物が出來大正三年東京驛の開業となり愈々回春的發展を成し、今では大建築物縱横に櫛比して所謂屋上高原をなし、玆に内外各地の銀行會社相集り、ビジネスセンターとして日本を代表する地區となつてゐる。

而してその高屋大建築物中その主なるものは東京驛前の廣場及び行幸道路を中心にして約七十棟もある。



中でも丸ビルは敷地九十四アール、八階建で、室數八百三十一、その家屋税は赤坂全區に等しいといふ。

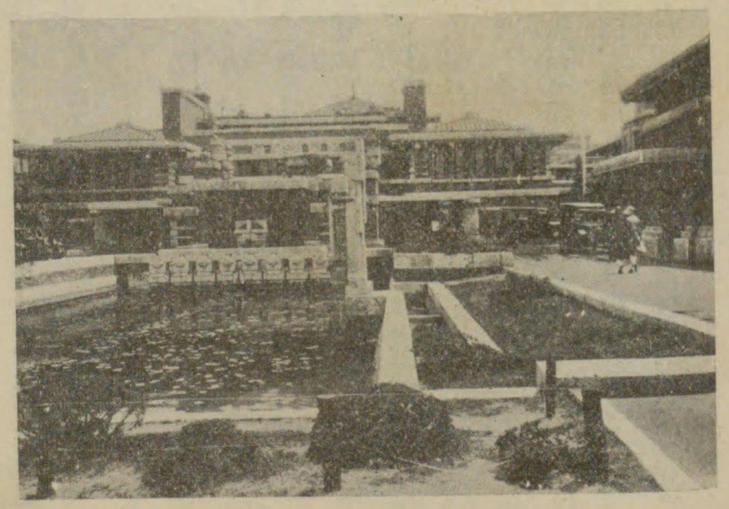
一階はアーケード二階は店舗街、三階以上が貸事務所でその數三百六十一あり、その中會社の百三十一、店舗の七十六、法律事務所の三十三が多いものである。

全館内の通勤者約五千百人、實に東洋一の建物である。

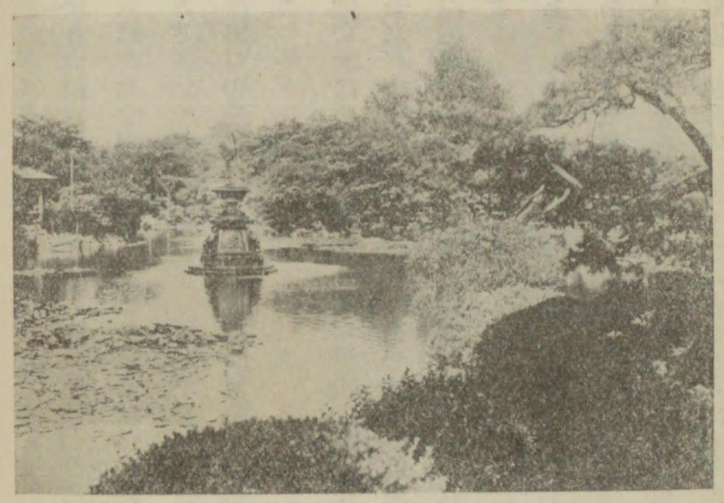
郵船ビルは敷地四十八アール、地階付七階建で高さ三十米、貸室は五十三あつて王子製紙、近海郵船川崎汽船等の會社や商店で、館内人口二千五百人である。

海上ビルは帝都貸ビルの草分けで、大正六年の竣成である。貸室には十五、三菱、第一、山口、小池鴻池、ナショナルの各銀行、東洋海上、明治火災、東洋火災、福壽火災の各保險會社、大同、關東、三

帝國ホテル



日比谷公園



河、矢作、昭和などの各電力會社等、銀行保險電力の營業者が多く全體の人口二千三百人を有してゐる。

日比谷公園

昔はこの邊りを日比谷ケ原といつたもので、維新後は久しく近衛の練兵場であつた。

明治天皇は觀兵式をこゝで行はせ給ふたが明治廿六年新時代の要求に應じて公園の設備工事を起し、三十六年六月一日開園されて市民の遊覽の園となつた。

廣さ十六萬五千平方米（約五萬五千坪）日比谷門、有樂門、櫻田門等六ケ所の出入口があり、園内すべては西洋式の設計で、大小の池や、音樂堂花壇、グラウンド等四季いづれにも良き散策地で

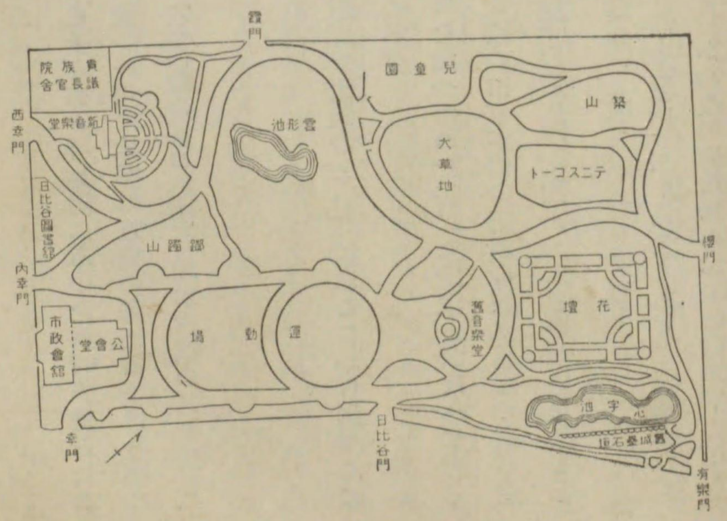
ある。

殊に春は梅あり櫻あり、更に藤あり、つゝじあり、秋は全運動場に菊花壇を設け帝都隨一の觀菊場となる。

毎年五月の交には赤十字社及び愛國婦人會の總會があつて全國の參會者をこの一場にあつめ、又市の催し物の數々や、貴顯大官の葬儀も多くはこゝで行はれるのである。尚毎土曜日には陸海軍の軍樂隊の演奏があり、新音樂堂、市公會堂には演藝映畫講演各種の集會があつて絶えず大衆を呑吐してゐる。

日比谷公園は樹木泉石の外にも趣味津々たるものがある。即ち公園は櫻田御殿（六代將軍家宣が住みし邸）鍋島毛利の本邸の在つた所であるから

日比谷公園略圖



徳川時代の館舍の史蹟としては無限の感にうたれる處である。

園中には虎の門附近の城壁にあつた老松が保存されてあり、市ヶ谷見附にあつた烏帽子岩と云ふ大石があり、姫の井といふ不思議な井戸や、山下門の石壁の一角は椎欅の巨樹の聳える下に吟亭の壊壁に對するあり、丹鶴の浮萍に跡を印するあり、誠や二百萬餘の人口熱鬧の地に古城の月を愛し、苔逕の虫吟を賞せしむるはこの公園の賜である。

九段の附近

宮城の北方には富士見臺がある。即ち靖國神社のある附近で天氣のよい日にはここから眞向ふに富士山の姿が眺められるのでこの邊を富士見町と呼んでゐる。

富士見臺の東端は急崖をなすため、階段狀に九つの段坂を造つたので俗に九段坂と云はれてゐる然しその段坂は除かれて急坂となつて居り、江戸時代山王祭の山車が田安門から練り込んで來る途中、山車の牛が足を辷らして濠の中へ落ち込んだため九段下の濠に牛ヶ淵と云ふ名のついた話もあるほどであつた。

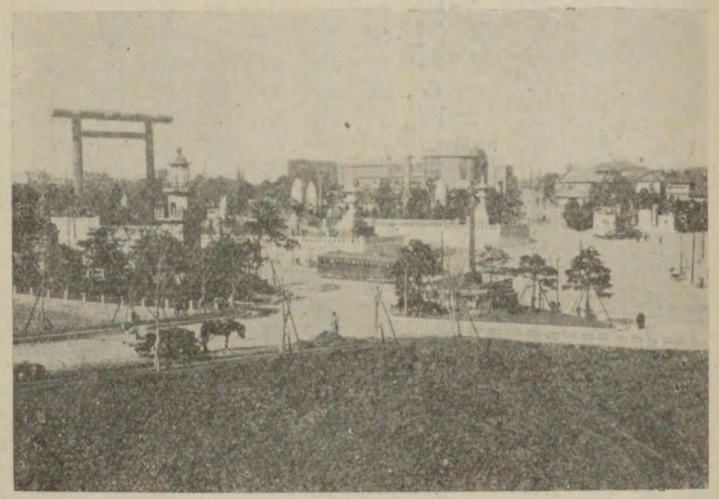
關東大震災の後に土工を行つて勾配を餘程小さくした。坂上は高さ二十五米もあり、眺望極めてよく、神田、本郷、下谷、淺草、日本橋が一望の中にあり、かの復興御巡幸の御途次、陛下にはこゝに於て復興の姿を御展望あらせられたのである。

坂上には別格官幣社靖國神社があり、濠をへだてゝ田安臺に近衛歩兵の兵營がある。その間を通ずる道路が大正通りで、坂下のあたりは靖國通とも呼ばれ門前町をなし、兵隊町の觀がある。

靖國神社はもと招魂社と云ひ、嘉永以來國事に殉じた忠勇義烈の士の靈を合祀し、今では祭神十二萬四千餘柱あり、毎年四月と十月の大祭日には勅使の參向がある。尚陸海軍人の參拜、市民の參拜者幾十萬なるを知らず。廣さ十一萬平方米の境内、殆ど立錐の餘地なきほどである。

社前の青銅の大鳥居は大阪工廠の鑄造で、高さ二十一米、柱の經は二米、笠木の長さ三十米、實に日本一の大鳥居である。

靖國神社の大鳥居



大廣場の中央にある大村益次郎の銅像は我が國に於ける銅像の始祖で、明治二十一年の建立である。

社の横には古今の武器や戰利品を陳列してある遊就館があり、社の後は小公園をなし、境内は又東京市内で櫻の名所である。

番町から霞ケ關附近

富士見町の南は番町で、東の方の内濠に面した部分の田安臺、この附近は東京中で最も高級の邸宅地で名士の邸や、外國の大使館、公使館などが立ち並んでゐる、五番町の停留場から半藏門附近までの濠に面した部分を千鳥ケ淵といふ。これに面して英國大使館がある。

半藏門から南の方三宅坂、櫻田門に到る地方は宮城の綠色の松と水面を飛び交ふ水鳥とが相反映して、非常に良い景色である。

更にこの南方は永田臺といはれ大臣官舍、公使館、陸軍省等が密集してゐる。新たに出來る國會議事堂もこの臺地の上に作られる。更にこの臺地の下には外務省、海軍省、司法省などが櫛比してゐる。

これ等の各省のある通りを北に進むと、櫻田門の變で有名な櫻田門に至る。當時伊井大老の邸は今の參謀本部の近くにあつたので、こゝから櫻田門を經て登城する途中で襲擊されたのである。又外務省の門の近くは、時の大隈外相が爆彈を投げつけられて片足を失つた處である。この邊を霞ケ關といふのは、鎌倉時代に鎌倉街道に沿うてこゝに霞ケ關が設けられてゐたからで、今日ではその跡に外務省があるために一轉して外務省の代名詞になつてしまつた。

(3) 芝　區

舊東京市十五區中面積の最も大なるものは芝區(約十平方粁)である。その形は南西から北東に長い長方形をなし、西部は臺地、東部は低地及び海岸の埋立地である、この濱を芝浦と呼んでゐる。南部は高輪の臺地が海に迫つて狹路をなし、昔は自然の要害であつたので太田道灌は之に館を置いた。今も御殿山の稱があるのがそれである。

上古は芝を竹柴の鄕といつたが後に略して單に柴と呼ぶやうになり、又「柴」は「芝」となつたのである。

本區は江戸時代は東海道の表門で、當時交通の最も頻繁な所であつた。江戸つ兒の中の芝つ兒は北の神田つ兒と相對して仁俠をほこる町奴の名をもつてゐた。

芝山内と高輪泉岳寺とはその頃からの名所であるが、今では愛宕山放送局と芝浦工業地帶を加へ

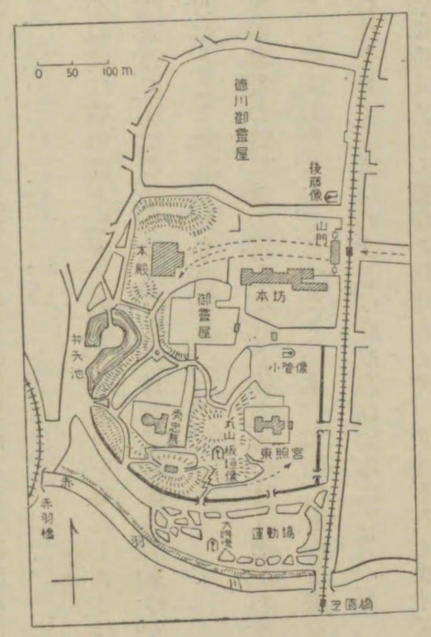
て新時代の文化の魁の地となつてゐる。

芝公園と增上寺

芝公園は上野公園につぐ大公園で廣さ四十六萬平方米、西方には南から北に亘つて丘陵連り、木立茂り、中に太古の遺蹟、古墳や貝塚があつて舊市内では最も古く而して自然の樣をなしてゐるところである。その南端の丘を丸山といひ、そこに近世我が國地理學の始祖伊能忠敬先生の測地遺功表があつて、遙かに品川の海を見下してゐる。

東は一帶の平地で、こゝに櫻の並木や松林がある。

芝公園の一部



又丸山の下には梅樹多く西方の丘上には楓が多い。この楓は二代將軍秀忠の時城内紅葉山から移したものであるといふ。

昔は所謂芝山内で上野寛永寺と共に兩山と稱せられた增上寺を中央にして六十餘の別院や幾つかの學寮があり且つ將軍の靈廟のある大規模の寺域であつた。

增上寺は三緣山廣度院增上寺と稱せられ、關東淨土宗の總本山で東海道に對する要地に當り、江戸の防備として徳川氏はこゝをその菩堤所として廟所を置くに至り、その格式は高まり境内は廣まつた。

明治以前は香の煙と松吹く風のみ、塵世を離れし大寺院であつた。

二代秀忠の廟所の如きは誰にも參拜など許されたものでない。高僧の外は三家三卿其の他の大名が鞠躬如として禮拜したものであつた。

將軍の參拜の時に椽の階上に昇り得るものは大僧正の外は三家三卿と僅少の役人のみで、他は砂利の上に跪座したものであつたといふ。如何に嚴肅な感を與へたものであつたらう。今日拜殿其の他の建坪を見ても當時の光景は略ぼ窺ひ知られる。

臺德廟即ち秀忠の靈屋の構造たるや、黄金を吝しまず種々の珠玉を鏤ばめ、朱黑の漆を以て塗り上げたことは殆ど日光廟を凌ぐ計りで、特に寶塔の描金の如きは、其の面積一寸四方數百金に價すると云はれた。

臺德廟の外に文昭院（六代家宣）有章院（七代家繼）惇信院（九代家重）愼德院（十二代家慶）

明德院（十四代家茂）の靈屋及び墳墓あり、又夫人には崇源院（秀忠の室）桂昌院（五代將軍綱吉の生母）靜寛院宮（家茂の室）等の墓がある。

芝公園の太古は石器時代の蠻人の住みし所で、東照宮の社殿の西の梅林邊より貝殼は一面に地上に散布し土器の破片なども發見された。

今は殆ど皆な拾ひ盡されて容易に見ることが出來ないけれども、五重塔のある丸山の斷崖には波濤の寄せた時代もあつたのである。

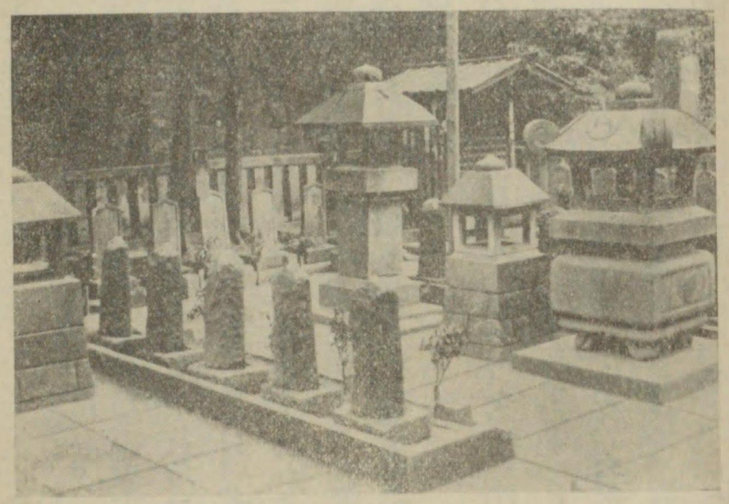
太古よりは遙かに下つた近世のものではあるけれども丸山より臺德廟の構内などには古墳多く、瓢形の大古墳は伊能忠敬の記念碑の邊より五重の塔の傍に及び、其の他に小なる圓塚大小十ケ所もある。

近頃梅林の區域を大にし芝園橋口に達してゐる。初春の交、此の地白雲一帶恰も銀世界の感がある。これは銀世界と稱した淀橋の名園にあつた老梅を移植せしものであつて又將軍（十一代將軍ならん）の御聲がゝりの梅と云ふ名木も保存されてゐる。

三田と高輪

芝公園の南には赤羽川が流れてゐる。その上流は古川で澁谷川に續く。澁谷川は西方下澁谷から

高輪泉岳寺義士の墓



流れて來て、麻布臺と白金臺のを間を流れ、北に折れて三田臺、綱坂、小山の西方を過ぎて更に東に折れ、飯倉三田の間を流れて東京灣に注いでゐる。

この赤羽川の南方一帶を三田といふのである。三田臺の上には慶應義塾大學がある。これは云ふまでもなく先覺者福澤諭吉氏によつて創設されたもので、安政五年に始まつて連綿として現在に到り、實業界には多數の人材を送つてゐる。今では大學部の外、普通部（中學程度）幼稚部（小學程度）及び商工部等もあつて、その規模の大に於てその歷史の古い點に於て私立大學中の雄である。

三田の南方は海水が直に丘陵に迫つてゐるが、この邊りを高輪といつてゐる。三田臺から高輪臺

にかけては寺院や、大邸宅が多く、三田臺には多くの寺が集つて寺町を形成してをり、高輪臺には泉岳寺から東禪寺にかけて群在してゐる。

泉岳寺は街道の西即ち高輪車町にあり、四十七士の墳墓があるので廣く世の中に知られてゐる。四時參拜者後を絶たず香華の絶ゆることがない。

高輪臺町には高松宮邸、日南町には竹田、北白川、朝香の三宮邸をはじめ毛利、岩崎の各邸があり、三田臺には蜂須賀、三井、澁澤の各邸がある。

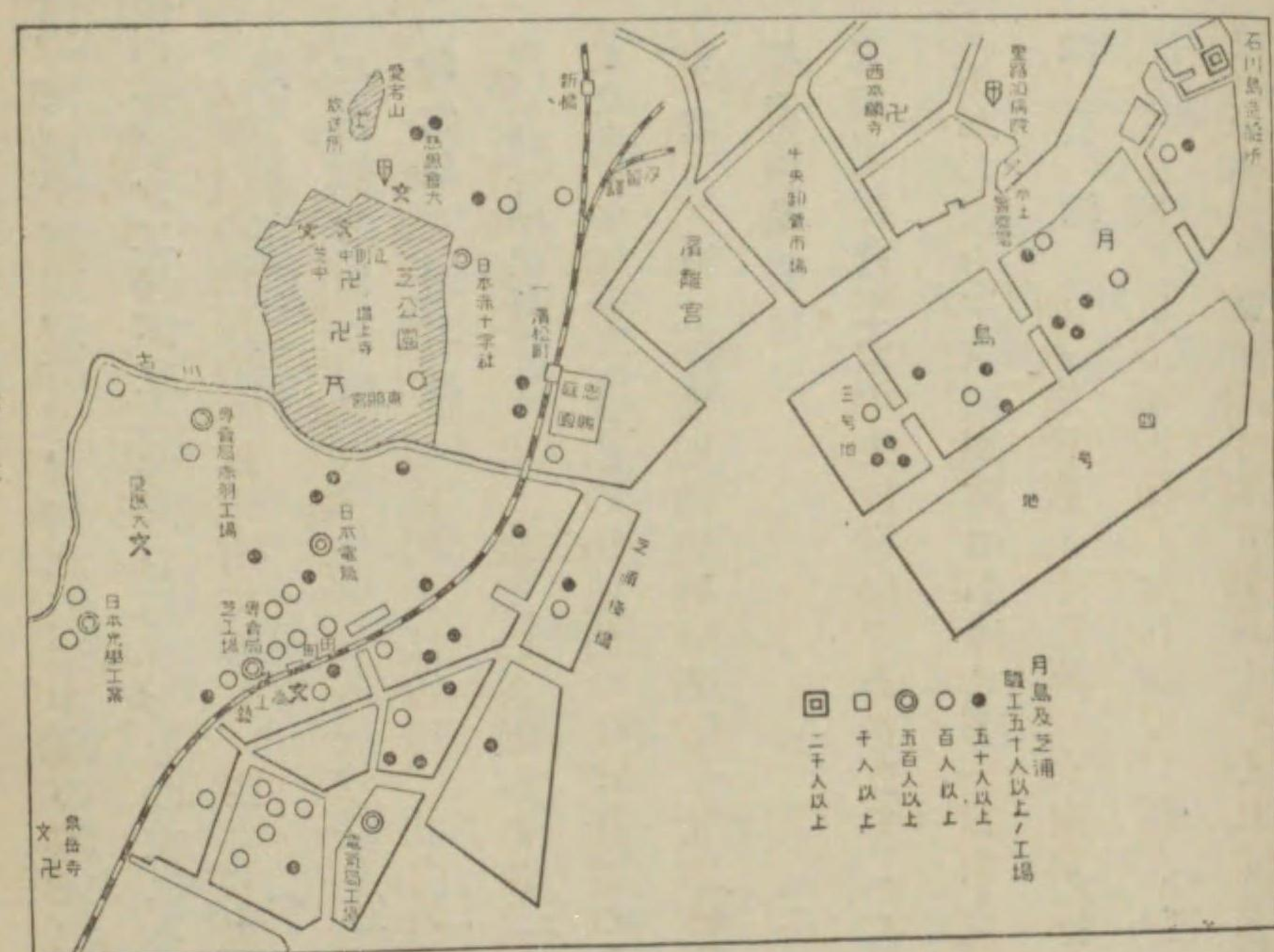
高輪臺の西白金臺は、上古の街道筋で今は賽者の多い清正公、德川氏柱石の臣大久保彥左衛門の墓、海軍墓地、帝國大學所屬傳染病研究所や北里研究所などがある。

愛宕山と放送局

ＪＯＡＫこちらは東京中央放送局であります……のスタヂオは愛宕山にあり、これは日本放送協會の建設にかゝるもので、大正十四年七月一日から開始された。今では東京府を中心とする一府九縣をその所管とし、加入者總數三十五萬、大東京はその六七割を占めてゐる。

愛宕山は芝公園の北方に連續した丘陵で、高さ約二六メートル山上に愛宕神社がある。これは山城國の愛宕を始め、遠州鳴子坂に勸請し、それより駿河の宇津屋に移し、後に又こゝに安置したも

月島及芝浦



のであるといふ。

山上は町と海の見晴しがよく、昔は秋は月見に、冬は雪見、わけて元日の初日の出を見んと集ひ參ずるものが多かつた。

かの明治元年勝安房が西鄕隆盛と薩摩原會見後見渡す甍の街を指して江戸を兵火から救はんことを說いたのもこの山上である。

山下の霞の中に抽き出てゐる田村町の大銀杏のあたりは、もと田村右京大夫の邸で、こゝぞ元祿十四年三月十四日、淺野內匠頭が殿中刄傷のとがめによつて死と賜はつた所、又片岡源五が最期の面會をした所である。

芝浦一帶の工業地帶

芝浦町を中心に北は日出竹芝町、南は月見

一　舊市内の景觀

新芝町、西は新濱南濱町と、何れ海濱征服の埋立地で更に東へ〳〵と増して行く。その新陸地には新時代のモダン工場が立ち並んでゐる。その主なるものには

後藤自動車製造會社	(職工一八九人)
三菱航空機會社	(一九一)
沖電氣芝浦工場	(一五八)
東京鐵骨橋梁製作所	(二三五)
東京地方專賣局芝浦工場	(三三九)
市電氣局工場	(七〇六)
横濱橋梁製作所	(二二五)
東京瓦斯會社工場	(一三二)

又埋立地から西方三田四國町にかけては

池貝鐵工所	(三二九)
日本タイプライター	(一二〇)
日本電氣會社	(八九三)
東京機械製作所	(一〇四)
沖電氣會社	(二九一)
明治電氣會社	(一三六)
今村製菓會社	(一一一)
森永製菓會社	(二〇八)
地方專賣局芝工場	(八五一)

などがあつて、大工場は全市の三割餘がこの一帶にあるのである。

尙本區は芝浦一帶の外、古川の谷の白金三光町方面にも多數の工場があり、芝全區の工場は職工五人以上のもの約六百を算し、その職工數一萬六千、工產額は一億一千萬圓に上り全市の二割以上を占めて十五區中の第一位にある。

かく工場の發展により本區の人口は晝間は他より十萬人も流れ込んで來るのである。

(4)　麻布區

麻布區は概して古への麻布村、飯倉村、今井村及び澁谷村の一部を含むもので、その地勢はおほむね高燥なる臺地をなすを以て、今日に於ても殆ど上中流階級の住宅地として存してゐる。

されば本區の持つ地方色には、自ら一種の高級住宅地に於ける靜けさと高さとが漂つてゐるが、本所深川の如き下町地區に見受け得る如き動きとあはただしさはない。

本區は宅地面積では十五區中第八位にあるのに、人口に於ては第十二位にある。これは即ち邸宅の多いことを示すもので、到る處に大きな屋敷がある。東久邇宮邸を始め鳥居坂町の久邇宮別邸、李王邸、三條邸、川崎邸、本村町の御用邸、渡邊邸、南部邸、鷹司邸、高橋邸、德川邸などはその主なるものである。

又各國大公使館の多いことは麹町區につぎ、ソビエト聯邦の大使館をはじめ、中華民國、チェツコ・スロバキヤ、芬蘭、西班牙、瑞典、波斯、希臘の各公使館、メキシコ、パルパライソの領事館等がある。

其の他一般に住宅地で六本木の附近や飯倉の四辻は商業街をなしてゐる。

本區の地勢は上述の如く丘陵性の臺地で、芝區とは古川が作つた谷によつて境界をなしてゐる。これ等の臺地は麻布臺、三河臺、廣尾臺等數個のものに分れるが、その周邊部には鳥居坂、永坂、芋洗坂、狸穴、我善坊谷、日ケ窪の坂や谷が發達してゐる。而して臺地の最高點は材木町附近の約三七メートルで低地は僅かに新堀川及び赤坂區に接した一部にあるばかりである。

飯倉と廣尾

本區の東部一帶を飯倉と呼び、西部を廣尾と云ふ。飯倉町は昔の飯倉村のあつた處で古くから開け、その五丁目のあたりは江戸時代は赤羽廣小路と云つて北方芝の切通廣小路と共に兩國下谷雷門の各廣小路に加はつて江戸五廣小路と稱へられた殷賑の巷であつたが今はその面影もない。

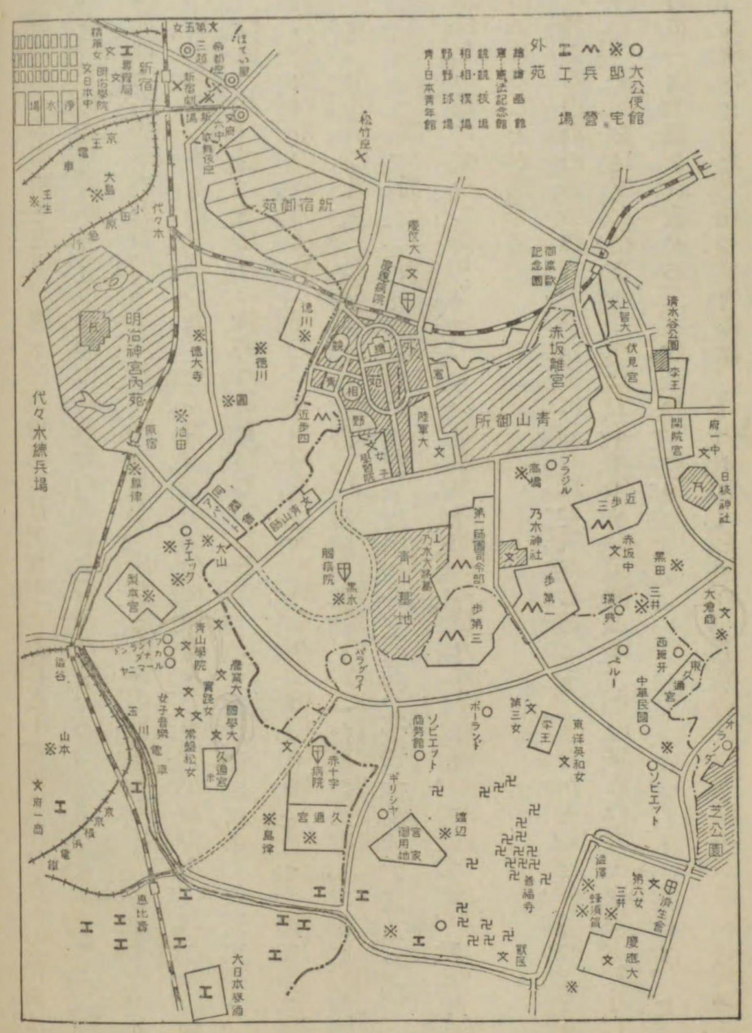
茲に名高い三丁目の天文臺は、もと海軍觀象臺で、之に東京大學理學部にあつた天文臺と、赤坂葵町にあつた内務省地理局の天文臺を合併したもので東京帝國大學の附屬となつたのである。然し觀測上不便の點があるので、その一部は郊外の三鷹村に移轉し、一部はなほ存して編暦、報時、觀測等を行つてゐる。因みにその位置は東經一三九度四四分三〇秒、北緯三五度三九分一七秒である。

廣尾はもと廣尾原と云つた原野でその昔は平尾原又は土筆原とも叫び、春は摘草、秋は鳴虫の名所であつた。

「鶯を尋ね〳〵て麻布まで」の巣立野や「時鳥一二の橋の夜明かな」の古川の橋、源經基朝臣が冠をかけたと云ふ一本松等々、史蹟に乏しくはないが今は世人に忘れられんとしてゐる。

「お江戸見たけりや今見ておきやれ今にお江戸が原になる」とは幕末に流行した俗歌で、この歌は廣尾の原の狸が腹鼓をうちつゝ月に嘯ぶきて唱ひし者なりと云ふ。

山手の一部



廣尾の原は夙くから町となり、嘉永江戸地圖には廣尾町とあれども電車の開けなかつた前は祥雲寺、天現寺、光林寺、善福寺等古川端に武藏野の片影を留めた所であつた。

明治以前は大名旗本の別墅即ち下屋敷と稱へしが、屋敷と云ふのは名のみにて、竹木の境界を設けて雜木山と見るべきものであつた。近くまで一小部分に原野らしき所があつた。江戸名所圖會には、芒、桔梗、葛、櫨、茨などの秋野の景を寫してゐる。

三十七八年後の市の發展は驚く程で、昔の原も、岡も野もみな市街に變じ、蟲、時鳥、雲雀は赤兒の泣き聲、牛乳車の轟き、電車のベルの音、さては自動車の音に代つた。

(5) 赤坂區

赤坂見付を市電に乘つて降りる時、その車窓から前面に横たはる一連の丘陵、赤坂區の大半を一眸の内に眺めることが出來る。

右端に聳える白亞の赤坂離宮と、左手に高く丘の突端を擁して、あたかも端座せる獅子を思はせる如き多くの家々を足下に踏まへて屹立する赤煉瓦の兵營とは、この眺めの大きな對象をなして居ると同時に一面本區を代表せる二大建築物である

この二大建物をつなぐ丘つゞきには、高橋是清氏を初め、上流階級の大邸宅が多く住宅地として

の本區の特色をはつきり表はしてゐる。

この住宅地の中央をポプラの並木に反映して一道白く近代的の鋪裝道路が縱貫して居るのを見るこの道路の眼界の盡くるあたり、本區の外廓を圍つて綠樹に富む青山墓地の靜寂なる地域、そしてそこに眠れる乃木將軍を始めとして幾多先人達の墓所と、春に秋に幾多の若人達が胸躍らせて集り來る、雄大なるスポーツの殿堂としての明治神宮外苑とはこれ亦本區の二大特色である。

その昔、人繼ぎ村から變つたと云ふ一つ木を中心として元赤坂町、傳馬町、田町から成る赤坂と青山常陸介忠成の邸地のあつたと云ふ青山とが本區の主要部分を成してゐる。

溜池邊は昔時こゝに大きな池があつて紀伊國坂邊から御濠であつたと云ふ。そして今日ではこの沼澤の多い村落が繁榮の商區をなして居る事は今昔の感に堪へない。然し今日でも商業地としての本區の發達はこの丘の麓を走る見附より溜池に到る一帶の低地に過ぎない。

青山附近

赤坂の臺地の上は東の麴町から西方へ通ずる青山街道が通つてゐる。

これは古くからあつた交通路で相模の大山を經て、足柄越へ達するものである。從つて又大山街道とも呼ばれる。赤坂見附や傳馬町等の地名が殘つてゐるのは甲州街道に沿ふてゐる四谷等と丁度よく似てゐる。即ちこの邊も昔は非常に淋しい宿場街であつた。

この街道には商店街が發達してゐて、街路の北を青山北町、南を青山南町と云ふ。それより兩側へ入ると貴顯の邸宅や學校兵營が立並んでゐる。

即ち青山北町には陸軍大學校、明治神宮外苑、女子學習院、近衞步兵聯隊、青山師範學校などがあり、青山南町には第一師團司令部、步兵一聯隊、青山墓地、青山腦病院、青山會館、青山學院等があり、その間に陸海軍人や學者の屋敷がかたまつてゐる。

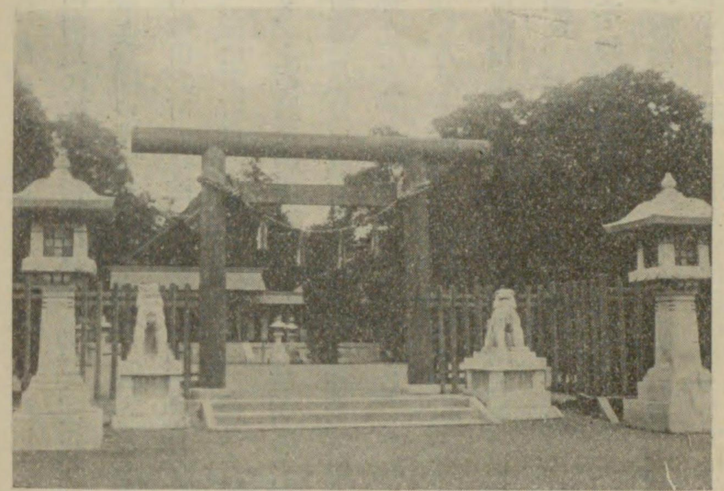
青山墓地は青山南町三丁目から麻布區霞町に亘り、廣さおよそ三十萬平方米、明治以來一代の偉人傑士や佳人才士の塋域となつてゐる。

中でも乃木大將夫妻、大久保利通、川上操六、兒玉源太郎、常陸丸殉難者、廣瀨武夫、黑田清隆九代目市川團十郎、副島種臣、尾崎紅葉、西鄕從道、後藤象次郎、大鳥圭介、佐野常民、大山巖、加藤高明、濱口雄幸等は世界に名高い人々で大久保利通の墓碑は最も目立つて大きい。

乃木神社

第一師團司令部と道を挾んで東に故乃木大將の邸宅の跡がある。今は東京市の管理に屬し、常に公開されてゐる。陸軍大將伯爵の邸としては餘りにも質素で大將自刄の間も當時のまゝに保存され

乃木神社



一一 舊市内の景觀

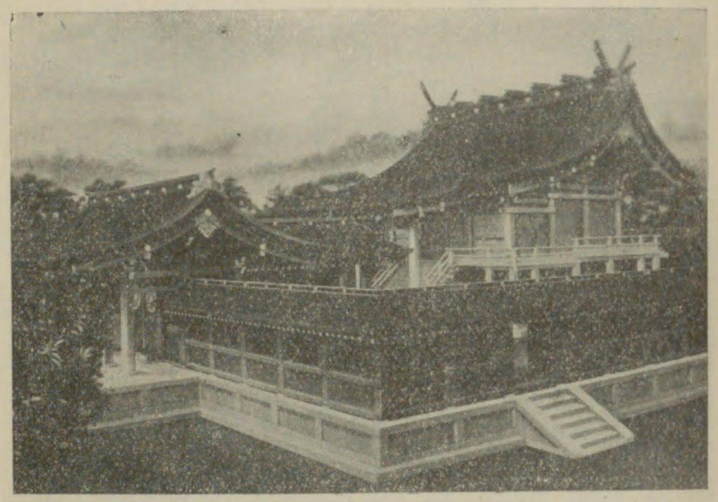
てあり、見るものをして自ら肅然たらしめる。

その墓も亦極めて質素な自然石でこれは青山墓地にあるが、神靈は邸の東に祀つて山祠を建て乃木神社と稱し、參拜の人が絶ゆることなく、故將軍の遺德は千載の後までも殘ることであらう。

明治神宮と外苑

市電明治神宮前停留所から北に千二百米、直線の大通りがある。これが神宮表參道で、省線の陸橋を渡ると、明治神宮大鳥居の前に至る。内苑はその廣さ七十三萬平方米あり、樹木鬱蒼として繁茂してゐる。これは元からあつた黑松赤松の大樹や、榎、欅等の林苑へ全國各地から奉獻された約十萬本の樹木を加へたもので、その總數實に十二萬本、種類は我が國所産の殆ど全部を網羅してゐると云ふ。即ちそ

明治神宮御本殿



一一 山手の繁榮

の御造營は九千萬國民赤誠の結晶とも云ふべきもので祭神明治天皇及び昭憲皇太后は實に日本帝國の守護神である。

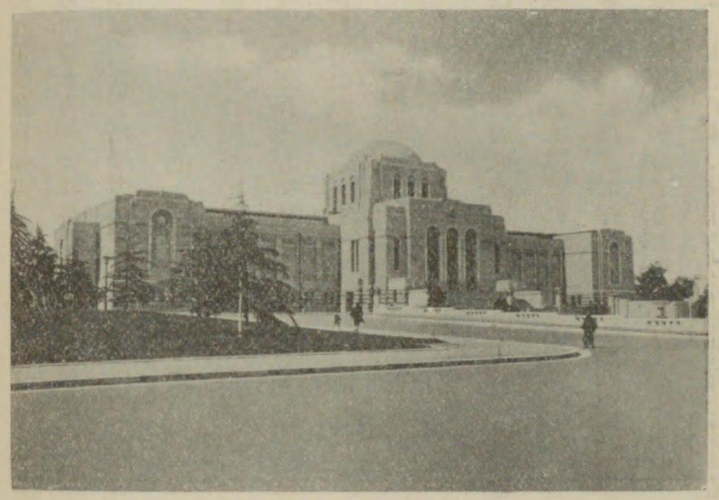
大正四年五月一日内務省告示を以て代々木に社殿を建立、官幣大社に列せらるゝ旨公表せられ、同年十月地鎭祭を行はれ、同九年十一月一日鎭守祭をあげ、毎年十一月三日を以て例祭と奠められたのである。

社殿の樣式は流造で典雅にして莊重、之に詣づるもの大帝の遺德を慕ひ奉りて襟を正さぬものはない

社殿の主要材はすべて木曾産の檜で、その外は阿里山の扁柏を用ゐてあり、石材は岡山縣並木島産花崗岩、屋根の檜皮は紀伊及び丹波の産を用ゐてある。

社殿の後方に寶物殿あり、大帝及び昭憲皇太后の

明治神宮外苑繪畫館



御遺物を陳列してある。

參道には表參道の外に代々木驛から入る北參道小田原急行の神宮裏から入る西參道がある。何れの參道にも各鳥居があるが南北兩參道の會する處にある鳥居が最大のもので、高さ十二米、柱の直徑は一、二米あり、木造鳥居としては蓋し我が國最大のものである。

外苑はもと青山練兵場と云つた所で大部分四谷區の内にある。明治天皇御大葬の際の葬場殿址であり、そこに明治大帝の聖德記念繪畫館がある。

苑内は廣い芝生の中に樹木を植込み、中に鋪裝した車道を通じ自動車の往來織るが如き中にも幽邃の趣を表はしてゐる。

廣場の西方に競技場（廣さ三萬三千平方米觀覽席六萬五千）相撲場（二萬）野球場、プール等大規模の運動設備がある。

傍らに日本青年會館があり、又電車道をへだてた權田原の側に憲法記念館がある。

總面積約五十萬平方米、五百萬市民の絶塵自適の境地である。

(6) 四谷區

本區は、其の西部に甲州街道並に青梅街道の關門を扼し、舊幕時代より武家地として又城西に於ける交通の要路として重要なる位置を占めてゐて、愛染院、全勝寺等の門前町も賑つてゐた。

江戸發祥の物語草として

「武藏野は月の入るべき山もなし
草より出でゝ草にこそ入れ」

と歌はれた當時の武藏野こそ實に今日の四谷をその一端としてゐるので、その月も今日ではデパートの屋根にあると歌はれるに至つては轉た今昔の感に堪へないものがある。

維新後時代の進展に伴ひ、交通機關の發達と相俟つて、大なる發展を遂げ、今日に於ては山手一流の商業地帶を形成するに至つた。加ふるに本區が去る大正九年、豐多摩郡内藤新宿町と併合したことは、本區將來の伸張力の向ふ所を卜するものとして大なる意義があつたので、殊に這般の震災

に聊かの痛手をも受けなかつた本區は、玆に飛躍的發展の機運を得て「山手銀座」のその名の通り今日の繁榮を見るに至つた。

即ち省線新宿驛の大改築に加ふるに、中央線を初め最近開通せる小田原急行及び京王、西武等の郊外電車の起點として、本市西部に於ける交通の中心たるは勿論、四谷大通を主とせる省線新宿驛附近には現代的商鋪が軒を並べて夜間に於ては宛然小銀座の觀を呈するに至つたのである。

更に本區の發展を示す著しき現象は、市内一流銀行の木區内に本支店を經營するものが災後著しく增加して來たことである。これ、近來郊外交通機關の發展に伴ひ、近郊に居住するものが夥しく增加し、是等郊外地及び隣接地域が目覺しき發展を遂げたため、之を對象として市内の金融機關が亦中央から外域へと進出せるに因るのであるが一面本區の經濟的飛躍を物語る一證左に外ならない。

新宿の界隈

甲州街道の青梅街道に分れる處は元の内藤新宿の追分である。

内藤の名は今の新宿御苑を邸宅としてゐた内藤氏から取つたもので、新宿の名は日本橋から高井戸まで四里の間宿場がなく人馬共に不便を感じたので、元祿の頃新に宿場が設けられたのに起つたのである。

明治になつてからは内藤新宿町として一自治體をなしてゐたが四谷區に合併して新宿町と呼ぶやうになつた。

今や、上述の通り中央線の電化、西武、京王兩電車の敷設によつて殷盛を加へ、小田急の新設によつて更に一段の活氣を呈し、加ふるに京王電車の延長、多摩御陵乘入れによつて益々四通八達、千客萬來の巷となつた。

新宿驛は大東京第一の大旅客驛となり、爲にその界隈は市内郊外の隔もなく大久保、淀橋、千駄谷三ケ町の接する處は一團となつて繁華を共にしてゐる。

即ち市内の新宿には布袋屋、新宿松屋の百貨店に帝都座、新歌舞伎座、新宿松竹座あり、淀橋町には新宿三越、新宿ホテルに新宿劇場、武藏野館がある。又近く松坂屋、伊勢丹も進出せんとし、軒並の二幸商店、中村屋、明治製菓等の大商店などは郊外生活者の買物市場で、數多の飲食店やカフエーにいつもながらの滿員の盛況、銀座と淺草を一ケ所に集めたやうな觀がある。

殷賑そのものゝ新宿町と對して、その南隣には靜寂そのものゝ新宿御苑がある。その廣さ新宿町一帶よりも廣く、皇室の御有で毎年恒例の觀櫻觀菊の宴を開かれる處である。

本區は東北に江戸川を距てゝ小石川の目白臺、小日向臺と對し、四谷區に接續して市内隨一の高燥地を占む。「山の手」の名をそのまゝに、區内到る處峻坂の多いこと、道路の變化に富むことを以て聞えてゐる。

從つて商業地としての發達は、神樂坂を中心とする區域及び江戸川通りを除いては見るべきものなく、大部分は純然たる住宅地として、その特徴を發揮してゐる。

明治の初年、大隈侯に依つて早稲田學園の創立さるゝあり、相次いで陸軍の各學校其の他の學術機關の設立さるゝに及び、之より大なる影響をうけ、學園の興隆と相俟つて本區の特色ある繁榮を見るに至つた。

本區は、江戸時代に於ては主として寺社地及び武家地であつた關係上、由緒ある寺社多く、中にも神社として、赤城神社、市ヶ谷八幡神社、築土八幡神社などがあり、寺院としては毘沙門天で有名な神樂坂通の善國寺、光照寺などがある。

又史蹟としては、山鹿素行の墓、太田南畝の遺蹟等が人口に膾炙されてゐる。

神樂坂通り

このあたり昔は芝の愛宕、湯島の天神などと共に月見の場所とされ、今では同じ夜の街ではあるが灯の町とされ、學生大衆の街として繁昌してゐる。

大震火災直後には下町の大商店の分店がこゝに集つて山の手銀座の名を有したが、災害地の復興と新宿の繁榮によつて、災前の昔にかへり、山手銀座の名も新興の新宿に奪はれてしまつた。

神樂坂の名は、坂の中程に高田八幡の社務所があつて祭禮の際は、こゝで神樂を奏したので坂の名となつたと云ふ。八幡の多い牛込には誠にふさはしい緣起をもつてゐる。

早稲田大學

城南三田の慶應義塾と好一對の城北早稲田の同大學は東京はおろか日本としての私學の兩横綱格である。

その正門は牛込區早稲田町に開いて學校門前町として本屋、文房具屋、靴屋、洋品店、洋食店等等の美しい商店街を有してゐる。

故大隈重信侯こそこの大學の生みの親で、早稲田の大隈か、大隈の早稲田かと云はれるほどであつた。實に侯が高遠な理想を標榜して明治の初年創立して以來、多くの俊才を政治界及び文學界に出し、慶應の實業界と相對して明治文化の開拓に寄與した功績は實に偉大なものである。

その組織は政治、經濟、法、文、商、理工の五學部に分れ、別に專門部、高等師範部があり、又

早稲田專門學部、第一第二の高等學院等があり、是等に包容される學生は二萬に近く、四邊一帶を大學區域に同化して一大學文鄉を形成してゐる。大學の前に大隈會館があり、その構内に名高い演劇博物館が建てられてある。

(8) 小石川區

小日向臺、目白臺、本鄉臺の臺地によつて形成され、其の間の江戸川、千川の二川に沿ふ部分が小石川區である。

「我がためを思ひ深めて小石川
いつこを瀨とか戀渡るらん」

小石川の區名を生んだ小石川は、その上流を千川と謂ひ、北豐島郡長崎町より出でゝ本區の氷川下町、久堅町、戸崎町、柳町、初音町、餌差町、富坂、春日町等をへて神田川の上流に注いでゐるのであるが、その河幅の狹少のため年々之が被害の多きに鑑み千川大改修の必要を痛感し既に之が改修に着手してゐる。

區内には陸軍兵器支廠、東京工廠を初め、植物園、東京高等師範學校等の廣大なる地域を擁するものが多く、江戸時代寺社地たりし關係上、現在護國寺、傳通院、光圓寺、白山神社、氷川神社等を初めとして六十有餘の寺社が散在してゐるのは又本區の特色の一つである。

本區將來の發展を期する爲、町内に於ける最も有利なる地にその廣大なる地域を占むる陸軍兵器支廠及び東京工廠が適當なる他の地に移轉されんことは、區民多年の要望であつたが前者は既に移轉されこゝに東京女子高等師範學校、跡見女學校等の新築となり、後者も他日之が實現の機運が到來した曉には大塚を中心とする隣接町村との連絡と相俟つて、本區が飛躍的發展を遂ぐることは明らかである。

市營社會事業の分布の上から見ると、本區は江東方面と相對して、山手方面を代表する諸施設の密集區域である。その第一に擧ぐべきは大塚仲町舊養育院跡に五十萬圓の巨費を投じて新裝成つた大塚市民館があり、之と相對して大塚病院の新設せらるゝあり、其の他大塚兒童相談所、大塚職業紹介所、技術勞働職業紹介所、婦人少年職業紹介所、小石川授產所、大塚質屋、大塚食堂等々各般の社會施設が均霑集設されてゐる。蓋しこれ等の施設經營は、區内を流るゝ江戸川、千川の二川に沿ふ低地に散在する要保護世帶等の保護救濟を主たる對象としたものであつて、本區の社會相の一つの反映と見るべきである。

本區の交通路には到る處に坂があり袋町(行止りの道)も亦多い。坂の名高いものは南の服部坂、

安藤坂、東の富坂、内部の目白坂、鼠坂、切支丹坂、庚申坂等で、切支丹坂上には昔の切支丹牢屋敷の垣がある。

臺地には邸宅や學校が多く所々に大きな寺院があり、低地は商業街や工場地となつてゐる。

小石川の東京工廠は元水戸侯の屋敷のあつた處で、今は市内第一の大工場で職工二千二三百人を使用し、盛に兵器類を製造してゐる。その構内に陸軍工科學校がある。その北方久堅町から西方江戸川町にかけては、印刷工場が多くその生産に於ては市内第一である。

護國寺と傳通院

區の北西部、市電大塚線と谷を隔てゝ豐島岡があり、こゝに神齡山護國寺がある、區の南東部同じ大塚甍橋線に面して無量山傳通院がある。

護國寺は元は高田御藥園の地であつたのを、元祿年中桂昌院殿一位尼公の御志願によつて御藥園と白山即ち今の植物園の處へ移され、その跡へ當寺を建立されたと傳へられてゐる。

境内は頗る廣く、櫻あり楓あり躑躅あり、堂塔又莊嚴で寺中の墓地には三條實美公、中山忠能侯山縣有朋公、大隅重信公などの墓がある。

なほ寺の東には豐島岡御陵墓があつて有栖川宮熾仁親王、同威仁親王、小松宮彰仁親王、北白川宮能久親王をはじめ奉り皇族方の御陵がある。

西には陸軍墓地があつて陸軍將士の遺骸を葬り、後方には寛政三士をはじめ室鳩巣、岡田寒泉、柴野栗山などの墓のある大塚先儒墓所がある。

又この寺は京都の清水寺に模して作られたので、この前にある町を特に音羽と名づけられ、なほ京都には一條から九條まであるので、音羽町も一丁目から九丁目まで作られたのである。

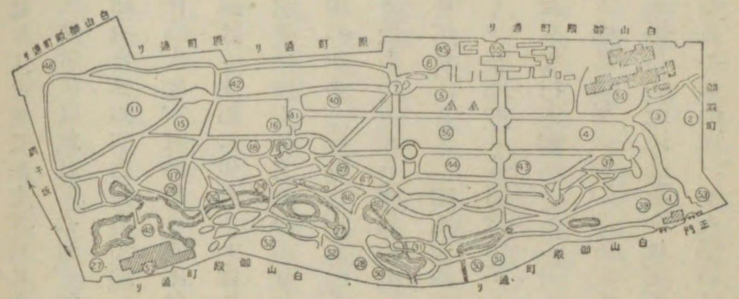
傳通院は應永廿二年の創立で、德川家康の母傳通院の靈屋がある處である。淨土宗十八檀林の一で堂塔の整つた大伽藍であつたが、明治四十一年の大災で壯嚴であつた總門も失せ、門前の樅の大木の並木も枯死して昔の面影がなくなつた。

然し門前にある三國傳來の大黑天を祀つた聚樂殿の緣日（甲子）には參詣人群集して夜店が賑つてゐる。寺に近くその經營にかゝる淑德女學校がある。門前町は安藤坂に開いて昔は陸尺町、白壁町の名をもつて賑つてゐたが今では大門町と稱し一商業街に止まつてゐる。

植　物　園

面積約十六萬平方米、東西洋の植物の種類の豐富なこと我が國第一である。これが白山御殿町にある理科大學附屬の植物園である。

植物園一覽圖



1 染井吉野
2 根脈研究用のみづき
3 そなれの群叢
4 櫻染井吉野
5 メンデル葡萄
6 芍藥
7 精虫發見の資料となつたいてふ
8 つばき類
11 このてがしはの老樹
15 もくれん類
16 ぼけ
17 梅類
18 松類
24 もみぢ類
26 花菖蒲とかきつばた
27 蓮
28 睡蓮
31 柳類
37 あぢさゐ類
39 ユーカリ樹
40 つつじ
41 御手植樹木
42 肉桂樹林
43 藥用植物花壇
44 分類花壇
45 苗圃
46 落葉樹木林
47 常綠樹木林
48 針葉樹木林
49 竹泉式庭園
50 水草栽培地
51 花菖蒲栽培所
52 竹類
53 觀覽券賣場
54 植物學教室
55 溫室
56 甘藷試作地
57 集會場

本園は史蹟の方面から觀察するも實に趣味津々たるものがある。即ち昔は白山御殿と稱し、五代將軍綱吉が未だ將軍職に就かざりし頃の下屋敷であつた。

當時は狐狸のみでなく、時には鹿さへわたり來りしと云ふ、今から考へると夢のやうな話である。

享保六年、芥川小野寺元凱等幕命に由り小石川御藥園を起創す、同七年小石川傳通院前、町醫者小川笙船の建議により施藥院を園内に設置した。今の濟生會事業の元祖とも云ふべき場所で養生所と稱へた而して貧者には飲食、衣服、臥具一切を給與し、名主の證明で施療を許可された。これ東京市養育院の前身と云ふべきである。

享保二十年、甘藷先生青木敦が薩摩より移植した薯は本園でも試作した。又太古の人類が食用とした貝類、土器の破片、石鏃等園中至る所にて得られた。今は全く獲られないが、此の一丘が「コロボツクル」の如き人種の居住した地であると云ふ。

園中の山棗、肉桂、山査子等は德川時代からの記念樹で、特に大銀杏はこの樹によつて精虫發見のことがあつてから學界に於ても貴重されてゐる。幹圍四米、高さ二十三米と云ふ。

低地には地下水の堪えた池沼所々にあり、築山や泉水を配して幽邃な庭園をなし、散策の人が少くなく一年間の入場者二十萬を超えてゐる。

東京文理科大學

本大學は大塚臺地の北方にあり、昭和四年に廣島文理科大學と共に設置されたもので、高等師範學校と同じ場所に併置されてゐる。

このあたりには、本大學の外、拓殖大學など學校が多い。お茶の水の女子高等師範學校も近く兵

器支廠の跡に移轉されるので、附近一帶は一つの學校街をつくることになるであらう。

文理科大學は未だ歴史が淺いが高等師範の方は、古い沿革と六十年の變遷を有してゐる。即ち明治初年には師範學校と稱へられて昌平黌の跡にあつたが、東京師範學校と改稱され、更に明治十九年現在の高等師範學校の名稱を附せられるやうになつた。この間現在に至るまで六千の卒業生を出し全國の中等教育界に活躍してゐる。

(9) 本　郷　區

舊幕時代には主として武家屋敷多く街道に沿ふて町家が立ち並んでゐた。

「本郷もかねやすまでは江戸の内」（かねやすは本郷三丁目にある）

と謂はれてゐた如く、もと〳〵本區は其の中心點駒込追分町から分岐して北部に縱走してゐる中仙道の兩側に發達した江戸の隣接町であつた。

併し、湯島は五代將軍綱吉の設立にかゝる聖堂と昌平黌と稱して幕臣に儒學を講じてゐた幕府直轄の學問所と更に八代將軍吉宗の設立にかゝる我が國最初の洋學の調査研究機關であつた藩書調所とがあつて、共に我が國學問の發祥地として重きをなした。

隨つて學風の生む雰圍氣がこの臺地一帶を掩うてゐたかの感があつた。而して本區の特色を代表した此等の學問所は明治維新と共に政府に移管され、現今の東京帝國大學の前身となり奇しくも引續き我が國最高學府の母體となつたのである。

その後、昌平黌の撤廢となり其の跡へ東京女子高等師範學校が建設されて斯學の權威となり、開成所跡（舊藩書調所）が種々なる變遷を經た上、綜合大學としての東京帝國大學の所在地となつたのである。

爾來此處から新日本建設の野心に燃えた幾多の青年が全日本へ巣立ちしてゐるのである。該大學の存在が本區の發達と如何に密接なる關係を有するかは、今日本區が帝大の名と共に知られ、又それによつて釀された氣分が本區の地方色をなしてゐるのを見ても明かである。

本區を地形的に見れば、東京市のほゞ北部を占めてゐて南北に細長い形をしてゐる。

南の神田區との境は神田川により、東は本郷臺の急斜面によつて限られてゐるが東北の方では根津の谷の一部をも含んでゐる。又西は本郷臺の西斜面が大體小石川區との境を作つてゐる。

かくの如く本區は大部分が本郷臺地によつて作られてゐるが、この臺地は更にずつと南の方まで續きお茶水附近で一旦神田川に切られた後、なほ南方で駿河臺として神田區の北方に凸出した丘陵性の地を作つてゐる。

臺地面は大體平坦で、著しい凹凸は見られないが、側面の東及び西の方には急に低くなつてゐるのでこの部分には自然急坂が生じ、これを横斷する東西の交通線は、南北の交通路と比較して大きな障碍を受けてゐる。

切通坂、壹岐坂、富坂、團子坂、動坂等は皆な臺地の兩端に位してゐる急坂である。

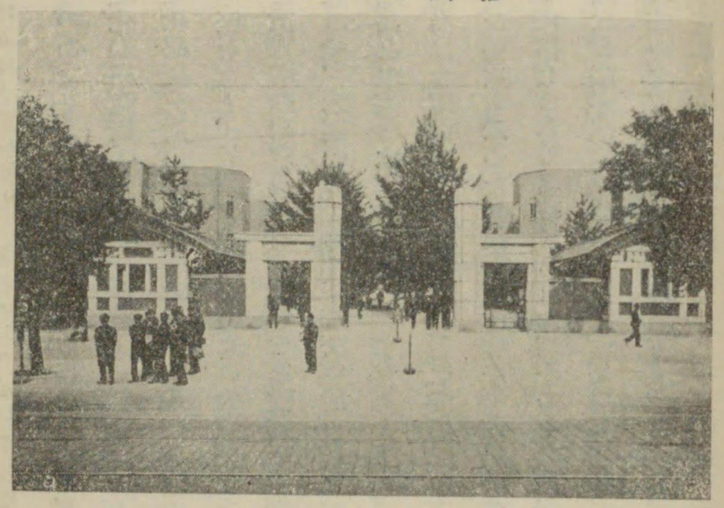
帝大と一高

本郷臺地の中部、藍染谷に臨む一帶の地を向ケ丘と云ひ、こゝに東京帝國大學及び第一高等學校があつて、一大學園を形成してゐる。

帝國大學はその敷地は舊前田侯の邸宅の跡で、その面積約五十萬平方米、雜沓してゐる市井の中に靜かな一仙郷を作り、特に復興後は學園として、新しい施設を誇つてゐる。現在こゝに法、文、理、工、醫、經の六學部が散在してゐるが、なほ近き將來にはすぐ隣にある第一高等學校が現在は駒場に設けられてゐる農學部と入換へになるので遠からず七學部が相隣接することになり、綜合大學としての價値を一層高めることになるであらう。

帝國大學は我が國大學中最も古い歴史を有するもので官界は勿論學界、實業界とあらゆる方面に多數の人材を輩出せしめ、社會に出した學士の數は三萬を超えてゐる。全く官學の總本山である。

帝國大學正門



屢々東京帝大の代名詞の如く用ゐられる赤門は、舊幕時代德川家から前田家に婚嫁された時、當時の慣例によつて土産として前田家に贈られた門であるといひ傳へられてゐるが、現在は醫學部に通ずる入口として利用されてゐる。

第一高等學校は帝大の北に隣つてゐる。柏葉の徽章に白筋入りの制帽は剛健有爲の向陵學生の誇として、又全國中學生の羨望の的となつてゐる。

これ亦古い數十年の歴史と傳統を誇つてゐるもので近く駒場に移轉することになれば、かの白線の破帽も本郷通りから影を沒して本郷の一名物を失ふことにならう。

毎年一回の記念祭は今もなほ東京市中年中行事の一として算へられ、當日は黑山の人垣を築くのであ

る。

このあたり帝大や一高を控へてゐるので下宿町や學者町が多い。

理化學研究所

理化學研究所は大正四年政府及び民間有志の莫大な寄附金によつて設立されたもので、近代科學の中堅をなし、近代文化の進歩に一大貢獻をなしつゝある理化學の研究所である。二十數箇の研究室と數百名の研究員を有して貴重な發明や發見に學界を賑はし、その規模に於ては獨逸のカイゼル研究所や、米國のカーネーギー研究所と肩を並べて世界に名をなしてゐる。

湯島とお茶の水

湯島は本郷區南部の總稱で、昔は湯島郷のあつた所でその南端の神田川に臨む所は東を昌平坂、西をお茶水と云つた。昌平坂は孔子の郷里の名で、五代將軍綱吉が孔子を祀る聖堂を上野忍岡からこゝに移してから名づけられた。今もその河岸を昌平河岸と云ひ、橋を昌平橋と云ふてゐる。更に又新に聖橋が出來た。

お茶の水は神田川の崖下の地下水の良水が、將軍のお茶の水に用ゐられたので地名となり、その上に架けた橋をお茶水橋と云ひ、やがて橋の北にある東京女子高等師範學校の代名詞となつたのである。

その一帶は我が國學術教育の淵源地である。即ち江戸儒學の道場であつた聖堂を紀元として帝國大學、高等師範、女子高等師範、教育博物館などみな茲にあつた。

其の後帝大は向ヶ丘に、高等師範は大塚に、教育博物館は上野に移轉し、殘る女子高等師範も又大塚へ移轉する。然し、依然として存するものは、儒學の親元とも云ふべき聖堂である。

聖堂は、大成殿、杏壇門、入德門等、頗る輪奐の美を極めたるもので聖壇には孔子像を中央に子思、顏子、曾子、孟子の四聖像が左右に配置されてあつた。

然るにかの大震災で入德門と左右の塀だけを殘して他は悉く烏有に歸したのである。

聖堂の西なる女高師のある所は昔の櫻の馬場で、神田明神の祭禮には三十有餘の山車がこゝで勢揃をして練り出した所、前の神田川は絶壁をなすところに樹木相交へ赤壁に擬して文人墨客が舟遊びをしたと云はれる。

すべては昔の物語となつた今では、兩岸に電車のひゞき相呼應し、聖橋、お茶水橋のモダン橋上、遠くは江東の煙とのぞみ、近く下町のビル街を見下す橋の舗道のすべるが如き自動車の疾走と泥くさい水上の傳馬船のコントラストは昔と今をそのまゝの縮圖、洋の東西、文化のへだたりに苦

笑をも禁じ得ないものがあらうか。

二　下町の殷賑

(1)　下町の概觀

下町は荒川や昔の利根川などが運搬し堆積して造つた沖積低地で、その山手臺地と接するところは南々西から北々東に直線的に走つてゐて、之を底邊として頂點を南東にもつ三角形狀をなしてゐる。

山の手が谷に刻まれてゐるに對し、下町は多くの堀や川で斷たれ、前者に坂路が多く後者に橋梁が多い。

この堀や川は下町に於ける重要な交通路をなすもので舟を通じて河岸に倉庫を並べ橋を中心として商業が榮えてゐる。

平坦な舗裝道路は縱横に通じ、あらゆる交通機關はこゝに集中して各地の貨物を呑吐し集散してゐるところが即ち下町の生きた姿である。而して之が妨げとなるものは次第に周邊に追ひやられるので、寺院は極めて少く神社も規模の小なるものあるのみ、

大きな邸宅の少い代りに、貸室の多いビルデングがある。震火災に見舞はるゝことが多かつたので建物は絶えず新時代の要求に順應してゐる。今でも上へ上へと延び、山手の平屋建の多いのに比べて、下町に三階乃至七八階のものが多い。

さて、下町と稱する區域は神田、日本橋、京橋、下谷、淺草の五區でその面積は全市の二五%であるが人口に於ては三八%を占め、その密度は山手の二倍餘に當る。

更にその性別構成を見ると、神田川以南では女百人につき男の超過四十人にも達するが、以北ではその差が極めて小い。

總人口に於ては、災前に比し八九萬を減じてゐる。これは區劃整理による宅地減少と、商店が營業所化し、住宅を市外に移したためで、晝間は夜間に比し三四十萬を增してゐる。

(2)　神田區

下町五區の中央にある神田區は、又全市から見ても、略〻その眞中に位置してゐる。

神田の名は、昔皇太神宮に奉る稻田を神田（みとしろ）と呼んだのに起つてゐる。今も區内に美土代町の町名がありその附近には多町（田町の轉）須田町、松田町、福田町、千代田町の名を有するのは、そのあたり一帶が水田であつた名殘である。

さても慶長五年德川家康が關ヶ原の一戰に於て、愈々天下に覇を成し、江戸が日本の覇都として政治の中心となるに及んで彼に追從する諸大名及び直屬の家臣は悉くその邸宅を江戸に設けることとなつた。之がため江戸は急激に發展し從つて市街地の擴張を必要とするに至つたので、幕府は同年全國七十有餘の諸侯に命じて、神田山（今の駿河臺）を削り濱町以南の海面の埋立を行はせ、日本橋、京橋と共に今日の神田區をなす地域を開拓したのである。

而して神田山一帶の高臺は主として德川氏麾下の臣が居り、東南の低地は多く市街地であつた。そこには多町の青物市場、柳原古物市場及び東龍閑町を中心とする干菓子製造組合等の商賈が榮え、今日に至るまでその特色を存してゐる。

かくの如く神田の發祥時代は、遠く家康創業の當時にあつて、爾來特色ある商業地域として發達を遂げて來たのである。

明治維新以後東京が學術の中心となるに及んで、本區は何時しか公私學府の集合地となり、「書生の神田」「學校の神田」として知られるやうになつた。

ためにこれ等學生街を繞つて、書籍出版業、製本業、古本屋、文房具店等の商賣が店を連ねて、他區に見られない現象を呈してゐる。

往時旗下の邸地であつて駿河臺の高地は、上流階級の住宅地たる外、著名なる幾多の病院存在し之亦本區の特徴である。本區は交通機關の完備せる點に於ては蓋し市内隨一といふも過言ではない即ち省線は中央線、山手環狀線共に貫通し、その停車場實に神田、秋葉原、萬世、御茶水、水道橋の五ヶ所を有し、又市電も縱横に敷設されてゐる。

加ふるに區劃整理によつて、駿河臺を南北に縱貫する幹線街路が新設され、聖橋によつて更に本鄕と連絡し、又九段より兩國に至る幅員三十三米の主要幹線道路大正通の完成によつて本區は商業地域として一段の活況を呈してゐる。

世に江戸つ子の中の神田つ子として一種の肌合をもつてゐた。これは旗本の跋扈に對して拮抗した町人の俠氣がもとでその名を殘したもので、今日の所謂社會奉仕的犧牲心と水火も辭せぬ勇猛心があつた。かの大震災に滿目たゞこれ燒野ヶ原に、沙漠のオアシスとも云ふべき和泉町、佐久間町の一廓の燒殘つたのは全くの奇蹟とは云ふものゝ神田子の意氣と沈勇を示したものであつて、將に帝都市民に殘された精神的復興の一指針である。

神田明神

神田神社は一に神田明神とも云ひ、神田の草分けである。今は湯島臺の南東端の崖上にある。

もとは神田橋内にあつたが天正十八年德川氏入國の時駿河臺に移され、明暦後今の地に轉じたのである。

大己貴命及び平將門を祭神とし、創立は非常に古く天平年間だと云はれてゐる。その祭典は神田祭と稱して、日枝神社の山王祭と共に江戸の二大祭といはれ、盛大を極めたものである。毎年九月十五日（六月十五日の時もある）の大祭には三十六番の山車を、木遣節と共に引き出し、各町を練り歩き、市民は棧敷をかけて之を見物したほどである。

神田の市場

神田には、江東市場とともに青物市場の代表とも云はれる神田市場が秋葉原驛の前にある。震災前までは多町にあつたものを、こゝに移して規模を大きくしたのである。

その歴史は遠く慶長年中、名主の河津五郎太夫と云ふ人が幕府の許可を得て内神田の多町に菜市を開いたのが始めで、江戸二百數十年の間幕府の御用をつとめ、千住、京橋、兩國、本所、駒込など七市場の觸先であつた。

明治以後は組合組織となり、日清戰役には野菜類を軍需品として提供したこともある。

現在は市設で敷地三萬四千平方米の鐵筋コンクリートの大建築で萬端の設備が完全してゐる。而して昭和三年からこゝで開業され、名も中央卸賣市場神田分場と稱へられ、取扱年額三十餘萬噸、その價格は蔬菜八九百萬圓、果物千四五百萬圓で、關係する問屋は二百數十軒、仲買人百三四十名に及んでゐる。

毎日黎明から繰込む牛車、リヤカー、自動車に、山の物、畑の物を山と積んでその賑はいは蓋し大東京隨一、更には東洋第一の青物市場で、かくその大をなした所以は、全く地理的位置が水陸の便を得たことゝ、東京の中心にあたるためである。

米穀市場も亦秋葉原驛に近い佐久間町にあり、大東京需要米の六七割はこゝで取扱はれる所謂神田川米穀取引所である。

舊幕時代、淺草米廩の設置された時開業した。この邊の米穀問屋業者は、毎月三四回その年貢米の入札拂を受けて、船便により神田川から江戸川へ上り、山手方面へ供給したのに始まり、明治十四年秋葉原驛開業せるや、東北米の移入となり益々繁榮を加へ、今では年取扱高二百萬俵に近い。

かの大震災に當つてその倉庫は燒失を免かれたので、貯藏米は東京市へ上納し、救護米に充てられたのであつた。

古着屋町と古本屋町

柳原といへば古着を思はすほどに古着屋が密集したところである。而し復興後は、時代に適合したレデーメード洋服專門の街となり、まざ〳〵と時代の反映を見せてゐる。

古着屋町は江戸時代に蔦澤甚内が創業した古着商が草分と稱され、後には「頭巾足袋、足許を見て頭から被せものをも賣る柳原」「柳原どうせ土手だと侮つて掘出物にはまる燒穴」の古着市場となつた。

明治の十四年頃は、此の邊一帶即ち日本橋、神田、淺草の三區の裏町には古着商が多く、中でも神田東龍閑町が最も盛んで特殊な營業街を作り市場組織となつた。

處がこの市場を貫流する運河が堀られたので市場は、岩本町、富松町、及び日本橋久松町の三ケ所に分離し激烈な競爭となつたが、岩本町が地の利と營業政策が宜しきを得て二者を從伏するに至つた。

同三十八年市區改正によつて道路が市場を貫通して、市場は新道路の兩側に折半さるゝに及び、從來の組合員に建物を買收されて東京市場會社が設立され、今は岩本町の一角に中央市場ビルを建て、多數の小室を有して組合員に貸してゐる。之が日本一と稱せられる衣類市場で、古着商、新衣類商、羅紗製品商の三種があり、組合員三百八十餘名を算し、顧客は遠く臺灣、樺太にまで及んで一日平均二千人を迎へてゐる。

その賣上高十萬圓以上に達し、今では日本橋の問屋中にも、その附近に移轉するもの次第に增加してゐる。即ちこの市場ビルを中心として西は須田町、東は富松町、南は元岩本町にかけて洋服專門街を作りその數二百軒に及び和服古着街に代つてしまつたのである。

古本屋町は駿河臺下から九段下までの神保町通りの西側に多い。こゝは全く日本一の古本屋街だ。殆んど家並み古本屋で、この裏通り及び水道橋に至る三崎町通りにも近年斯業が增加しつゝある。實に全市同業者の七割はこゝに集り、その數およそ百二十軒を超えてゐる。

此處は又古本ばかりでなく、出版書肆も日本一流のもの多くは神田にあり、大東京文化の中心をなすのみならず日本の先驅をなしてゐる。

神田は出版事業と共に教育においても、わが國現代文化の發祥地である。明治大學を始めとして日本大學、中央大學、專修大學その他各種の專門學校、中等學校が集中し、數萬の學生を擁して、本鄉の帝大に對し、科學の大淵叢をなしてゐる。

駿河臺とニコライ堂

駿河臺は湯島臺の續きであつたが、元和年内に堀り割つて區の南部を流れた江戸川の水を之に導

いて神田川としてから分離したのである。

この臺は高さおよそ二十米、ほゞ半圓形をなす臺地で昔は神田臺と云つた。かの下町埋築のときはこの岡を削つたのである。

慶長の昔は

「細き山路、叢を分け行くところに禪宗の小庵あり、人倫絶えてあたりに古狸一つ二つ見え……」

とあるやうな寂しい丘であつた。徳川氏入城後は城内紅葉山にあつた寺はこゝに移され、一帶の寺域となつてゐたが家康薨去後は駿河在書の御家人をこゝに移したので今の名がついたのである。

臺地の神田川にのぞむ所は數十丈の絶崖をなし、昔は舟によつて兩岸の交通をしたのであるが今ではお茶の水橋、聖橋によつて通ずるに至り、甚だ便利となつた。併し一方には鐵道の開通によつて斷崖の風致は失はれた。

駿河臺には名物のニコライ會堂がある。もと火消屋敷址にあつて、明治十七年三月、露國人大司教ニコライが創建し、同二十四年に竣工したものである。本堂、鐘樓の二宇に分れ、本堂は建坪三千アール、ドーム形の大屋根は高さ約二十六米、方錐形の鐘塔の先端までは三十八米もあると云ふ。

内部は金色燦然として崇嚴の氣に滿ちてゐる。丘上高く空を壓して立つその姿は建築當時の帝都に如何に偉觀を示したことであらうか、又所謂ニコライ堂の鐘の音なるものは、人々の胸に如何に深い感銘を殘したことであらうか。

かの大震火災にはこの會堂の内部を全部燒失したが、全世界の信徒の寄進によつて復興し、舊にも增して偉觀を放つてゐる。

會堂の東横には復興の大道が南北に通じて、北の聖橋に至つてゐる。聖橋の名は湯島の孔子の聖堂とこの基督聖堂の聖を取つたもので東西兩洋の二聖は、この聖橋の兩袂に安置され、永遠に我が帝都市民の風教に幸することであらう。

(3) 日本橋區

「東京日本橋」の稱號は、如何なる山間僻地のものといへども知らないものはなからう。かつては日本橋の名は東京の代名詞の如くに使はれてゐたものであつた。

その橋の名を區名とする日本橋區は、北は龍閑堀によつて神田區を界し、西は内濠をへだてゝ丸の内に隣り、東は大東京水運の幹線たる隅田川に面してゐる。而して隅田川と内堀を結ぶ日本橋川が區内を貫流して本區の大動脈をなし、その他幾多の堀割が通じて水の町をなしてゐる。

天正の十八年徳川家康入府するに及び、先づ街道に面し且水利に富む城東一帶を町家地域とする

計畫を樹て、河山の修築開鑿を始めとして、港を築き、市街の區劃を整へ、道路の新設をなすなど大いに市街の發展を圖り、本區の基を築いたのである。

その後幕府は市區の大改正をなし、寺院を移轉し、兩國橋、永代橋を架けて江東方面との交通の便を拓くに至り、商業地區として更に面目を一新し、豪商軒を並べ、塗屋、土藏櫛比し、眞に江戸繁昌の中樞として年と共に榮えたのである。

この狀態は明治大正まで持續されたのであるが、かの震災後一般經濟界の不況のため、更には又新興勢力の他區に幾代かの顧客を奪はるゝの感が漸く大となるに至つた。

然しながら、商工業界並に金融界に於ける本區の勢力は牢として一朝一夕に拔かるゝものではない。即ち日本銀行、東京株式取引所、東京手形交換所、東京米穀商品取引所等は依然として斯界の總元締をなしてゐる。

復興道路の系統を見るに、大體南北と東西に通じてゐる。日本橋通り、昭和通り、人形町通り、清杉通（金座通）は前者で、新常磐橋通り、芳町通り、新大橋通り、永代橋通り、八重洲通りは後者に屬してゐる。

これらの街路は又全國への街道の出入口となつてゐるので日本橋通りの東海道、中仙道、新常磐橋通りの奥州街道、永代橋通りの甲州街道はその主なものである。

土地の廣さに比べて大通りの多いことは商業の中心地たるを示すもので、昔から江戸の目貫と稱せられ、土一升に金一升と謳はれたほどで、今でも日本橋通りは一坪千二三百圓にも上り、市内の大商店、大銀行がこゝに集つてゐる。即ち營業收益稅納付者は市内で最も多く、その六二%を占め一萬圓以上のもの二百十名に達し、京橋區の約三倍、神田區の四倍以上となつてゐる。

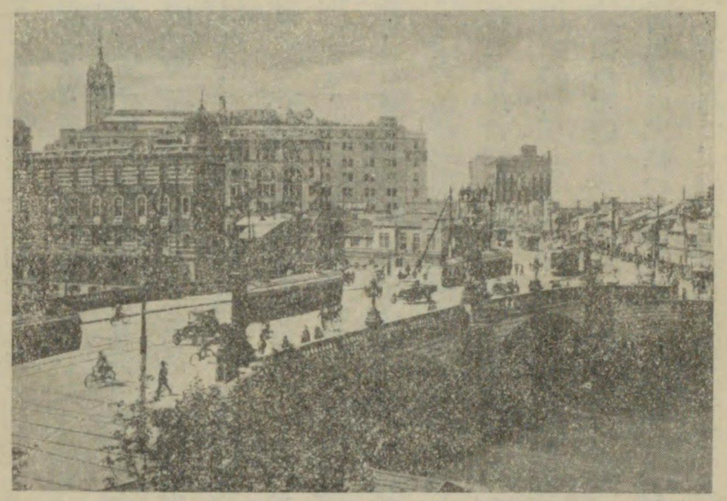
多額納稅者の數も亦全市の半ば以上を占めてゐる。これは云ふまでもなく本區には、株式業や問屋などが多いからで中でも日本橋通は一流の商店が軒並に續いてその中心をなし、昭和通り、人形町通り、小傳馬町通り、金座通りは之に次いで殷賑な商店街をなし、日本橋川筋は倉庫が多く、又株式米穀商品の取引所などが多い。

而して前述の通り江戸三百年來名物であつた魚市場は京橋に移り、銀行會社は丸の内に織物問屋は神田に移轉するもの多く、大日本橋も附近の地と平衡狀態になりつゝあるのである。

日本橋の附近

全國里程の元標のある日本橋は名の通り、日本の中心橋である。この橋が初めて架けられたのは慶長八年の春で、橋の兩袂には高札場や罪人の晒場、及び全國各地から集つた船が輻輳して江戸隨

日本橋



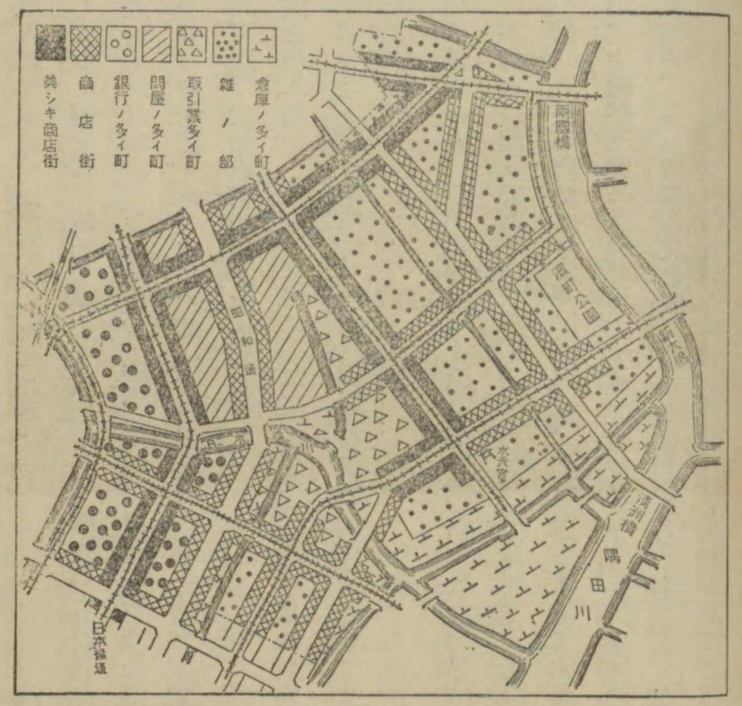
一　一舊市内の景觀

一の魚河岸をなしてゐた。

今の橋は明治三十九年の起工、四十四年の竣工で橋身は石材、左右の欄干には中央に約九米の青銅製燈柱を立て、之に同じく青銅の麒麟を安置し、兩端には約六米の燈柱があつて獅子像を置いてある。その電燈は總數四十二燭光四千二百、祝日大祭日には全部が點燈され、四邊は晝を欺くばかりである。

このあたり所謂江戸の眞中で、大厦高樓軒を並べて、いとも豪勢を誇つてゐる。即ち橋の北側では、西に三越、三井合名、三井信託、三井物産、不動ビル、更にこれ等建物の西方には、日本、正金、三井山口、昭和の各銀行。東に山本、にんべん、いわしや、博文館、更にその東方には紙類、砂糖、鰹節の大問屋が集つてゐる。

日本橋區地域大觀略圖



二　下町の殷賑

又橋の南方では、伴傳、西川、近江屋、白木屋、黑江屋、中將湯國分商店、榮太樓等の老舗や、愛知、川崎、第百、野村、住友、川崎貯蓄などの各銀行、千代田信託日本生命保險等の會社が兩側に相並び、或は空高く、或は間に廣く而して何れも華やかに飾られてゐる。

日本橋の川下には江戸橋がある橋の幅四十四米、一見橋か道かを疑ふほどの廣さで、中央が自動車その左右が自轉車と歩道とからなり橋の兩袂には綠樹茂り更に橋の

南と北とには道路公園が設けられてゐる。

そしてその兩側には昭和新興の大建築が名も昭和通と負けじ劣らじの氣勢を示してゐる。即ち南方三菱倉庫に日本橋局を最先に、上野、玉塚、山叶の各株式商店、加賀ビルをはじめ、福壽、太陽萬歳の各生命保險ビル、大正、第一の各製藥ビルなどが立ち並び、北方には小塚會社、藤澤樟腦、桃谷順天堂、六盟館書店などがある。

三越と白木屋

日本橋の北と南に相對峙してゐる二大百貨店、これが云ふまでもなく三越と白木屋である。

今その昔をたづねんに、

三越は貞享の頃、伊勢の人三井九郎兵衛が越後屋號で間口九間、奥行四十間の長屋造の新店を出したのが抑々の起りである。「萬現金懸値なし」は當時の店の定めで四十餘人の利發な手代を置き、一人一役、機敏の商法に年と共に繁昌し、その後幾多の變遷を經て今日に及んでゐる。

明治三十七年三井の越後屋を二字につめて三越と改め、會社組織となり、呉服物ばかりでなく裝身具を初め、あらゆる物質を販賣してゐる。實に我が國百貨店の魁である。

現今は地下室を合せて八階、外に別館もあり、更に銀座と新宿とに分店を有し、その店員約五千人、一年賣上高約九千三百萬圓と推定されてゐる。

白木屋は、江州長濱の人、大村彦太郎を開祖とし、寛永の昔の創業である。彦太郎の家は先代までは京都で白木屋と云ふ材木問屋を營んでゐた。そのマークには曲尺を交叉し一文字を添へたもので今でも之を用ゐてゐる。明治に至つても、三越と共に二大デパートと世人に稱せられ、震災後は更にモダーンの豪壯な新建築をなし、市電日本橋交叉點の一角に聳立してゐる。

同店は郊外方面に分店を置いて活躍してゐる。

兜町と蠣殼町

その昔八幡太郎義家が奥州征伐の途次、こゝを通り暴風に出遭ふや、鎧を沈めて龍神に祈つて無事なるを得たので、征伐の歸途、その近くに塚を築き鎧を埋めて神を祀つたといふ故事がある。兜町の名はその故事から出たもので、鎧橋は即ち鎧を沈めた處であると云ふ。

現在ではこゝに東洋一の東京株式取引所が置かれてある。取引所に入ると、構内四隅には長期、短期、實物、國債などを取引くステージがあり、中央廣場にはガラスで圍つた數十のボックスがあつておの〳〵電話機があり、附近には數百の取引員が雲集して手振り面白く賣買を行つてゐる。而してその値の定まる毎に擊柝によつて各種の値を表示する。一隅には數百の賣買客が片唾を飲んで

自己の委托した株式賣買の結果を見守り、擊柝の一つ一つに或は喜び、或は失望する。

乃ち一朝にして數萬、數十萬の成金となるものあれば反對に祖先傳來の財を失ひ、又積年の富を皆無にするといふ人生の悲喜劇がこの一場面から發するのである。

東株ビルはその取引所員の合宿所として建てられたもので、附近一帶は株式商店街をなしてゐる。東株取引所と日本橋川を隔てゝ蠣殼町がある。昔は牡蠣の殼の堆積した海濱や、漁師の小網の干場であつたと云ふが今は米穀取引所、砂糖取引所、少しく北に綿糸取引所などがあり、日本橋川及び箱崎川沿ひには倉庫が立ち並んでゐる。中にも蠣殼町の東米取引所は、これ亦東洋第一で相場の本舞臺として、蠣殼町の名を知らない人のないほど大衆化されてゐる。この附近一帶も亦取引店が軒並にあり、俗に米屋町と稱してゐる。

立會時は午前午後の二回あり、自動車群をなして集り來る。あの辻、この横丁は黒山の人である。その規模は東株市場に比しては小なれども、組織は同樣であつて、こゝでも一刻にして貧富の境を下してゐる。

蠣殼町には五の日毎に緣日で賑ふ水天宮がある。震災後はコンクリート建銅葺、そして白木造のモダーンなお宮となつた。その參詣者は踵を接し、賽錢の多いこと蓋し大東京のお宮中第一と稱せられてゐる。

隨つて門前町の人形町も賑しく下町銀座と云はれ、美しい店が並んでゐる。中でも呉服、洋品、小間物、菓子などの店が多く、中央ビル、日鮮會館の大建築物もその中に峙つてゐる。

金座通

清洲橋から淺草橋に至る間を特に金座通りと云ふ。

昔は金座に運搬する材料を濱町河岸から陸揚し、そこに金座の分地があつて倉庫や役宅もあつたので、今度區劃整理が出來、三十三米の大通りが通じたため、附近の人々の希望からこの金座通りの名がつけられた。これは銀座通の繁榮に對抗せんとの企である。

この大通の左右には街路樹立ち並び、石造りの二階三階建が井然と之に面し廣々として明るい市街である。

濱町公園はこの大通に向つて門を開き、プラタナスの瀟洒な並木と大噴水を正面に左の明治座亦市内一流の大劇場で歌舞伎座とその名を爭つてゐる。

濱町は昔は海濱であつたが今は日本橋での住宅地をなしてゐる。濱町公園は復興三大公園の一で面積四萬四千平方米あり、中に大プールがあり隅田河畔の涼味は三代の夏を忘れしめ、夜は濱町踊

りに滿都の市民を吸ひつけてゐる。

金座通と淺草橋で會する西方の大通は小傳馬町に至る新常盤通で、横山町、馬喰町の一帶には小問物屋が多く、店から街頭に、木箱に入れた荷物が山と積まれ、トラックや、自轉車によつて集散されてゐる。番頭の指圖により立働く丁稚の動作の敏捷さ、さすがは東京の商權を握る中樞であると肯かせるのである。

昔は奥州街道の玄關として大傳馬町、小傳馬町、さては旅籠町、馬喰町など、何れ宿驛の名殘であるが今は上述の如く名は實を失つて問屋業者が之に代つてゐる。

(4) 京橋區

京橋區も亦京橋の名を區名としてゐる。日本橋區の南に接して西は内濠、東は隅田川、南は汐留川を圍らし、區内亦縱横に船入の運河を通じて市内第一の水の街となつてゐる。その土地の多くは慶長以後の埋築にかゝる新開の地であるが日本橋區と共に大商業地區であり、殊に近年は日本橋區から魚市場も移轉して來り、芝浦の築港と相まつて益々繁盛を來し、將來は月島埠頭の實現によつて東京港の中心地となつてこゝに大東京の商業中樞の地たらんとしてゐる。

本區の最も繁華なる處は、日本橋より東海道に沿つた京橋新橋間の銀座通りで東京の代表街をなしてゐる。

歌舞伎座

街は百貨店の町であり、第一流の小賣店の町であり、又、カフエーの町である。

銀座通りの兩側、昭和通り附近は第二流の商業地であり、築地附近新富町邊も住宅地を交へて商業的には第二流とも云ふべく木挽町の一角は歌舞伎座、新橋演舞場、東京劇場及び之に近い築地小劇場を加へて市民遊樂の一中心をなし、更にこの南方は海軍大學、同軍醫學校、水路部等、海軍關係の官公署が多く之に接して東京市中央卸賣市場築地本場がある。

學校病院等の所在地としての明石町を經て、住宅と商家との雜居せる鐵砲洲を過ぎると八丁堀の地である。こゝは商品が一般に廉價で商家としては二流の家が多いが殷賑の點では敢て銀座に劣らない。

將監河岸には東京灣汽船會社の發着所があり、運送業者多く、靈岸島一帶には倉庫が多い。

本區は、江戸時代に於て武家屋敷も相當多かつたが日本橋區と共に主たる町家區域で東海道に沿ひて、日本橋に續いて町家が連り、又新川邊には酒問屋、築地木挽町附近には諸侯の邸宅又は寺院あり、八丁堀を中心として町奉行附の與力同心の屋敷多く、複雜なる一種獨特の町々を形成してゐた。又何時しか此處は町人文化の榮ゆる處となり、柳町、木挽町、新富町を中心として遊廓、風呂屋、歌舞伎芝居等が盛んとなり、誠に情緒纏綿たるものがあつた。

然るに世は王政復古、轉て新興日本の江戸が東京となるに及んでは、從來蟠居してゐた武家屋敷は、あたら原野と化し、一時一入凋落の觀があつたが、帝都として確立さるゝと共に果然商業地域として、本來の面目を發揮するに至り、歐米文化移入の魁となり、遂に今日銀座の盛觀を見るに至つたのである。

銀座の賑ひ

日本橋から京都への街路即ち東海道を上るに第一番に渡る橋といふので京橋の名がつき、川の名も京橋川と呼ばれた。この橋から北は京橋通りで日本橋區との界の八重洲通りのあたりは中橋廣小路と云ひ、その昔江戸川の末流がこゝを流れ、その橋を中橋と云つた。その南に南傳馬町がある。これ亦東海道傳馬の中繼で、日本橋區の傳馬町と南北相對してゐる。これらは復興の町名整理で一帶を統轄して京橋町と云ふやうになつた。

京橋から南は即ち銀座通りで、松屋を始め銀座三越、銀座松坂屋の各百貨店、天賞堂、服部各時計店、伊東屋文具店、玉屋機械店、木村屋パン店、佐野屋足袋店などの大商店や、銀一ビル、明治屋ビル、瀧山ビル等の大建築、或は目もまばゆい美しいショウウキンドが通りの兩側に並んでゐる而してその前の歩道の散歩客は宛ら織るが如く所謂「銀ブラ」の常套語をなしてゐる。殊に夕刻から夜の九時十時頃までが最も銀ブラ客の出盛りで、一分間に五十人乃至百人の人波が動いてゐる。

數ある商店の中で、カフェーとバーは近年著しくその數を增し近代的色彩を與へてゐる。即ち裏町通りを加へた大銀座街にはその數無慮百四五十、女給五十人以上を使用するもの十を超ゆるの盛況で、夜の街、灯の街を歡樂享樂の街と化したのである。

抑々銀座の名は、その昔慶長十七年駿府にあつた銀貨鑄造所即ち大銀座を今の銀座二丁目に移してから、俗間で銀座と呼ぶやうになつたのである。その後寛政十二年になつてから、銀座は日本橋の蠣殼町に移轉したが、その名だけはそのまゝに存して、明治以後今日の盛名をもたらしたものである。

即ち明治五年鐵道が開通して新橋驛（今の汐留驛の所）が開かれると、銀座は帝都の玄關への廊下となり、乘合馬車や鐵道馬車もこゝから仕立てられるやうになつて銀座の名は一段と異彩を放つに至つた。時恰も火災に見舞れて一帶焦土となるや、政府はこゝに英人技師の設計による歐洲風の市街を建設した。街路は巴里にならつて石だゝみとし、櫻や松や楓の並木之を挾み、兩側の家屋は倫敦に模した煉瓦造五百棟が整然と並び、丹青相映じ、平坦なる道路には戞々たる馬車の音ひゞき歩道には往來の人織るが如くであつた。其の後見世物や夜店の進出となり、築地の外人居留地と相俟つて洋品店、洋服店、洋食店などが出現した。

その頃もとの街路樹は枯れて柳に代へられ、「柳の銀座」の稱が生れ、更に勸工場が現れ、今や百貨店の集合地となり、時代の尖端から尖端を進んでゐるが、何時に變らないのは夜の街、灯の街である。

木挽町の界隈

銀座の東方に三十間堀川があり、これから東方築地川の間は木挽町と云はれ十一丁目までもある廣い區域である。家康の江戸城改築の砌、こゝに木挽職を置いたのがこの名の起りである。

江戸時代には森田座、山村座などの芝居小屋があつたが、現在でも、歌舞伎座、東京劇場、新橋演舞場などの大劇場、日本映畫劇場（銀座）邦樂座（有樂町）帝國劇場（丸の内）等、帝都一流の劇場はこのあたりに點在して、北の淺草、西の新宿と並び南の娯樂街となつてゐる。

歌舞伎座は明治三十二年の設立で、團十郎、菊五郎、左團次等の名優が出演し、梨園の王座を占め、年觀覽客四十萬を超ゆると云ふ。現在の建築は大震災後大正十四年の竣工にかゝり洋材和風の床しき構造である。

かゝる娯樂地域に、これは又誠にふさはしからぬ商工省と貯金局がある。

築地は萬治年間の埋築にかゝり、こゝに慶應三年から明治三十二年の内地居住許可のあつたまで三十餘年間外國人の居留地があつた。今尙明石町には天主教會、聖路加病院などがあつて當時の名殘を止めてゐる。

その二丁目には我が國活版業の元祖本木氏の創業になる築地活版所があり、又四丁目には海軍々醫學校及び海軍病院があり、その東方には東京中央卸賣市場、南方には濱離宮がある。

東京の魚市場

日本橋と云へば直ちに魚河岸を思ひ起すほど、兩者は歴史的に密接な關係があつたが、今や魚河岸の名は魚市場に代り、場所も京橋は築地の海岸に移轉してゐる。

現在まだバラック建で、三十五の棟が立並び、それに問屋や仲買人が陣取つてゐて、之に未明から集つてくる二萬數千人の買出人に、大聲に叱呼しながら魚類を賣るので、最近一日の取扱高は鮮魚約七百萬噸、價格七千萬圓に達し、陸には約一千臺の自動車と五千百臺の自轉車、五百臺の手車が入り、海には約七十隻の船が着いてゐる。

その移入先は千葉、神奈川、靜岡を最として約四割、三陸及び北海道が之に次ぎ約三割である。

その輸送路は鐵道便が三分の二で隅田川、汐留、兩國の三驛で取扱ひ、海運が三分の一である。

買出人中には遠く横濱、八王子、千葉、前橋などから來る者もあり、又氷詰として長野、山梨、栃木等にも送出してゐる。

さても魚河岸が日本橋に開かれたのは慶長年中のことで、佃島の漁夫森九右衛門と云ふ人が幕府の許可を得て魚市場を起したのがその始めで、爾來三百年間に亘つて市の内外へ鮮魚を供給し日本橋繁榮の一大原因を作してゐたのである。

月島の將來

月島は隅田川の川口にあり、その廣さおよそ九十萬平方米、横に通ずる三條の堀河によつて石川島及び佃島、一號地、二號地、三號地の四つに區分されてゐる。

月島は昔、隅田川の土砂堆積によつて出來た洲であつて、その高い處は水面に表はれて三國島の稱があつた。

慶長年中攝津佃島の人、森某なるものが漁民を率ゐて移り住むに及び佃島と稱し、北部の地は幕府の船手頭石川重治の受領地たるより石川島の名となつた。又一號地及び二號地は東京灣浚渫の土砂を以て明治二十年から同二十七年に亘つて埋立てゝ築成されたものであり、新佃島は同二十三年に起工し、二十九年に埋立が完成されたもので、三號地は大正二年に竣工したものである。

又月島の東にある四號地、俗に云ふ新月島は面積およそ八十萬平方米もあり、大正五年に完成した埋立地である。

佃島は最も早くから住民があつて漁業に從事してゐたことから佃島の名をなし、石川島には職工千七百人を擁する東京第一の造船所があり、新佃島には自動車製作所（三六一人）がある。

一號地と二號地の一部は市營住宅地となつてゐるが、新佃島と共に一般住宅地と工場及び倉庫などが多く立並んでゐる。

さて現在の月島は工場地として活躍すると同時に居住者も年々增加して既に數萬に及び、又相生橋を經て、市電とも通じてゐる。併しながらその成生當初に於ては、交通の不便、飲料水の缺乏風

水害等によつて移住者の困苦は一通りでなかつた。從つて今日の發展も遠くはその先住者によつて基を築かれたものである。

東京市は更にその發展を期するために、築港との間に大可動橋を架せんとしてゐるのである。

四號地は未だ何等の設備も持たないが、月島の一、二、三號地からは橋を以て通じて居り、昭和六年夏はそこに海上博覽會が開かれた。將來は東京港修築計畫により、南西と南東に擊船岸壁を造り、六千噸級汽船を擊留し、岸壁に沿つて上屋を設け、更に越中島驛から臨港鐵道を引込んでこゝに月島埠頭が形成されることになるといふ。

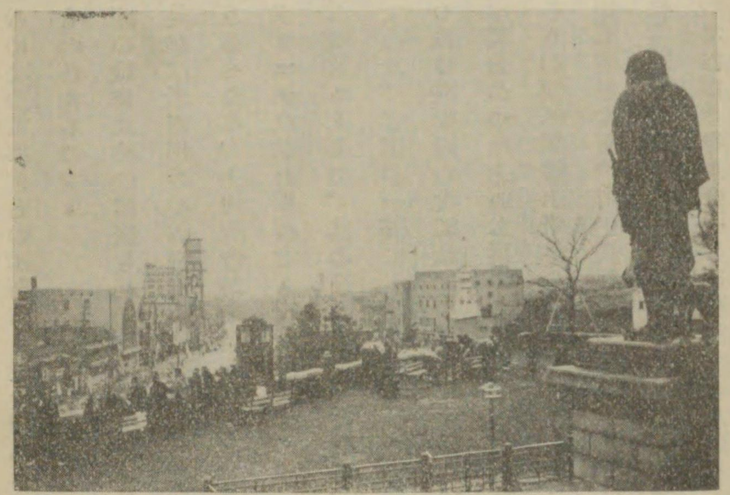
(5) 下谷區

下谷區は神田區の北に續いた低地と、山の手の丘陵が下町に瀕する場所即ち上野臺から成立つてゐる。この臺地は上野公園の森となり、低地は一帶の商業地となつてゐる。

「花の雲、鐘は上野か淺草か」

東叡山寛永寺の鐘の音、これこそ寛永の昔、德川三代將軍家光が上野の森に塋域を定めてから、時は流れて二百有餘年、來る春毎に風流子の詩情をそゝり來つた鐘である。その響に呼び覺されて榮え來つたのがこの下谷區であらう。

上野公園より廣小路を望む



廣小路と稱する町は、淺草に兩國に中橋に其の他にも有るが、祖師は日蓮に奪はれ大師は弘法に奪はれたやうに、全國に知られてゐるのは上野を背景とする下谷の廣小路である。

この上野廣小路は往時より寛永寺を唯一の對象として榮え續け、本區繁榮の中心をなして來たのである。然るに戊辰戰後に於て、彰義隊の可憐なる奮戰の舞臺とされこの繁榮も戰塵の内に沒し去られた如くであつたが、上野驛の設立と、寛永寺境内が上野公園として復活するに及び舊時に幾倍する勢を以て盛り返して來たのである。而してこゝに東京驛、上野驛間を結ぶ省線の連絡せるあり、又地下鐵道は上野を起點として淺草、神田に通じ、日に月に其の隆盛を加へ帝都北門に於ける交通の焦點たるは勿論、

繁榮の中心たらんとしつゝあることを考へる時、六十年前のことを思ひ浮べて誠に今昔の感に堪えないものがある。

上野の戰爭は時代が新らしくて記憶が生々しい上に、戰爭と云ふのは餘り大袈裟過ぎる小舞臺であつたが、三百年の長い將軍政治の沒落に殉した江戸の武士のラストスパークであつたから、戰局は小さかつたが、歴史的意義は深かつた。戰國時代の群雄割據の一興一亡の亂戰混戰よりも遙に悲壯なドラマチツクのものであつた。

話が横道へ入るが、其の日の總攻擊は數日前から豫想されて此の界隈は人心惶々として皆逃支度をしてゐた。官軍が一擧に上野を屠るべく砲列を布いたのは丁度今の松坂屋あたりだつたさうだ。官軍の總參謀大村益次郎は江戸全市を燒拂つて江戸城總攻擊の心算であつたが、城明渡しと聞いて非常に殘念がつたといふ果斷の英雄であつたから、下谷一圓を火にする位は、それこそ朝飯前であつたらうが、彰義隊が脆くも總崩れとなつたので民家は多少の砲火を浴びたが危なく總燒拂ひとなる兵燹を免がれた。山王臺なる彰義隊の墓碑は南洲の銅像と共に今も昔を物語つてゐる。

由來古戰場は凄凉索寞、敝鬼啾々を伴ふが李華以來の約束であるに反して上野は其の後年々殷賑を極めてゐる。それは一つは戰跡が餘り新らしいのと江戸時代からの四季の遊覽地であつたからであらう。殊に櫻は向島とともに江戸中の二大名所として全國的に知られてゐた。

明治十年の博覽會の開場式は、たしか上野の戰跡の血を洗ひ流して新らしい文明の生彩を冴返らせた。

今にして考へれば夫程でも無かつたらうが、酸漿提灯を八重文字に釣るして晝夜間斷なく花火をポン〳〵打上げたお祭り騷ぎは今日の百萬燈のイルミネエションよりも市民を魂消さした。薩南の風雲が收まつたばかりの人心のなほ恟々たる不安を鎭靜するための政策もあつたらうが、十年前の戊辰の修羅場に一大歡樂鄕を展開して滿都の市民を踊躍せしめたのは確かに上野新繁昌記の一大紀元であつた。

上野公園と寛永寺

上野臺はもと忍ケ岡或は忍ケ森といつて松原や茅原のある寂しい所であつたが德川家康の入府後天海僧正がこゝを開いて京都の比叡山に擬して東叡山と呼び、寺を建てゝ寛永寺と稱した。

その工事は秀忠の時、諸侯に課役を命じて着手してから家光に至つて落成したので全山悉く寛永寺の境内とした。今その寺の構造を見るに、中堂は東西二十五間、南北十八間、高さ十丈八尺、大屋根の箱棟には直徑三尺、破風には直徑四尺五寸の金の葵の紋をつけ、堂外には百十六間の廻廊を

繞らし、中門には後水尾天皇勅額寛永寺をかゝげた。

中堂の東には天海僧正の建てた番神堂、前には土井利勝の建てた三重塔、西には徳川光圀の建てた輪藏があつた。

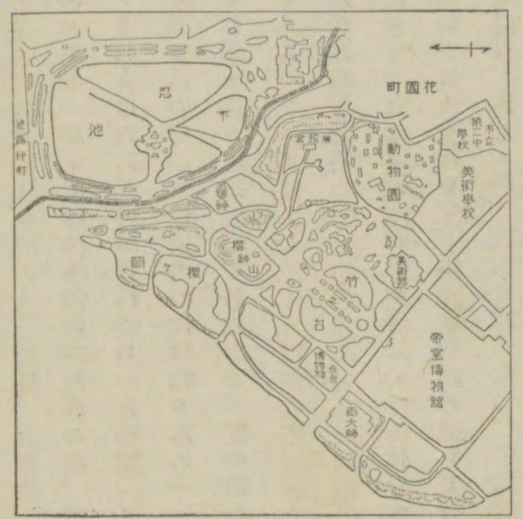
山門は文珠樓とも云ひ東西十三間五尺、南北七間、高さ七丈八尺の壯麗なものであつた。

其の他、堂塔伽藍、結構の壯、輪奐の美を極め、實に關東第一の大伽藍であつて天台宗關東總本山とした。

家綱薨去の後寺内に靈廟を建て增上寺と共に將軍の廟所となり、芝山門と並び兩山と稱せられたのである。

然るに明治の初年彰義隊の戰爭による兵火にかゝり、その大半は燒失した。明治六年公園とされ、永く帝室の御料地であつたが大正十三年今上陛下の御成婚の記念として東京市へ御下賜になつたもので面積實に六十一萬平方米、東京市最大の

上野公園



公園である。

今や往時の記念には舊本坊の博物館正門、清水觀音堂、慈眼堂（兩大師）大佛、穴稻荷、東照宮石の大華表、佐久間大膳亮の大石燈籠、五重塔、大水盤、德川家の第一第二の靈屋、唐銅燈籠、石燈籠等があり、樹木には博物館庭園の旭の松、同門内の稚兒の松（幹圍一丈三尺八寸高さ凡そ七丈八尺）東照宮境内の大槻、動物園前の大椎樹（幹圍一丈七尺高さ凡そ五丈）摺鉢山の大槻、二本杉（動物園前の原）一の靈屋内の大樟等である。

此等も年々歲々に衰へつゝあるので、忍ケ岡の上野公園は往事をしのぶ忍ケ岡と名のみを殘すに至るであらうし、忍ばずの池も忍ばずの名に背きて忍ぶの池と盆池に其の名を留むるであらう。

「井の端の櫻危し酒の醉」の名句に名高い秋色櫻は清水堂の横にあり、句主の秋色女は其角門下の才媛にして、日本橋堀江町の菓子屋大目氏の女なりといふ。本名はお秋、この發句は十三歲の春の花見の句、秋色女は享保十年五十七にて世を去つたと。上野御門主いたく其の詩才を賞し秋色の俳號をも賜ひしなりと。

櫻ケ岡の北方に一つの小山がある。摺鉢山或は天神山と云ひ、昔北條氏康が五條天神祠を立てた所と傳へられてゐて、その北方に東京自治會館がある。